

た き さ と
滝里遺跡群区

芦別市

滝里 2 遺跡・滝里 3 遺跡・滝里安井遺跡(3)・滝里 9 遺跡(2)・
滝里11遺跡(2)・滝里12遺跡・滝里16遺跡・滝里17遺跡・
滝里18遺跡・滝里20遺跡・滝里26遺跡・滝里29遺跡・滝里32遺跡(2)

——石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査——

第 1 分冊

本文篇

平成 8・9・10年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1 滝里遺跡群遠景（北から 左遠方は富良野市街）



1 滝里安井遺跡P-45遺物出土状況（南から）



2 滝里安井遺跡P-45出土クマ形石製品



1 滝里安井遺跡P-45出土遺物



1 滝里11遺跡H-1完掘（北から）



2 滝里11遺跡H-1出土土器



1 滝里29遺跡出土押引文土器



1 滝里12遺跡P-5遺物出土状況(南から)



2 滝里12遺跡P-18遺物出土状況(南から)



1 滝里12遺跡 P-20遺物出土状況（東から）



2 滝里12遺跡 P-21遺物出土状況（南西から）



1 滝里12遺跡 P-25遺物出土状況（東から）



2 滝里12遺跡 P-28遺物出土状況（南西から）

例 言

1. 本書は北海道開発局石狩川開発建設部が行う石狩川水系滝里ダム建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成8～10年度に実施した芦別市滝里2遺跡、滝里3遺跡、滝里安井遺跡、滝里9遺跡、滝里11遺跡、滝里12遺跡、滝里16遺跡、滝里17遺跡、滝里18遺跡、滝里20遺跡、滝里26遺跡、滝里29遺跡、滝里32遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は平成8年度は第1調査部第2調査課が、平成9年度は第1調査部第2調査課と同第4調査課が、平成10年度は第1調査部第4調査課が行った。
3. 本書の執筆は遠藤香澄、村田 大、愛場和人、影浦 覚、佐藤 剛、酒井秀治、佐藤和雄、広田良成、立田 理が、全体の編集は遠藤香澄が行った。
4. 現場の写真撮影および遺物の撮影は各遺跡の担当者が行った。ただし滝里11遺跡、滝里29遺跡の遺物の撮影は有限会社写真事務所クリークに委託した。
5. 残存脂肪酸分析については株式会社ズコーシャに依頼した。
6. 放射性炭素による年代測定は併地球科学研究所に依頼した。
7. 黒曜石製遺物の原産地同定および水和層測定、蛇紋岩製玉の定性分析は京都大学原子炉研究所の薬料哲男氏に依頼した。
8. 滝里2遺跡、滝里3遺跡、滝里12遺跡、滝里16遺跡、滝里17遺跡、滝里18遺跡、滝里20遺跡、滝里26遺跡の地形図作成、滝里遺跡群の空中撮影は㈱シン技術コンサルに委託した。
9. 滝里安井遺跡出土の「クマ形石製品」の石質鑑定は東京芸術大学保存科学教室非常勤講師建石徹氏に依頼した。
10. アンモナイトの鑑定は三笠市立博物館の早川浩司氏に依頼した。
11. 土器、石器の実測トレースは小林晴美、藤内まゆみが、石製品の実測トレースは柳谷りさ、細田美佳子、濱中聡子、岡田千秋、大森佐知子、東田久美が行った。また平成9年度調査した滝里12遺跡の石器、平成10年度調査した遺跡出土の石器の実測、トレースについては㈱エーティック環境文化研究所に委託した。
12. 出土資料は調査終了後芦別市教育委員会で保管する。
13. 調査に当たっては下記の諸機関および人々のご協力、ご助言をいただいた。

芦別市教育委員会、芦別市星の降る里百年記念館 長谷山隆博・今 貞子、富良野市郷土館 杉浦重信・澤田 健、深川市教育委員会 葛西智義、帯広百年記念館 北沢 実・山原敏朗、斜里町立知床博物館 金森盛一・松田 功、常呂町教育委員会 武田 修、江別市郷土資料館 直井孝一・野中一宏・稲垣和幸・兼平一志・佐藤一志、平取町教育委員会 森岡健治、北広島市教育委員会 遠藤龍弘、北海道開拓の村 野村 崇、北海道開拓記念館 門崎充昭、三笠市立博物館 早川浩司、国立歴史民俗博物館 西本豊弘・設楽博己、東京芸術大学 建石 徹、東京大学常呂実習施設 佐藤宏之・熊木敏朗、盛岡市教育委員会 神原雄一郎、盛岡市教育委員会 軽部達也、新潟県文化センター 芳賀英一、仙台市地底の森ミュージアム 斎野裕彦、北海道新聞社芦別支局 塚田 博、芦別滝里会、芦別市 安井幸雄・中村栄治・合田正義、由仁町 遠藤達雄 青木・岩田・中山特定建設工事共同体

凡 例

1. 遺構については本文中および図、表中では次の略号を使用した。
H：住居跡 P：土墳墓・土坑 TP：Tピット F：焼土 S：集石
2. 遺構図中の○は土器、▲は剥片石器、△は礫石器、●はフレイク、□は礫、礫片をそれぞれ示している。また必要に応じてシンボルマークを使用する場合は個々に凡例をつけた。
3. 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺 構	1 : 40	遺物出土状況図	1 : 20
復元土器	1 : 3	土器拓本	1 : 2
土・石製品	1 : 2	剥片石器	1 : 2
石斧とその関連の石器	1 : 2	台石・石皿	1 : 4
台石・石皿以外の礫石器	1 : 3		
琥珀製玉・石製品	1 : 1	蛇紋岩製玉	1 : 2
4. 遺物写真は復元土器をのぞき原則として1 : 2である。ただし滝里11遺跡の土器片の写真は1 : 3である。任意の縮尺のものは必要に応じてスケールを入れてある。
5. 遺構の規模については次の要領で示した。一部破壊されているものは現存の長さを()で、不明のものは—で示した。

住居跡・土坑・Tピット
確認面での長軸の長さ×短軸の長さ／底面での長軸の長さ×短軸の長さ／最大の深さ（単位m）
石囲い炉・集石・焼土
確認面での長軸の長さ×短軸の長さ／最大の深さ・厚さ（単位m）
小柱穴
確認面での長径×最大の深さ（単位cm）
6. 遺構図中の方位は真北、細数字は標高（単位m）を示している。

目 次

カラー図版

例言・凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次（本文編）

I 調査の概要	
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	2
4 調査の概要	3
II 遺跡の位置と環境	
1 位置と環境	11
III 調査の方法	
1 発掘区の設定	13
2 発掘調査の方法	14
3 整理の方法	14
(1) 土器	14
(2) 石器等	14
4 遺物の分類	15
(1) 土器	15
(2) 石器等	17
IV 滝里2遺跡の調査	
1 調査の概要	23
V 滝里3遺跡の調査	
1 調査の概要	27
2 出土遺物	27
VI 滝里安井遺跡の調査	
1 調査の概要	31
2 基本土層	33
3 遺構と遺構出土の遺物	37
(1) 土壌	37
(2) 集石	48
(3) 焼土	49
4 包含層出土の遺物	50
(1) 土器	50

(2) 石器等	65
遺構一覧表・遺物一覧表	73
Ⅶ 滝里9遺跡の調査	
1 調査の概要	81
2 基本土層	84
3 遺構と遺構出土の遺物	85
(1) Tピット	85
(2) 集石	85
(3) 焼土	85
(4) フレイク集中	87
4 包含層出土の遺物	88
(1) 土器	88
(2) 石器等	100
遺構一覧表・遺物一覧表	105
Ⅷ 滝里11遺跡の調査	
1 調査の概要	111
2 基本土層	114
3 遺構と遺構出土の遺物	115
(1) 住居跡	120
(2) 土塋	128
(3) 石囲い炉	164
(4) 焼土	170
(5) 小柱穴	176
4 包含層出土の遺物	177
(1) 土器	177
(2) 石器等	200
遺構一覧表・遺物一覧表	211
Ⅸ 滝里12遺跡の調査	
1 調査の概要	225
2 基本土層	230
3 II層の調査	233
(1) II層の遺構と遺構出土の遺物	233
1) 土塋	233
2) 集石	240
(2) I・II層出土の遺物	281
1) 土器	281
2) 石器等	292
4 V層の調査	305
(1) 調査の概要	305
(2) 基本土層	305

(3) 遺構と遺構出土の遺物	308
1) 土壌	308
2) 焼土・フレイクチップの集中域	308
(4) V層出土の遺物	321
1) 土器	321
2) 石器等	328
遺構一覧表・遺物一覧表	331
X 滝里16遺跡・滝里17遺跡の調査	
1 調査の概要	353
2 基本土層	356
3 遺構と遺構出土の遺物	358
(1) 土壌	358
(2) 焼土	358
4 包含層出土の遺物	361
(1) 滝里16遺跡出土の土器	361
(2) 滝里17遺跡出土の土器	362
(3) 滝里16遺跡出土の石器等	366
(4) 滝里17遺跡出土の石器等	372
遺構一覧表・遺物一覧表	382
XI 滝里18遺跡の調査	
1 調査の概要	387
2 基本土層	389
3 遺構	389
(1) 土壌	389
(2) 石囲い炉	389
4 遺構と包含層の遺物	391
(1) 土器	391
(2) 石器	391
遺構一覧表・遺物一覧表	399
XII 滝里20遺跡の調査	
1 調査の概要	403
2 基本土層	403
3 遺構	405
(1) 土壌	405
(2) 焼土	405
4 包含層出土の遺物	407
(1) 土器	407
(2) 石器	409
遺構一覧表・遺物一覧表	413

XII 滝里26遺跡の調査

1 調査の概要	417
2 基本土層	421
3 遺構と遺構出土の遺物	425
(1) 土壌	425
(2) 焼土	435
4 包含層出土の遺物	441
(1) 土器	441
(2) 石器等	453
遺構一覧表・遺物一覧表	464

XIII 滝里29遺跡の調査

1 調査の概要	473
2 基本土層	476
3 遺構と遺構出土の遺物	476
(1) 土壌	476
(2) Tピット	479
(3) 焼土	485
4 包含層出土の遺物	486
(1) 土器	486
(2) 石器等	492
遺構一覧表・遺物一覧表	497

XIV 滝里32遺跡の調査

1 調査の概要	501
2 基本土層	504
3 遺構と遺構出土の遺物	505
(1) 土壌	505
(2) 石囲い炉	512
(3) 集石	512
4 包含層出土の遺物	514
(1) 土器	514
(2) 石器等	527
遺構一覧表・遺物一覧表	534

XV 自然科学的分析

1 滝里12遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析	541
2 滝里4遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析	547
3 滝里安井遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析	553
4 滝里12遺跡出土丸玉の蛍光X線分析による非破壊定性分析結果	567
5 滝里安井遺跡から出土した土壌に残存する脂肪の分析	571
6 放射性炭素年代測定	579
7 平成10年度芦別市滝里11遺跡 H-1出土炭化材片の樹種同定結果について	581

XII 成果と課題

1 滝里遺跡群の調査の概要—土器・住居跡・Tピットの集成を中心として—	585
2 滝里12遺跡(Ⅱ層)の調査成果と今後の課題	603
3 滝里12遺跡Ⅴ層の調査について	615
4 滝里安井遺跡の土壌について	617
5 北海道内出土のクマ形有孔石製品について	623
6 滝里29遺跡出土の押引文土器について	625
7 滝里16遺跡・滝里17遺跡の石器等の器種と石材の相関関係について	628
引用・参考文献	629
報告書抄録	

挿 図 目 次

Ⅱ 遺跡の位置と環境

図Ⅱ-1 滝里遺跡群の位置	12
---------------	----

Ⅲ 調査の方法

図Ⅲ-1 発掘区設定図	13
-------------	----

Ⅳ 滝里2遺跡の調査

図Ⅳ-1 遺跡位置図	23
図Ⅳ-2 最終地形面	24

Ⅴ 滝里3遺跡の調査

図Ⅴ-1 遺跡位置図	27
図Ⅴ-2 最終地形面と包含層残存域図	28
図Ⅴ-3 包含層出土の遺物	28

Ⅵ 滝里安井遺跡の調査

図Ⅵ-1 遺跡の位置とグリッド設定図	32
図Ⅵ-2 年度別調査区と遺構位置図	34
図Ⅵ-3 最終面の地形と遺構位置図	35
図Ⅵ-4 基本土層概念図と土層断面図	36
図Ⅵ-5 P-38~41	38
図Ⅵ-6 P-38の出土遺物	39
図Ⅵ-7 P-42・43の出土遺物	41
図Ⅵ-8 P-44の出土遺物(1)	42
図Ⅵ-9 P-44の出土遺物(2)	43
図Ⅵ-10 P-45の出土遺物(1)	45

図Ⅵ-11 P-45の出土遺物(2)	46
図Ⅵ-12 P-45とP-22(前年度報告済) の琥珀製平玉計測分布図	47
図Ⅵ-13 P-46・47と出土遺物、 S-7・8、F-51	48
図Ⅵ-14 包含層出土の遺物総数と 土器分布図(1)	51
図Ⅵ-15 包含層出土の土器分布図(2)	52
図Ⅵ-16 包含層出土のⅡ・Ⅲ・Ⅳ群 土器(1)	53
図Ⅵ-17 包含層出土のⅣ群(2)・Ⅴ群 土器(1)	54
図Ⅵ-18 包含層出土のⅤ群土器(2)	56
図Ⅵ-19 包含層出土のⅤ群土器(3)	57
図Ⅵ-20 包含層出土のⅤ群土器(4)	58
図Ⅵ-21 包含層出土のⅤ群土器(5)	59
図Ⅵ-22 包含層出土のⅥ群土器(1)	60
図Ⅵ-23 包含層出土のⅥ群土器(2)	61
図Ⅵ-24 包含層出土の石器分布図(1)	63
図Ⅵ-25 包含層出土の石器分布図(2)	64
図Ⅵ-26 包含層出土の石器(1)	66
図Ⅵ-27 包含層出土の石器(2)	67
図Ⅵ-28 包含層出土の石器(3)	68
図Ⅵ-29 包含層出土の石器(4)	69
図Ⅵ-30 包含層出土の石器(5)	71

図VI-31	滝里安井出土の台石、石皿 について……………72
--------	-----------------------------

Ⅶ 滝里9遺跡の調査

図Ⅶ-1	遺跡の位置図……………82
図Ⅶ-2	グリッド設定図・手掘り調査 範囲・年度別調査範囲……………82
図Ⅶ-3	最終面の地形と遺構位置図……………83
図Ⅶ-4	土層断面図……………84
図Ⅶ-5	TP-1、S-2、F-1・2……………86
図Ⅶ-6	フレイク集中範囲……………87
図Ⅶ-7	包含層出土の遺物総数と土器 分布図(1)……………89
図Ⅶ-8	包含層出土の土器分布図(2)……………90
図Ⅶ-9	包含層出土のⅡ・Ⅲ・Ⅳ群土器……………91
図Ⅶ-10	包含層出土のⅤ群土器(1)……………92
図Ⅶ-11	包含層出土のⅤ群土器(2)……………93
図Ⅶ-12	包含層出土のⅤ群土器(3)……………94
図Ⅶ-13	包含層出土のⅥ群土器……………95
図Ⅶ-14	包含層出土の石器分布図(1)……………98
図Ⅶ-15	包含層出土の石器分布図(2)……………99
図Ⅶ-16	包含層出土の石器(1)……………101
図Ⅶ-17	包含層出土の石器(2)……………102
図Ⅶ-18	包含層出土の石器(3)……………103

Ⅷ 滝里11遺跡の調査

図Ⅷ-1	遺跡の位置図……………112
図Ⅷ-2	発掘区設定図……………112
図Ⅷ-3	調査の方法……………113
図Ⅷ-4	最終面地形……………113
図Ⅷ-5	基本土層……………114
図Ⅷ-6	遺構分布図……………115
図Ⅷ-7	H-1……………116
図Ⅷ-8	H-1出土土器の分布と接合図……………117
図Ⅷ-9	H-1出土土器の分布……………118
図Ⅷ-10	H-1出土焼成碟の分布……………119
図Ⅷ-11	H-1出土遺物(1)……………121
図Ⅷ-12	H-1出土遺物(2)……………123
図Ⅷ-13	H-1出土遺物(3)……………124
図Ⅷ-14	H-1出土遺物(4)……………125

図Ⅷ-15	H-1出土遺物(5)……………126
図Ⅷ-16	H-1出土遺物(6)……………127
図Ⅷ-17	P-3・P-4・P-5と 出土遺物……………130
図Ⅷ-18	P-3出土遺物(2)……………131
図Ⅷ-19	P-3出土遺物(3)、 P-4出土遺物(2)……………132
図Ⅷ-20	P-6と出土遺物……………134
図Ⅷ-21	P-7と出土遺物(1)……………135
図Ⅷ-22	P-7出土遺物(2)……………137
図Ⅷ-23	P-7出土遺物(3)……………138
図Ⅷ-24	P-7出土遺物(4)……………139
図Ⅷ-25	P-7出土遺物(5)……………140
図Ⅷ-26	P-8と出土遺物(1)……………142
図Ⅷ-27	P-8出土遺物(2)……………143
図Ⅷ-28	P-9と出土遺物……………144
図Ⅷ-29	P-10……………145
図Ⅷ-30	P-10出土遺物……………146
図Ⅷ-31	P-11・P-12と出土遺物(1)……………148
図Ⅷ-32	P-12出土遺物(2)、P-13・ 14とP-13出土遺物(1)……………150
図Ⅷ-33	P-13出土遺物(2)、 P-15と出土遺物(1)……………151
図Ⅷ-34	P-15出土遺物(2)、 P-16と出土遺物……………153
図Ⅷ-35	P-17と出土遺物……………154
図Ⅷ-36	P-18・19と出土遺物……………156
図Ⅷ-37	P-20・21と出土遺物……………157
図Ⅷ-38	P-22・23と出土遺物(1)……………159
図Ⅷ-39	P-23出土遺物(2)……………160
図Ⅷ-40	P-24・25・26と出土遺物……………162
図Ⅷ-41	P-27・28と出土遺物……………163
図Ⅷ-42	石囲い炉と焼土の分布図……………165
図Ⅷ-43	石囲い炉1・2と出土遺物……………166
図Ⅷ-44	石囲い炉3と出土遺物(1)……………168
図Ⅷ-45	石囲い炉3出土遺物(2)、 石囲い炉4・6……………169
図Ⅷ-46	石囲い炉5と出土遺物(1)……………171
図Ⅷ-47	石囲い炉5出土遺物(2)……………172
図Ⅷ-48	焼土……………175

図Ⅷ-49	小柱穴	176
図Ⅷ-50	包含層出土の遺物総分布・土器 と石器の総分布	178
図Ⅷ-51	包含層出土のⅤ群土器(1)	179
図Ⅷ-52	包含層出土のⅤ群土器(2)	180
図Ⅷ-53	包含層出土のⅤ群土器(3)	181
図Ⅷ-54	包含層出土のⅤ群土器(4)	183
図Ⅷ-55	包含層出土のⅤ群土器(5)	184
図Ⅷ-56	包含層出土のⅤ群土器(6)	185
図Ⅷ-57	包含層出土のⅤ群土器(7)	186
図Ⅷ-58	包含層出土のⅤ群土器(8)	187
図Ⅷ-59	包含層出土のⅥ群土器(1)	190
図Ⅷ-60	包含層出土のⅥ群土器(2)	191
図Ⅷ-61	包含層出土のⅥ群土器(3)	192
図Ⅷ-62	包含層出土のⅥ群土器(4)	194
図Ⅷ-63	包含層出土のⅥ群土器(5)	195
図Ⅷ-64	包含層出土のⅥ群土器(6)	196
図Ⅷ-65	包含層出土のⅥ群土器(7)	197
図Ⅷ-66	包含層出土のⅥ群土器等(8)	198
図Ⅷ-67	包含層出土の石器分布(1)	202
図Ⅷ-68	包含層出土の石器分布(2)	203
図Ⅷ-69	包含層出土の石器(1)	204
図Ⅷ-70	包含層出土の石器(2)	205
図Ⅷ-71	包含層出土の石器(3)	206
図Ⅷ-72	包含層出土の石器等(4)	207
図Ⅷ-73	包含層出土の石器(5)	208
図Ⅷ-74	包含層出土の石器(6)	209
図Ⅷ-75	包含層出土の化石	210

Ⅸ 滝里12遺跡の調査

図Ⅸ-1	遺跡の位置	226
図Ⅸ-2	発掘区設定図及び 旧土地利用図	227
図Ⅸ-3	最終面の地形と遺構位置図	228
図Ⅸ-4	遺構位置図(拡大)	229
図Ⅸ-5	土層断面図(1)	231
図Ⅸ-6	土層断面図(2)	232
図Ⅸ-7	P-1	241
図Ⅸ-8	P-1(2)・2・3	242
図Ⅸ-9	P-4(1)	243

図Ⅸ-10	P-4(2)	244
図Ⅸ-11	P-5	245
図Ⅸ-12	P-6・7(1)	246
図Ⅸ-13	P-6・7(2)	247
図Ⅸ-14	P-8・9・10(1)	248
図Ⅸ-15	P-8・9・10(2)	249
図Ⅸ-16	P-11・12	250
図Ⅸ-17	P-13・14	251
図Ⅸ-18	P-15	252
図Ⅸ-19	P-16・17	253
図Ⅸ-20	P-18(1)	254
図Ⅸ-21	P-18(2)	255
図Ⅸ-22	P-18(3)	256
図Ⅸ-23	P-18(4)・P-19	257
図Ⅸ-24	P-20(1)	258
図Ⅸ-25	P-20(2)	259
図Ⅸ-26	P-20(3)	260
図Ⅸ-27	P-20(4)	261
図Ⅸ-28	P-20(5)	262
図Ⅸ-29	P-20(6)	263
図Ⅸ-30	P-20(7)	264
図Ⅸ-31	P-20(8)	265
図Ⅸ-32	P-20(9)	266
図Ⅸ-33	P-20(10)	267
図Ⅸ-34	P-20(11)	268
図Ⅸ-35	P-20(12)	269
図Ⅸ-36	P-20(13)	270
図Ⅸ-37	P-20(14)	271
図Ⅸ-38	P-20(15)	272
図Ⅸ-39	P-21(1)	273
図Ⅸ-40	P-21(2)・22	274
図Ⅸ-41	P-23	275
図Ⅸ-42	P-24・25(1)	276
図Ⅸ-43	P-25(2)	277
図Ⅸ-44	P-26・27	278
図Ⅸ-45	P-28	279
図Ⅸ-46	P-29・30 S-1	280
図Ⅸ-47	Ⅳ群・Ⅴ群 a 類土器の分布	283
図Ⅸ-48	Ⅴ群 c 類・Ⅵ群 a 類土器の 分布	284

図X-22 包含層出土遺物分布(5)	380
図X-23 包含層出土遺物分布(6)	381

Ⅺ 滝里18遺跡の調査

図XI-1 最終面の地形と遺構位置図	388
図XI-2 基本土層	389
図XI-3 P-1・2、F-1	390
図XI-4 包含層出土の土器・石器分布	392
図XI-5 包含層出土の石鏃・ナイフ、 スクレイパーの分布	393
図XI-6 包含層出土の石斧・Rフレイク の分布	394
図XI-7 包含層出土の礫石器・フレイク の分布	395
図XI-8 遺構・包含層出土の土器	396
図XI-9 包含層出土の石器(1)	397
図XI-10 包含層出土の石器(2)	398

Ⅻ 滝里20遺跡の調査

図XII-1 遺跡位置図	404
図XII-2 グリッド設定図	405
図XII-3 包含層残存範囲	406
図XII-4 基本土層図	406
図XII-5 遺構位置図	407
図XII-6 P-1	408
図XII-7 焼土	408
図XII-8 包含層出土の土器	409
図XII-9 包含層出土の石器(1)	410
図XII-10 包含層出土の石器(2)	410

Ⅻ 滝里26遺跡の調査

図XII-1 遺跡の位置図	418
図XII-2 発掘区設定図及び 旧土地利用図	419
図XII-3 最終面の地形と遺構位置図	420
図XII-4 土層断面図(1)	422
図XII-5 土層断面図(2)	423
図XII-6 土層断面図(3)	424
図XII-7 P-1・2	428
図XII-8 P-3	429

図XII-9 P-4・5(1)	430
図XII-10 P-5(2)・7	431
図XII-11 P-6	432
図XII-12 P-8(1)	433
図XII-13 P-8(2)	434
図XII-14 F-1～4・9～11・14	436
図XII-15 F-5～8・12・13	437
図XII-16 F-15～23・26	438
図XII-17 F-24・25・27～29	439
図XII-18 F-30～33	440
図XII-19 包含層出土の土器分布、I群・ III群土器の分布	443
図XII-20 IV群・VI群・V群土器分布	444
図XII-21 V群c類・VI群a類土器発掘 区別口縁部個体数	445
図XII-22 包含層出土の復元土器(IV群・ V群・VI群)	446
図XII-23 包含層出土のI群・III群・IV群 土器	447
図XII-24 包含層出土のV群土器(1)	448
図XII-25 包含層出土のV群土器(2)	449
図XII-26 包含層出土のV群土器(3)	450
図XII-27 包含層出土のV群土器(4)	451
図XII-28 包含層出土のVI群a類土器	452
図XII-29 包含層出土の石器等分布・石鏃 の分布	455
図XII-30 包含層出土の石槍・ナイフ、 スクレイパーの分布	456
図XII-31 包含層出土の石斧・Rフレイク の分布	457
図XII-32 包含層出土のフレイク・礫石器 の分布	458
図XII-33 包含層出土の石器(1)	459
図XII-34 包含層出土の石器(2)	460
図XII-35 包含層出土の石器(3)	461
図XII-36 包含層出土の石器(4)	462
図XII-37 石斧未製品の出土状況	463

Ⅻ 滝里29遺跡の調査

図XII-1 発掘区設定図	474
---------------------	-----

図ⅩⅡ-2	遺構位置図	475	図ⅩⅡ-15	包含層出土のⅤ群土器(3)	522
図ⅩⅡ-3	基本土層図	476	図ⅩⅡ-16	包含層出土のⅤ群土器(4)	523
図ⅩⅡ-4	土層断面図(1)	477	図ⅩⅡ-17	包含層出土のⅤ群土器(5)	524
図ⅩⅡ-5	土層断面図(2)	478	図ⅩⅡ-18	包含層出土のⅥ群土器	525
図ⅩⅡ-6	P-1・P-2と出土遺物	480	図ⅩⅡ-19	包含層出土の石器分布図(1)	529
図ⅩⅡ-7	TP-1・TP-2と 出土遺物	482	図ⅩⅡ-20	包含層出土の石器分布図(2)	530
図ⅩⅡ-8	TP-3・TP-4と 出土遺物	483	図ⅩⅡ-21	包含層出土の石器(1)	531
図ⅩⅡ-9	TP-5・TP-6・ TP-7	484	図ⅩⅡ-22	包含層出土の石器(2)	532
図ⅩⅡ-10	焼土	485	図ⅩⅡ-23	包含層出土の石器(3)	533
図ⅩⅡ-11	包含層遺物出土状況	487			
図ⅩⅡ-12	包含層出土の土器(1)	488			
図ⅩⅡ-13	包含層出土の土器(2)	489			
図ⅩⅡ-14	包含層出土の土器(3)	490			
図ⅩⅡ-15	包含層出土の土器(4)	491			
図ⅩⅡ-16	フレイク集中域	493			
図ⅩⅡ-17	包含層出土の石器(1)	494			
図ⅩⅡ-18	包含層出土の石器(2)	495			

ⅩⅢ 滝里32遺跡の調査	
図ⅩⅢ-1	遺跡の位置図と グリッド設定図
図ⅩⅢ-2	年度別調査区・最終面地形と 遺構位置図
図ⅩⅢ-3	土層断面図
図ⅩⅢ-4	P-15~19と出土遺物
図ⅩⅢ-5	P-20~22
図ⅩⅢ-6	P-23~26と出土遺物
図ⅩⅢ-7	P-27と出土遺物
図ⅩⅢ-8	石囲い炉2、S-1・2
図ⅩⅢ-9	包含層出土の遺物総数と土器 分布図(1)
図ⅩⅢ-10	包含層の土器分布図(2)
図ⅩⅢ-11	包含層出土のⅠ・Ⅲ群土器
図ⅩⅢ-12	包含層出土のⅣ群土器(1)
図ⅩⅢ-13	包含層出土のⅣ群(2)・ Ⅴ群土器(1)
図ⅩⅢ-14	包含層出土のⅤ群土器(2)

ⅩⅣ 自然科学的分析	
ⅩⅣ-3	
図1	黒曜石原産地
ⅩⅣ-4	
図1	蛇紋岩製丸玉(試料番号No1~10) の蛍光X線スペクトル
図2	JG-1 標準試料の蛍光X線 スペクトル
ⅩⅣ-5	
図1	土壌内外での試料採取地点
図2	試料中に残存する脂肪の脂肪酸 組成
図3	試料中に残存する脂肪の ステロール組成
図4	試料中に残存する脂肪の脂肪酸
図5	試料中に残存する脂肪の脂肪酸 組成による種特异性相関

ⅩⅤ 成果と課題	
図ⅩⅤ-1	時期別土器の分布
図ⅩⅤ-2	滝里遺跡群出土の 土器集成図(1)
図ⅩⅤ-3	滝里遺跡群出土の 土器集成図(2)
図ⅩⅤ-4	滝里遺跡群出土の 土器集成図(3)
図ⅩⅤ-5	滝里遺跡群出土の 土器集成図(4)
図ⅩⅤ-6	滝里遺跡群出土の 土器集成図(5)

図Ⅳ-7	滝里遺跡群出土の 土器集成図(6)	597	図Ⅳ-16	琥珀玉が出土した遺構の土器	610
図Ⅳ-8	滝里遺跡群出土の 土器集成図(7)	598	図Ⅳ-17	琥珀玉が出土した遺跡のⅥ群 a 類土器	611
図Ⅳ-9	滝里遺跡群出土の 土器集成図(8)	599	図Ⅳ-18	各遺跡出土の石製品	612
図Ⅳ-10	滝里遺跡群の住居跡	600	図Ⅳ-19	滝里安井遺跡の 土壌について(1)	618
図Ⅳ-11	滝里遺跡群のTピット	601	図Ⅳ-20	滝里安井遺跡の 土壌について(2)	619
図Ⅳ-12	滝里12遺跡の土壌(1)	606	図Ⅳ-21	滝里安井遺跡の 土壌について(3)	620
図Ⅳ-13	滝里12遺跡の土壌(2)	607	図Ⅳ-22	道内出土のクマ形有孔石製品	624
図Ⅳ-14	琥珀玉が出土した土壌(1)	608	図Ⅳ-23	滝里遺跡群出土の押引文土器	626
図Ⅳ-15	琥珀玉が出土した土壌(2)	609			

表 目 次

I 調査の概要

表I-1	遺跡名・所在地・調査面積・調査期間	1
表I-2	滝里ダム建設工事にかかる埋蔵文化財発掘遺跡と年次別調査面積一覧	2

V 滝里3遺跡の調査

表V-1	出土遺物一覧	28
表V-2	包含層出土の掲載石器一覧	28

Ⅵ 滝里安井遺跡の調査

表Ⅵ-1	出土遺物一覧	31
表Ⅵ-2	遺構規模一覧	73
表Ⅵ-3	遺構出土遺物一覧	73
表Ⅵ-4	遺構出土掲載土器一覧	73
表Ⅵ-5	遺構出土掲載石器等一覧	74
表Ⅵ-6	包含層出土の掲載土器一覧	75
表Ⅵ-7	包含層出土の石器等一覧	77
表Ⅵ-8	包含層出土の掲載石器一覧	77

Ⅶ 滝里9遺跡の調査

表Ⅶ-1	出土遺物一覧	81
表Ⅶ-2	遺構規模一覧	105
表Ⅶ-3	遺構出土遺物一覧	105
表Ⅶ-4	遺構出土掲載土器一覧	105

表Ⅶ-5	遺構出土掲載石器一覧	105
表Ⅶ-6	包含層出土の掲載土器一覧	105
表Ⅶ-7	包含層出土の石器等一覧	107
表Ⅶ-8	包含層出土の掲載石器一覧	107

Ⅷ 滝里11遺跡の調査

表Ⅷ-1	出土遺物一覧	111
表Ⅷ-2	遺構規模一覧	211
表Ⅷ-3	遺構出土遺物一覧	212
表Ⅷ-4	遺構出土掲載土器一覧	212
表Ⅷ-5	遺構出土掲載石器等一覧	214
表Ⅷ-6	包含層出土土器一覧	218
表Ⅷ-7	包含層出土石器等一覧	218
表Ⅷ-8	包含層出土掲載土器一覧	219
表Ⅷ-9	包含層出土掲載石器等一覧	220

Ⅸ 滝里12遺跡の調査

表Ⅸ-1	I・II層の出土遺物一覧	225
表Ⅸ-2	V層の出土遺物一覧	305
表Ⅸ-3	I・II層の遺構規模一覧	331
表Ⅸ-4	I・II層の遺構出土遺物一覧	331
表Ⅸ-5	I・II層の遺構出土掲載土器一覧	332
表Ⅸ-6	I・II層の遺構出土掲載土器等一覧	332
表Ⅸ-7	I・II層出土の掲載土器一覧	343
表Ⅸ-8	I・II層出土の石器等一覧	344
表Ⅸ-9	I・II層出土の掲載石器一覧	344
表Ⅸ-10	V層の遺構規模一覧(1)土壌	347
表Ⅸ-11	V層の遺構規模一覧(2)フレイクチップ集中・焼土	347
表Ⅸ-12	V層の遺構出土遺物一覧	347
表Ⅸ-13	V層の遺構出土掲載土器等一覧	348
表Ⅸ-14	V層の遺構出土の掲載石器等一覧	348
表Ⅸ-15	V層出土の掲載土器一覧	349
表Ⅸ-16	V層出土の石器等一覧	349
表Ⅸ-17	V層出土の掲載石器等一覧	350

X 滝里16遺跡・滝里17遺跡の調査

表X-1	滝里16遺跡出土遺物一覧	354
表X-2	滝里17遺跡出土遺物一覧	354
表X-3	滝里16遺跡遺構規模一覧(P)	382
表X-4	滝里16遺跡遺構規模一覧(F)	382

表X-5	滝里17遺跡遺構規模一覽(F)	382
表X-6	滝里16遺跡遺構出土遺物一覽	382
表X-7	滝里16遺跡遺構出土掲載土器一覽	382
表X-8	滝里16遺跡遺構出土掲載石器等一覽	382
表X-9	滝里16遺跡包含層出土土器一覽	382
表X-10	滝里17遺跡包含層出土土器一覽	382
表X-11	滝里16遺跡包含層出土石器等一覽	382
表X-12	滝里17遺跡包含層出土石器等一覽	382
表X-13	滝里16遺跡包含層出土掲載土器一覽	383
表X-14	滝里17遺跡包含層出土掲載土器一覽	383
表X-15	滝里16遺跡包含層出土掲載石器等一覽	383
表X-16	滝里17遺跡包含層出土掲載石器等一覽	384

XI 滝里18遺跡調査

表XI-1	出土遺物一覽	387
表XI-2	遺構規模一覽	399
表XI-3	遺構出土の遺物一覽	399
表XI-4	滝里18遺跡出土の掲載土器一覽	399
表XI-5	包含層出土の石器等一覽	399
表XI-6	包含層出土の掲載石器等一覽	399

XII 滝里20遺跡の調査

表XII-1	出土遺物一覽	403
表XII-2	遺構規模一覽	413
表XII-3	包含層出土土器一覽	413
表XII-4	包含層出土石器等一覽	413
表XII-5	包含層出土掲載土器一覽(拓影)	413
表XII-6	包含層出土掲載石器等一覽	413

XIII 滝里26遺跡の調査

表XIII-1	出土遺物一覽	417
表XIII-2	遺構規模一覽	464
表XIII-3	焼土一覽	464
表XIII-4	遺構出土の遺物一覽	464
表XIII-5	遺構出土の掲載土器一覽	465
表XIII-6	遺構出土の掲載石器等一覽	465
表XIII-7	包含層出土の掲載土器一覽	466
表XIII-8	包含層出土の石器等一覽	467
表XIII-9	包含層出土の掲載石器等一覽	467

ⅩⅦ 滝里29遺跡の調査

表ⅩⅦ-1	出土遺物一覧	473
表ⅩⅦ-2	遺構規模一覧	497
表ⅩⅦ-3	遺構出土遺物一覧	497
表ⅩⅦ-4	包含層出土土器一覧	497
表ⅩⅦ-5	包含層出土石器等一覧	497
表ⅩⅦ-6	遺構出土掲載土器一覧	497
表ⅩⅦ-7	遺構出土掲載石器等一覧	498
表ⅩⅦ-8	包含層出土の掲載土器一覧1(実測図)	498
表ⅩⅦ-9	包含層出土の掲載土器一覧2(拓影)	498
表ⅩⅦ-10	包含層出土の掲載石器等一覧	498

ⅩⅧ 滝里32遺跡の調査

表ⅩⅧ-1	出土遺物一覧	501
表ⅩⅧ-2	遺構規模一覧	534
表ⅩⅧ-3	遺構出土遺物一覧	534
表ⅩⅧ-4	遺構出土の掲載土器一覧	534
表ⅩⅧ-5	遺構出土の掲載石器等一覧	535
表ⅩⅧ-6	包含層出土の掲載土器一覧	535
表ⅩⅧ-7	包含層出土の石器等一覧	537
表ⅩⅧ-8	包含層出土の掲載石器等一覧	537

ⅩⅨ 自然科学的分析

ⅩⅨ章-1

表1	滝里12遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果	545
表2	滝里12遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地推定結果	546

ⅩⅨ章-2

表1	滝里4遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果	551
表2	滝里4遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地推定結果	552

ⅩⅨ章-3

表1	滝里安井遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果	557
表2	滝里安井遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地推定結果(1)	559
表3	滝里安井遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地推定結果(2)	561
表4	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	563

ⅩⅨ章-4

表1	滝里12遺跡出土玉丸類の出土位置、特徴、時代	568
表2	滝里12遺跡出土蛇紋岩製玉丸の元素分析値の比量と比重	569

ⅩⅨ章-5

表1	土壌試料の残存脂肪抽出量	573
表2	試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合	573

Ⅷ 成果と課題

表Ⅷ-1 滝里遺跡群の遺構および出土遺物一覧	587
表Ⅷ-2 滝里遺跡群出土の土器一覧	587

図版目次(本文篇)

カラー図版 1

- 1 滝里遺跡群遠景(北から 左遠方は
富良野市街)

カラー図版 2

- 1 滝里安井遺跡P-45遺物出土状況
(南から)
- 2 滝里安井遺跡P-45出土クマ形石製品

カラー図版 3

- 1 滝里安井遺跡P-45出土遺物

カラー図版 4

- 1 滝里11遺跡H-1完掘(北から)
- 2 滝里11遺跡H-1出土土器

カラー図版 5

- 1 滝里29遺跡出土押引文土器

カラー図版 6

- 1 滝里12遺跡P-5遺物出土状況
(南から)
- 2 滝里12遺跡P-18遺物出土状況
(南から)

カラー図版 7

- 1 滝里12遺跡P-20遺物出土状況
(東から)
- 2 滝里12遺跡P-21遺物出土状況
(南西から)

カラー図版 8

- 1 滝里12遺跡P-25遺物出土状況
(東から)
- 2 滝里12遺跡P-28遺物出土状況
(南西から)

I 調査の概要

- 図版I-1 集中豪雨による遺跡の水没・
被害の状況……………3

1. 水没した滝里32遺跡
2. 床の抜けた作業員棟内部

II 遺跡の位置と環境

- 図版II-1 記念の壁面……………11

Ⅲ 自然科学的分析

- 図版Ⅲ-1 H-1 出土炭化材片 樹種断面
顕微鏡写真……………582

Ⅳ 成果と課題

- 図版Ⅳ-1 P-25の玉 顕微鏡写真(1) ……613

1. 図Ⅳ-43-8裏面の紐ずれ痕
2. 図Ⅳ-43-8側面の紐ずれ痕
3. 図Ⅳ-43-42裏面の紐ずれ痕
4. 図Ⅳ-43-42側面の溝と紐ずれ痕
5. 図Ⅳ-43-42孔の溝
6. 図Ⅳ-43-19孔の溝
7. 図Ⅳ-43-19裏面の紐ずれ痕
8. 図Ⅳ-43-19側面の溝と紐ずれ痕

- 図版Ⅳ-2 P-25の玉 顕微鏡写真(2) ……614

1. 図Ⅳ-43-74の紐ずれ痕
2. 図Ⅳ-43-74の2本の紐ずれ痕
3. 図Ⅳ-43-51の2本の溝
4. 図Ⅳ-43-13側面
5. 図Ⅳ-43-6の再穿孔
6. 図Ⅳ-43-64の再穿孔
7. 図Ⅳ-43-66の"引っ掻き"痕
8. 図Ⅳ-43-21の"引っ掻き"痕

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：北海道開発局石狩川開発建設部

事業受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター

表 I-1 遺跡名・所在地・調査面積・調査期間

遺跡名	道教委登録番号	所 在 地	調査面積	調査期間(現地調査期間)
滝里2遺跡	E-04-02	芦別市滝里町477-14、477-6	2,300㎡	平成10年4月13日～平成11年3月26日(5月6日～10月27日)
滝里3遺跡	E-04-03	芦別市滝里町406-3	2,600㎡	
滝里安井遺跡	E-04-11	芦別市滝里町313-3地先道路敷地	2,740㎡	
滝里9遺跡	E-04-12	芦別市滝里町275-5地先道路敷地	2,400㎡	
滝里11遺跡	E-04-14	芦別市滝里町244-14地先道路敷地	3,300㎡	
滝里12遺跡	E-04-60	芦別市滝里町369-4、-6ほか	12,550㎡	平成9年4月13日～平成10年3月25日(5月6日～10月27日)
			4,500㎡	平成10年4月12日～平成11年3月26日(5月6日～10月27日)
滝里16遺跡	E-04-64	芦別市滝里町422-1地先河川敷	4,100㎡	平成10年4月12日～平成11年3月26日(5月6日～10月27日)
滝里17遺跡	E-04-65	芦別市滝里町449-1地先河川敷	3,000㎡	
滝里18遺跡	E-04-66	芦別市滝里町472-1	5,900㎡	平成8年4月17日～平成9年3月25日(5月6日～10月26日)
			8,630㎡	平成9年4月13日～平成10年3月25日(5月6日～10月27日)
滝里20遺跡	E-04-68	芦別市滝里町400	3,400㎡	平成9年4月11日～平成10年3月25日(5月6日～10月27日)
滝里26遺跡	E-04-74	芦別市滝里町490-1、-3ほか	4,400㎡	平成10年4月13日～平成11年3月26日(5月6日～10月27日)
滝里29遺跡	E-04-77	芦別市滝里町385-6	7,224㎡	平成9年4月11日～平成10年3月25日(5月6日～10月27日)
滝里32遺跡	E-04-80	芦別市滝里町322-1地先河川敷	2,750㎡	平成10年4月13日～平成11年3月26日(5月6日～10月27日)

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

○印：発掘担当者

平成8年度	平成9年度	平成10年度
理事長 伊藤 一夫	理事長 伊藤 一夫	理事長 伊藤 一夫
専務理事 佐藤 哲人	専務理事 佐藤 哲人	(5月退任)
常務理事 柴田 忠昭	常務理事 柴田 忠昭	理事長 大澤 満
常務理事 木村 尚俊	常務理事 木村 尚俊	(6月就任)
業務部長 山内 清志	業務部長 山内 清志	専務理事 佐藤 哲人
第1調査部長 畑 宏明	(5月31日退任)	常務理事 柴田 忠昭
第2調査課長 佐藤 和雄	業務部長 北條 雅洋	常務理事 木村 尚俊
主 査 ○遠藤 香澄	(6月1日就任)	業務部長 北條 雅洋
文化財保護主事 ○村田 大	第1調査部長 畑 宏明	(5月退任)
◇ 愛場 和人	第2調査課長 ○佐藤 和雄	業務部長 中田 仁
◇ 影浦 覚	文化財保護主事 ○広田 良成	(6月就任)
◇ 酒井 秀治	◇ 立田 理	第1調査部長 畑 宏明
	第4調査課長 ○遠藤 香澄	第4調査課長 ○遠藤 香澄

3 調査にいたる経緯

文化財保護主事○村田 大 主 任 ○村田 大
 ◇ 愛場 和人 文化財保護主事 ○愛場 和人
 ◇ 影浦 覚 ◇ 影浦 覚
 ◇ 酒井 秀治 ◇ 佐藤 剛
 ◇ 酒井 秀治

3 調査にいたる経緯

滝里ダムは石狩川総合開発の一環として、石狩川水系空知川の芦別市滝里町地先に建設中の建設省直轄の多目的ダムである。昭和47年度の予備調査、昭和54年度の実施計画策定を経て、昭和58年度から建設事業に着手している。補償工事のうちJ R線根室本線の付替は平成3年に完了し現在新線を走行している。また一般国道38号の付替工事でも完了し平成10年8月に全線共用開始された。ダム本体工事は平成2年10月から着手され平成9年10月に本体コンクリートの打設が完了、平成11年度のダム完成に向けて建設が進んでいる。水没する一帯は「滝里湖」と名付けられ平成11年3月1日からは試験湛水が始まっている。

ダム建設に関連する水没予定内の埋蔵文化財包蔵地調査は、昭和53年10月野村崇氏らによって実施された。これは北海道開発局の委託を受けた北海道開発協会が行った「滝里ダム環境評価調査」の一環である。この結果滝里地区に26か所、泉地区に2か所、富岡地区に3か所、合計31か所の遺跡が確認された。また昭和61年からは北海道教育委員会により所在確認調査および範囲確認調査が実施され、この結果ダム建設用地内には芦別市域24か所、富良野市域6か所の計30か所の包蔵地が確認され

表I-2 滝里ダム建設工事にかかる埋蔵文化財発掘遺跡と年次別調査面積一覧

遺跡名	遺跡発掘番号	(㎡)		調査年度(㎡)									
		当初面積	変更面積	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
滝里2遺跡	E-04-2	2,300	2,300										2,300
滝里3遺跡	E-04-3	2,600	2,600										2,600
滝里4遺跡	E-04-6	29,500	33,043				16,575	9,700		6,768			
滝里7遺跡	E-04-9	3,700	3,700	3,700									
滝里安井遺跡	E-04-11	12,600	15,890							4,820	8,330	2,740	
滝里9遺跡	E-04-12	11,950	14,540							11,950			2,590
滝里10遺跡	E-04-13	9,200	9,920						9,920				
滝里11遺跡	E-04-14	7,000	11,300			1,300	6,700						3,300
滝里12遺跡(上層)	E-04-60	12,000	12,550									12,550	
(下層)		0	4,500										4,500
滝里16遺跡	E-04-64	4,100	4,100										4,100
滝里17遺跡	E-04-65	3,000	3,000										3,000
滝里18遺跡	E-04-66	14,500	14,530							5,700	8,630		
滝里19遺跡	E-04-67	2,700	2,250							2,250			
滝里20遺跡	E-04-68	3,400	3,400									3,400	
滝里26遺跡	E-04-74	4,400	4,400										4,400
滝里29遺跡	E-04-77	6,600	7,224								7,224		
滝里31遺跡	E-04-79	9,740	7,496				7,496						
滝里32遺跡	E-04-80	14,850	16,739		9,929	4,060							2,750
滝里33遺跡	E-04-81	7,400	7,400			7,400							
滝里33遺跡	E-04-86	1,400	1,400	1,400									
滝里38遺跡	E-04-88	4,500	4,500	900	3,600								
滝里39遺跡	E-04-89	3,600	3,600	3,600									
合 計		171,040	190,382	5,900	7,300	9,929	12,760	24,116	16,575	9,700	24,720	46,902	32,280



1. 水没した滝里32遺跡



2. 床の抜けた作業員棟内部

図版 I-1 集中豪雨による遺跡の水没・被害の状況

た。芦別市内の遺跡のうち発掘調査、遺構確認調査を必要とする遺跡は22か所、工事立会の必要な遺跡は6か所である。滝里ダム建設工事に関わり埋蔵文化財調査の対象となった22か所の遺跡について「滝里遺跡群」と総称し、北海道埋蔵文化財センターが平成元年度から継続して調査を進めていたが、平成10年度をもってすべての調査を終了した。10年次にわたり調査した延べ面積は190,382㎡、出土した遺物は約100万点にのぼる。

最終調査年度にあたる平成10年の夏、滝里地区は水害に見舞われた。8月28日から翌日にかけての集中豪雨により空知川の水位が急激に上昇あふれだし、滝里ダムの水没予定地域の大半が文字通り水没した。下流側に位置する滝里安井遺跡、滝里32遺跡は押し出された多量の土砂で覆われ、また調査事務所、作業員休憩所は床上浸水し床が抜け落ち、簡易トイレは流失するなど、整理中の遺物をはじめ発掘機材等に大きな被害を受けた(図版I-1)。プレハブ内は足の踏み場もないほどで、泥を被ったカーテンの跡を見ると、床から1m以上も水位が上昇したことが分かる。以前滝里地区に住んでいた作業員の方達の話では、昭和37年の台風9号による集中豪雨で当時の大橋が流失した時を思い出すほどの洪水であるという。幸いにも人的被害はなく、調査員、作業員の奮闘と関係業者の協力で、10日間程の復旧作業をもって調査を再開することができ遅れも取り戻すことができた。滝里遺跡群の調査に携わって5年目、水の驚異的エネルギーを改めて知らされると共に忘れられない出来事となった。

4 調査の概要

今年度調査した遺跡はいずれも空知川右岸にあり河川に沿った低位段丘上や自然堤防上また支流によって形成された沖積錐上に立地している。旧国道38号の道路敷地であった4か所(滝里安井、滝里9、滝里11、滝里32遺跡)、ベンケテシマナイ川(墓地川)と奈江川の間に連なる5か所(滝里2、滝里3、滝里16、滝里17、滝里26遺跡)、滝里12遺跡(下層)の計10か所である。このうち滝里11遺跡が最も下流部に滝里26遺跡が最も上流部に位置している。当初計画は31,550㎡であったが滝里11遺跡、滝里安井遺跡、滝里32遺跡において変更があり最終的な調査面積は730㎡増の32,280㎡となった。本書では平成8年度、同9年度調査した滝里18遺跡、平成9年度調査した滝里12遺跡(上層)、滝里20遺跡、滝里29遺跡をあわせ、計13遺跡について報告する。

滝里2遺跡(発掘担当者:遠藤・村田)

標高145~147mの河岸段丘上に立地する。調査区全域が水田造成のためにほとんど削平されていた。重機を併用した遺構確認調査を行ったが遺物、遺構ともに検出されなかった。過去の一斉分布調

査によって当時の畑から石斧、石鏃、土器等が多数出土していることが確認されている。

滝里3遺跡（発掘担当者：遠藤・村田）

標高143～144mの河岸段丘上に立地する。滝里2遺跡同様ほとんどが削平されていた。重機を併用した遺構確認調査を行ったが遺構は検出されず縄文晩期の土器2点、石器等が9点出土したのみである。北海道教育委員会の埋蔵文化財蔵地カードには大正12年から昭和19年にかけて当時の野花南郵便局長であった永田繁太郎氏と同居に勤務していた戸塚栄氏が土器、石器を多数表面採集したとの記載がある。

滝里安井遺跡（発掘担当者：遠藤・愛場）

平成8年度から3か年にわたり調査を行った。遺跡は空知川の支流ボンルベシベ川の右岸の標高133～140mの緩やかな低位の段丘面上に立地し周辺の山から押し出された土砂に覆われて沖積錐が発達している。今年度の調査区は遺跡南西側、道路敷地であった標高135m程のやや高みのある段丘縁辺部とそれに続く斜面である。これまでの調査で遺物包含層が厚い砂礫層をはさんで3層（上位からⅡ-1、Ⅱ-A、Ⅱ-B層）あること、遺跡南西側の斜面裾部では1層（Ⅱ層）に収束することが分かっている。大グリッド線に沿って南北にトレンチを入れた結果、道路敷地部分の包含層（Ⅱ層）は削平されていたが斜面部分には残存していることがわかった。また包含層の拡がりや南側の斜面下側に確認されたため240m²について拡張し最終的な調査面積は2,740m²となった。人力による調査を主としたが道路敷地の削平されている部分および攪乱部分は重機を併用して調査を進めた。

検出された遺構は土壌10基、集石2か所、焼土1か所である。土壌は標高134mほどの段丘縁辺部分から検出され、522ラインよりも西側のほぼ2か所に集中し、P-39のみが調査区北西のやや離れた位置にある。いずれも縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭ころに属するものと見られ、このうちP-42、44、45が墓塚と考えられる。P-45からは1,500個を超える琥珀製平玉と共に「クマ形石製品」、小型の「鉢」が出土した。直径60cmの円形を呈し確認面からの深さが30cmに満たない小型の土壌であるが、琥珀玉は土壌の中央部から北東壁側にかけて、一部「連」になって出土した。玉は径10mm前後のもので、これまで出土したものとは比べ大振りである。「クマ形石製品」は北東の壁際から出土した。大きさは長さ2.1cm、高さ2.6cm。全体を磨きで整形し全身を写実的に表現している。後肢の直前の胴部に直径5mm程の貫通孔がある。なお石質についてはX線回折法の分析および蛍光X線分析の結果、蛇紋岩製である可能性が高いことが指摘された（Ⅵ章-3-（1）参照）。また塘底部から検出された炭化材片の¹⁴C年代測定の結果2350±40yBPの年代が得られている（ⅩⅥ章-6参照）。P-42は長径1.2m程の楕円形を呈するもので、覆土から石斧が出土したほか塘底部の3か所から径4、5cm、深さ20cm前後の小柱穴が検出された。P-44は隅丸長方形を呈する土壌で塘口部からほぼ1個体分に相当する土器片、スクレイパー、石斧、フレイク等が出土した。塘底部長軸上の壁際の2か所にP-42同様の小柱穴がある。またP-38、40、41は直径1m内外の円形の土壌で、P-40、41には遺物はないが、P-38からは台石、石皿、砥石が出土している。これらは平成9年度のⅡ-1層から検出された「第Ⅰ群土壌群」を構成する土壌に共通の特徴をもつ。

出土した遺物は11,191点である。土器が6,080点（遺構：139点 包含層：5,941点）、石器等が5,111点（遺構：1970点 包含層：3,141点）である。土器は縄文晩期後葉（Ⅴ群c類）のものが最も多くほかに中期（Ⅲ群）、続縄文時代初頭（Ⅵ群a類）のものがある。石器等ではその半数が黒曜石のフレイクである。剥片石器では石鏃が最も多い。石斧・石斧に関連する遺物が比較的多く見られる。礫石器の割合は少ないがたたき石、台石がやや多くを占める。なお3か年の調査で出土した大型の石皿、台石のうち未報告であった資料を集成、各層位ごとに特徴的な遺物を掲載した。

滝里9遺跡（発掘担当者：遠藤・愛場）

旧国道38号の道路敷地部分である。標高152～146m程の急激な崖とそれに続く標高146～134mの緩やかに傾斜する斜面に立地する。平成8年度に国道の北側地区の調査を終了している。今年度調査区は137～134m程の斜面下部にあたり南側に滝里33遺跡と連続する。道路敷地部分の包含層は削平されていたが、調査区南東部は古い沢地形が現れ、斜面にかけて黒色土が残存し遺物がまとまって出土した。この範囲を人力による調査とし残りの部分は重機併用の調査範囲とした。

検出された遺構はTピット1基、集石1か所、焼土2か所、フレイク集中1か所である。Tピットは長径1.2mほどの楕円形のもので杭穴はない。

遺物は54,858点出土した。土器3,682点（遺構；54点 包含層；3,628点）、石器等が51,230点（遺構；215点 包含層；51,011点）である。土器はその9割が縄文時代晩期後葉の時期のもので、ほかに続縄文時代初頭ものがある。前期後葉（Ⅱ群b類）の刺突文土器、後期（Ⅳ群）の白板3式、手稲式、堂林式ものがごく僅かに出土している。石器等はその98%が黒曜石のフレイクである。剥片石器では石鏃、スクレイパーが多く、ついでナイフ類がある。礫石器ではスコリア製を含め砥石が最も多くほかに台石、たたき石、すり石、石皿が見られる。

滝里11遺跡（発掘担当者：遠藤・愛場）

旧国道38号の道路敷地部分である。遺跡は標高130m～135mの低位の段丘面上に立地している。今年度の調査区は標高135m～132mほどの緩やかな斜面で沖積錐に覆われており、その末端部にあたる。平成4年度および5年度に国道と空知川の間の2か所の地区の調査を終了している。

トレンチ調査の結果、遺物包含層であるⅡ層（暗褐色土）およびⅢ層（砂利層）が370ライン以西、372ライン以東では削平されている部分が多く、また調査区南側の縁辺は幅10mほどにわたり排水溝として掘削されていることが分った。遺構、遺物が調査区のほぼ中央部、B₂-370、372区から集中して検出されることから、この部分を人力による調査範囲とし、残りの地区は重機併用の遺構確認調査範囲とした。また調査区北側から住居跡が検出され、土層の断面からも包含層の広がりが見えてきたため、北側部分の300m²について拡張した。最終的な調査面積は3,300m²となった。

検出された遺構は住居跡1軒、土壇26基、石囲い炉6か所、焼土26か所、フレイク・チップ集中1か所、小柱穴7個である。これらの遺構はいずれも縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭に属するものである。砂利層中に掘り込まれているため確認作業に手まどった遺構が多い。続縄文時代初頭の住居跡は標高135mほどの土壇、焼土が集中していた地点から検出された。長軸長5mほどの不整隅丸楕円形を呈するもので南東部に張り出しがある。この時期の住居跡は滝里遺跡群では初めての検出である。炉跡と見られる焼土は床面のほぼ中央北よりの位置から検出されている。柱穴とみられる径7cm前後の小ピットは住居の内外から10個検出されている。外側のものは壁に沿ってほぼ等間隔であるが、住居内のものには規則性はみられない。覆土中からは土器片をはじめ石鏃、スクレイパー等多量の遺物が出土している。

土壇は様々な形状・規模のものがありいずれも覆土中から遺物が出土している。覆土中から焼骨片、や少量の赤色顔料が検出される遺構が多い。このうち規模、覆土の状態等からP-3、7、9、11～13、23が墓壇と考えられる。P-3は長径1.3mの不整形の浅い土壇で、P-4に隣接している。覆土中からは無茎の石鏃、ナイフ等の石器が出土している。P-7は長径2m、深さ0.8mの楕円形を呈する。覆土上部には多量の焼骨が含まれており、ほかに石鏃、スクレイパー、スコリア製の砥石など多数の石器、土器片が出土した。P-13は楕円形を呈するもので、P-14、P-20と重複する。蛇紋岩製の玉が出土している。P-23は長径1.2mの長楕円形を呈する。このほか墓壇の可能性のあ

るものが7基ある。焼土は遺構、遺物の集中する地区と重なる。土壌の確認面から焼土が検出される例が多いがこれは土壌に伴うというよりは、焼土が形成されていた面を掘り込んだ結果であろう。

遺物は102,863点出土した。土器が32,168点(遺構; 5,382点 包含層; 26,786点)、石器等が70,695点(遺構; 11,314点 包含層; 59,381点)である。土器は後期の土器21点をのぞき、縄文時代晩期後葉と続縄文時代初頭のものである。平成9年度の滝里4遺跡の土壌墓(P-5)の資料に続き、続縄文時代初頭の資料が追加されたことが特筆される。縄線文のものに加え、辻線文と刺突文を組み合わせるもので短い貼付けのあるもの、刺突文を多用するもの、またボタン状ないしは瘤状の貼付けをもつ「鳥沼式」に類似のものなど良好な資料が出土している。石器等はその約94%が黒曜石のフレイクである。石器の組成には極端な偏りがみられる。剥片石器が多く中でも、スクレイパー、石鏃、ナイフ類の出土量が突出する。ほかに石槍、石鏃、つまみ付きナイフが少量ある。礫石器は非常に少ないが、その中ではスコリア製の砥石が多いのが特徴的である。石斧、石斧に関連するものがやや多く見られるほか、たたき石、台石が僅かにある。特徴的な遺物にはクルミの殻を模したとみられる土製品、いわゆる「錨石」と称される安山岩製の石製品の破片がある。また遺跡に持ちこまれた「アンモナイト」がある。

滝里12遺跡(発掘担当者: 遠藤・村田)

遺跡は空知川の支流であるパンケテシマナイ川右岸の標高141~144mの沖積錐上に立地する。調査前は水田、畑、宅地として利用されていた。厚い河川堆積物の礫層を挟んで遺物包含層が上下に2層(Ⅱ層とⅤ層)あることが確認された。平成9年度の調査開始当初、遺物包含層はⅡ層(黒色土)のみと考えていたが耕作土中から縄文時代早期の条痕文土器が出土したこと、また南側の斜面の現地表面下2m以上の位置に茶褐色土層(Ⅴ層)がありここから早期の東銅路Ⅳ式土器が発見されたことなどから下層の包含層の存在がわかった。Ⅱ層は縄文時代中期から続縄文時代初頭の包含層、Ⅴ層は縄文時代前期、早期の包含層である。平成9年度はⅡ層のみ調査を行うこととしⅤ層については範囲確認および遺物有無確認調査を実施した。調査は644ラインの東側地区に南北方向に8列、東西R₁ラインに沿って1列、また644ライン西側には東西方向に2列、いずれも幅3mのトレンチを設定し実施した。重機によりⅤ層上面まで掘削しその後人力で調査を行った結果Ⅴ層の厚さは20cm内外あることが分かり部分的に2層(Va層、Vb層)に分層されるところも確認できた。遺物の出土は散点的であったが654ラインのトレンチから出土する傾向が見られ、東銅路Ⅳ式の土器片、石鏃、スクレイパー、偏平礫のすり石等が検出された。このような点を踏まえⅤ層の存在する範囲を648ラインと656ラインの間の4,500㎡と判断し北海道教育委員会文化課に報告協議した結果、下層については平成10年度に行う計画で調査を進めた。

平成9年度Ⅱ層の調査

包含層の残存状態を確認するため、R₁ライン、R₂ラインに沿って東西トレンチを設定し調査を開始した。この結果644ラインよりも西側では包含層がごく一部にしか残っていないことが分かった。また調査区の南側縁辺部は急斜面になっていたが、これは旧河道により大きく抉られた地形で包含層は存在せず、さらに林道によって削平されている状態であった。一方、遺跡を横断し北東方向に延びる林道の東側は一部削平、攪乱されていたがR₁ラインより南側では盛土が厚く堆積してその下に包含層(Ⅱ層)があり墓壕とみられる遺構が検出された。このような点を踏まえ概ね644ラインを境に西側地区を重機併用の遺構確認調査範囲、東側地区を人力を主体とする調査範囲と設定し手掘りによる25%調査から始めた。林道の東側については水田、林道の盛土、耕作土を除去後調査を進めたが、黒色土の落ち込みが多数現れ遺構が集中していることがわかった。最終的にこの周辺だけで26基の土

墳が検出され調査区域外にも遺構の存在が予想されたため、さらに東側の550㎡について範囲を拡張した。Ⅱ層の最終的な調査面積は12,550㎡となった。

検出された遺構は土壌30基、集石1か所である。調査区東側に28基が集中、2基(P-3、30)が60mほど西に離れた位置から検出された。これらは1基を除き出土する遺物から縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭に属するものとみられる。覆土、遺物の出土状況から墓墳と考えられるものが19基、墓の可能性があるものが5基ある。これらには平面形が楕円形のものや円形に近いものがあり、前者では長径が1.2m～1.5mのもの、後者では直径1.2m内外のものが多い。深さは1mを超えるものが1基あるが、ほとんどが0.5mに収まるものである。この中には石鏃、大型ナイフ、石斧、スコリア製矢柄研磨器、棒状原石等の石器、蛇紋岩製・琥珀製の玉類等色とりどりで豊富な副葬品を特徴とする土壌がある。副葬品の在り方も多彩で土壌の上部と墳底部から出土するもの(P-4、18、21)、赤色顔料があるもの(P-5、16)、琥珀製、蛇紋岩製の玉類を副葬するもの(P-6、7、23、25)がある。またP-20からは200本近い無茎の石鏃とナイフ、石鏃、石斧、矢柄研磨器、黒曜石のフレイク等豊富な石器が出土している。土器が1個体副葬されるもの(P-18、28)もある。この他覆土中や土壌上部にトロニウム岩の大型礫を1個(P-8、9、12、14)置く例がある。

遺物は39,356点出土した。土器が13,590点(遺構;942点 包含層;12,648点)、石器が25,766点(遺構;4,677点 包含層;21,089点)である。土器はほとんどが縄文晩期後葉から続縄文時代初頭のものでわずかに後期の余市式、堂林式のものがある。石器等はその86%以上が黒曜石のフレイクである。剥片石器が多くスクレイパー、石鏃の順で多い。ほかに石槍、石錐、ナイフ、つまみ付きナイフ等がある。石斧がやや多く見られるが、礫石器は非常に少なく、たたき石、石皿、すり石、砥石、台石が僅かにある。特徴的遺物としては黒曜石製の左右対称の異形石器がある。

なおⅡ層の土壌墓から出土した蛇紋岩製の玉10個について蛍光X線分析による非破壊定性分析を行った(Ⅱ章-3参照)。平成6・7年度に測定を依頼した滝里4遺跡出土の早期中葉の蛇紋岩製の石斧との原材の異同を調べたものである。滝里12遺跡の玉の主成分の組成および比重を日高ヒスイおよび近隣の富良野市奈江川、十稜別川から採取される軟玉と比較したところ、これらが原材である可能性は低いことがわかった。早期の石斧の原材では奈江川、十稜別川産のものに類似するとの結果もあり、それと比べて非常に興味深い(北埋調報98)。

平成10年度Ⅴ層の調査

平成9年度、Ⅱ層調査終了後、重機により1m以上も厚く堆積していた砂礫層(Ⅳ層)を除去したが、この段階で調査区の数か所から焼土が検出されている。Ⅴ層上面の標高は141m～143m、調査区北東側から南側に向かって緩やかに傾斜する地形である。調査は大グリッドラインに沿ってトレンチ調査を実施することから開始した。Q₂ラインの北側、650ラインの西側の遺跡境界付近では広い範囲で下位の礫層が露出している状態であった。また古い沢地形があらわれ、遺物の出土状態は散点的であったが周辺から焼土が多数検出された。このことから礫層の露出する範囲を除き、主に人力で調査することとした。

検出された遺構は土壌が1基、焼土跡29か所である。

遺物は2,370点出土した。土器が1,933点(遺構;304点 包含層;1,629点)、石器等が437点(遺構;358点 包含層;179点)である。土器は焼土に伴って出土した1個体分の前期(Ⅱ群a類)の網文式土器と早期後葉(Ⅰ群b類)の中茶路式、東銅路Ⅳ式に属するもので、いずれもこれまで散点的にしかなかったが器形の復元できる良好な資料である。東銅路Ⅳ式は焼土に伴うもののほか包含層から出土している。口縁部に山形に施文するもの、刺突文を3条施すものがあり、これらは東銅

路Ⅳ式の中でも新しい段階の特徴を示すものと見られる。網文式土器は滝里38遺跡に次いで2例目である。石器等はその70%以上が黒曜石のフレイクで焼土に伴うものが半数以上を占める。石鏃、スクレイパー、ナイフ類、石斧、たたき石、台石、石皿等があり、石鏃、つまみ付きナイフ、すり石にはその形態の特徴から早期、前期に属するものが認められる。

滝里16遺跡・滝里17遺跡（発掘担当者；遠藤・村田）

標高143m～145mの平坦な河岸段丘上にある連続した遺跡である。また発掘調査の結果から判断しても両者は一連の遺跡で区分を明確にすることはできない。調査前は水田、畑として利用されていた地区である。K₁ラインとK₂ラインの間を流れる用水路の北側に滝里16遺跡、南側に滝里17遺跡で南北延長250mの空知川に沿った細長い範囲である。また滝里16遺跡は東側に隣接して遺構確認調査区(2,000㎡)が、同様に滝里17遺跡は南側に80m程離れた位置に遺構確認調査区(1,400㎡)がある。トレンチ調査の結果遺物包含層であるⅡ層、Ⅲ層は水田造成によって削平されており、滝里16遺跡では調査区南側K₁ライン周辺と2か所の河道部分に、滝里17遺跡ではK₁-692区の河道部分に僅かに残存している状態であった。このため包含層が残存する範囲以外は人力と重機を併用する調査を行った。

滝里16遺跡では土壌1基、焼土3か所が検出された。土壌の確認面からは縄文時代中期後葉のモコト式に伴行する特徴を持つ土器が2個体と石斧が出土している。一つは小型、他のものはやや大きめで、胴部下半のみ残存している。遺物は2,565点出土した。土器が653点（遺構；51点 包含層；602点）、石器等が1,912点（遺構；5点 包含層；1,907点）である。土器は約半数が縄文時代中期後葉のもので、次いで後期、早期、晩期のものがある。縄文早期中葉の沼沢式に対比される貝殻線圧痕文と列点文の施された資料がある。石器等はその80%以上が黒曜石のフレイクである。剥片石器では石槍、その未製品の占める割合が高いのが特徴的である。このほか泥岩製の玉が出土している。

滝里17遺跡では焼土が1か所検出されている。遺物は包含層から4,000点出土した。土器が818点、石器等3,182点である。土器はほぼ半数が縄文後期中葉の手摺式のもので次いで晩期のものが多く、続縄文のものも少量みられる。石器等はその86%が黒曜石のフレイクである。剥片石器はスクレイパーが最も多く滝里16遺跡同様に石槍の出土の割合が高いのが特徴的である。石斧がやや多く見られるが、礫石器は非常に少なく、たたき石、台石が僅かにある。ほかに石鏃が1点ある。

滝里18遺跡（発掘担当者；平成8年度 遠藤・村田、平成9年度 佐藤・広田）

平成8年度、9年度に調査を行った。標高145mほどの平坦な自然堤防上に立地する。遺跡は2か所からなり、平成8年度は用水路を挟み滝里19遺跡に連続する地区のうち空知川よりの一段低い地区(692ライン以西)と50m程南に離れた地点にある遺構確認調査区(1,350㎡)の調査を行った。前者については当初人力による発掘調査を計画していたが、トレンチ調査と大グリッド(25個)につき1グリッドの割合での包含層調査を行った結果、包含層はほぼ全域削平されていることから重機併用の遺構確認調査範囲とした。平成9年度は692ライン以東の一段高い水田面を調査した。この範囲も包含層の削平が著しいため主に重機併用の調査を行った。なお空知川に臨む調査区緑辺部は河川の侵食により845㎡にわたり包含層が削平されていたが最終的な測量の結果、調査面積は30㎡増の14,530㎡となった。

2か年の調査で土壌2基、石囲い炉1か所が検出された。いずれも平成9年度調査区南側で確認された沢地地形部分から検出された。遺物は10,019点出土した。土器が1,706点（遺構；62点 包含層；1,644点）、石器等8,313点（遺構；50点 包含層；8,263点）である。土器はほとんどが縄文時代晩期のもので、わずかに前期、中期、早期のものがある。石器等は90%以上が黒曜石のフレイクである。剥片石器ではスクレイパーが最も多く次いで石鏃が多い。ほかに石槍、ナイフ類がある。石斧が若干多いほか礫石器は少ない。

滝里20遺跡（発掘担当者；佐藤・広田）

平成9年度に調査を行った。標高約140mの平坦な段丘面上に立地している。包含層は水田造成によりほとんどが削平されていたが2か所で南北に帯状に残っていたため、この範囲を人力調査とし、残りの部分は遺構確認調査範囲とした。

検出された遺構は土壌1基、焼土5か所である。土壌は不整楕円形の浅い形状のもの。焼土は調査区北西隅に4か所が集中していた。遺物は467点出土した。土器が包含層から23点、石器等444点（遺構；22点 包含層；422点）である。土器は前期、中期、後期、晩期のものがある。石器等はその8割以上が焼成礫、礫、黒曜石のフレイクで、定形的石器には多い順からスクレイパー、石槍、石鏃、石斧に関連する遺物がある。

滝里26遺跡（発掘担当者；遠藤・村田）

空知川の支流である奈江川右岸の標高約150mの沖積錐上に立地する。滝里遺跡群では最も上流側に位置する。遺跡は2か所かなり、当初計画は主に宅地、道路等として利用されていた南東側地区は人力による発掘調査、水田跡である北西側地区（1,300m²）は遺構確認調査であった。遺跡全体にトレンチ調査を実施した結果、南東側地区では包含層（Ⅱ層）が当初予想した程には残っていないことが分かった。調査区の中央部 r ライン周辺では攪乱が著しくさらに南側は奈江川の護岸工事により削平され旧河道が埋め立てられている状態であった。また調査区北側からは沢状地形が検出され黒色土はその落ち込みに沿って残っていた。このため包含層の残存する部分については人力で調査しそれ以外は重機を併用して調査を行った。北西側地区は遺物は稀薄ではあるがⅡ層が残存し沢状地形が続いていることが判明したため人力による調査範囲とした。

南東側地区から土壌8基と焼土群（29か所）が、北東側地区から焼土4か所が検出された。土壌は南東地区のほぼ中央部の平坦部にまとまり、いずれも縄文時代晩期後葉から続縄文時代初期頃のものと思われる。このうちP-5、6、8が長径1m内外の円形、不整円形を呈するもので遺物出土状況から墓塚と考えられる。P-5は墳口部から石斧が覆土中からは赤色顔料が僅かに検出された。P-8はP-5と近接した位置にあり、副葬品が豊富であった。確認面からは高さ3.5cm、7cmの小さな浅鉢土器2個体含む土器片が出土した。墳底部には赤色顔料が多量に撒かれ、覆土中からは破片を含め約1800（完形品631点）点の琥珀製平玉、石鏃、石斧と黒曜石製の異形石器が2点出土した。琥珀玉は2か所程にまとまりがある。異形石器は周縁に鋸歯状の挟り込みのあるもので、そのうち1点は長さ約8cmで柄部がある。P-6は覆土中に厚い焼土の層が形成され、その上位からまとまった土器片、石鏃、石斧、大型のトロノエム岩の礫が検出された。P-1、2は長径1mほどの楕円形の浅い土壌で被熱した礫、台石等が充填されていた。焼土群は沢状地形に沿って検出されたもので、規模には大小があり、その場で形成されたものと廃棄されたものがある。

遺物は28,515点出土した。土器が7,264点（遺構；1,317点 包含層；5,947点）、石器等が21,251点（遺構；3,006点 包含層；18,245点）である。土器は9割以上が縄文時代晩期後葉から続縄文時代初期頃のものである。ほかに中期のもの、後期の糸市式相当のものがあり、ごく僅かに早期中葉の条痕文・沈線文土器が出土している。石器等は90%以上が黒曜石のフレイクである。剥片石器では石鏃、スクレイパーが多いほか、石槍、ナイフがある。石鏃、つまみつきナイフも僅かに出土している。石斧がやや多く見られる。礫石器は非常に少なく、台石、たたき石、砥石が少量ある。特徴的遺物としては刀の鐔にも似た形状の蛇紋岩製の石製品がある。左右対称形と見られ周縁に大小複数の孔が穿たれているものである。この種の特異な形状の石製品は野花南矢野沢遺跡、滝里安井遺跡でも出土しており、古くから野花南・滝里地区において注目されている。

滝里29遺跡（発掘担当者：佐藤・広田）

平成9年度に調査を行った。標高139m前後の平坦な河岸段丘および自然堤防上に立地する。包含層はその大部分が削平されていたが、調査区北西側の緩やかに傾斜する斜面にのみ残存していた。この部分を人力で調査し、残りの部分は重機併用の調査範囲とした。

検出された遺構は土壌2基、Tピット7基、焼土3か所、フレイク集中9か所である。いずれも包含層の残存する斜面に集中していた。P-1は径1mほどの不整形を呈するもので、覆土下部から赤色顔料、多量の炭化物とともに、黒曜石のフレイク、石皿の破片が出土した。Tピットは長軸長が2mを超える溝状のもので、空知川に向かう斜面に直交して5基、2基がそれぞれほぼ当間隔に列をなしていた。このタイプのTピットは滝里4遺跡について2例目である。

遺物は9,036点出土した。土器が681点（遺構；13点 包含層；668点）、石器等8,355点（遺構；3,104点 包含層；5,251点）である。土器はその7割以上が縄文時代前期のものである。ほかに中期のものが若干あり、後期のものが1点ある。組紐回転文と縄文の複合施文された尖底土器、歯状工具による刺突文の施された平底土器、また円筒上層a式～b式に並行すると見られる押引文の施された大型の土器が3個体出土している。石器等はその95%が黒曜石のフレイクである。剥片石器ではスクレイパー、つまみ付ナイフ、石鏃が多くを占める。石斧と石斧に関連するものがやや多い。礫石器は少なく、石皿、たたき石、砥石が少量ある。

滝里32遺跡（発掘担当者：遠藤・愛場）

遺跡は空知川の支流であるボンルベシュベ川の左岸、標高132～140m程の低位の段丘上に立地する。川を挟んで西側には滝里安井遺跡がある。平成3年度、同4年度に国道の北側部分の調査を終了している。大グリッドラインに沿って南北にトレンチを入れ調査した結果、道路敷地部分の包含層は削平されていたが南西側の斜面下位には残っておりその拡がりが見られたため、主として人力による調査を行い、一部重機を併用し調査を進めた。さらに南西部の黒色土の残る範囲190m²について拡張し、最終的調査面積は2,750m²となった。

検出された遺構は土壌13基、石囲い炉1か所、集石1か所である。調査区南東端にある1基（P-27）を除き12基が2か所にまとまっていた。いずれも円形の土壌で調査区北側のグループ（P-15～19）は道路敷地の標高134mほどの地点にある。直径90cmを超えないもので遺構上部は削平されているため深さ15cm前後の浅い皿状を呈する。南側のグループはそれよりもやや標高の低い地点にあり直径が若干大きく、壁は垂直に立上るものが多い。いずれの遺構も出土遺物は礫、礫片が主体で土器、フレイクも少量出土する。大型の礫や台石が出土するもの（P-16、24、25）、拳大の焼けた礫片が多量に出土するもの（P-17、18、21、22、23）、土壌の上面と底部から出土するもの（P-20）がある。これらは縄文時代晩期後葉から統縄文時代初頭のものと考えられる。P-27は楕円形を呈するもので確認面から礫が、また覆土中から土器、石器等が散布された状態で出土した。土器は縄文時代中期後葉のモコト式に相当するものである。なおP-27の底面直上から検出された炭化材片の¹⁴C年代測定の結果4130±40yBPの年代が得られた（ⅩⅢ章-6参照）。

遺物は14,390点出土した。土器が9,195点（遺構；119点 包含層；9,076点）、石器等が5,195点（遺構；282点 包含層；4,913点）である。土器は90%が縄文時代晩期後葉以降のもので口縁部、底部の形態から明確に統縄文時代初頭のものと判別できるものがある。ほかに後期の余市式、中期のモコト式相当のものがある。石器はその90%以上が黒曜石のフレイクである。剥片石器ではスクレイパーが最も多く次いで石鏃、ナイフ類が多い。石槍、石鏃、つまみ付ナイフが若干ある。礫石器はたたき石、台石がごく僅かにある。

（遠藤香澄）

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

芦別市は北海道の中央部空知管内の東部に位置する。市域は865km²でその約89%を森林が占め、全面積の約84%が標高700mから1,700mの山岳地帯である。この間を空知川が東南から北西に流れている。山岳地帯の東方と空知川流域の一部が富良野・芦別道立自然公園に含まれる自然豊かな土地である。空知川は日高山脈の狩振岳（標高1,323m）にその源を発する石狩川水系の支流である。富良野盆地をを北上してから夕張山地の北西部で横谷をつくり、芦別市域で数段の河岸段丘を、赤平付近では沖積平野を形成しながら滝川市南方の空知太で石狩川に合流する。流路延長172.7km、流域面積2,573km²の石狩川水系最大の支流である。

滝里町は空知川の兩岸に開けた山峽に位置する。芦別市の南東部、市街地から15kmほど内陸寄りの位置にある。空知川は滝里付近を東南から北西にゆったりと蛇行して流れ建設中の滝里ダムサイト付近からは急激な流れとなり「空知大滝」の雄大な景観を作っている。右岸は沢地帯で平坦な地形が続くが左岸は急峻な山が迫っている。東北部は那英山（819m）、中山（679m）、高峰（626m）が連なり分水嶺によって中富良野町と、南東部は野花南岳（905m）、尻岸馬内山（772m）を挟んで富良野市と境を接している。滝里町は昭和61年8月30日開町式を行い80年をこえる歴史を閉じた。

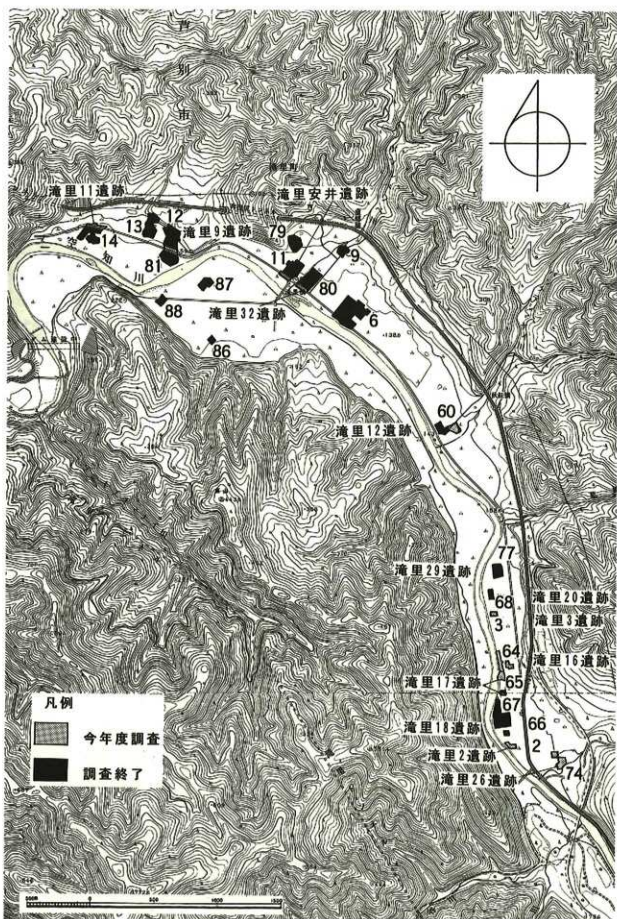
「滝里遺跡群」は芦別、富良野両市にまたがり遺跡は主に空知川及びその支流によって形成された河岸段丘面や自然堤防上と山地斜面に立地する。滝里地区に限ってみると最も上流部にはトプトエウシュナイ川下流部左岸の平坦面に滝里1遺跡が下流部には空知大滝北側（空知川右岸）に滝里40遺跡がある。この間約6kmの流域に43か所の遺跡が点在している。右岸に37ヶ所を数えとくに奈江川とパンケテシマナイ川の間およびボンルベシュベ川の兩岸に集中する。段丘面上の遺跡では滝里4・滝里12・安井遺跡にみられるように支流河川が運んだ土砂の堆積により形成された沖積錐に覆われているところがある。遺跡群のある一帯はダム工事用地になる以前は水田、畑作地でありとくに昭和30年代から40年代にかけての新規造田工事により地形が改変されている遺跡が多い。

空知大滝から2.5kmほど下流の空知川左岸の平坦部には昭和37年に芦別市指定文化財となった「野花南環状土籬」がある（付図）。

1998年8月はじめダム建設現場に子供たちを中心に150人ほどの市民が集まり、「ラストサマーメモリーin滝里」が開催された。湖底に沈む滝里地区で最後の夏の思い出をつくろうと聞かれたもので旧JR線のコンクリートの壁面には思い出の絵や手形、メッセージ等が描かれ、対岸で調査中の私達の目を楽しませてくれた。8月末の集中豪雨ではこの壁面の半分以上の位置まで水が上昇、壁面は泥まみれとなった。なおダム湖の名前は公募により「滝里湖」と決まった。（遠藤香澄）



図版Ⅱ-1 記念の壁面



図Ⅱ-1 滝里遺跡群の位置

(この図は国土地理院発行2.5万分の1地形図「野花南」「島の下」を複製縮小したものである)

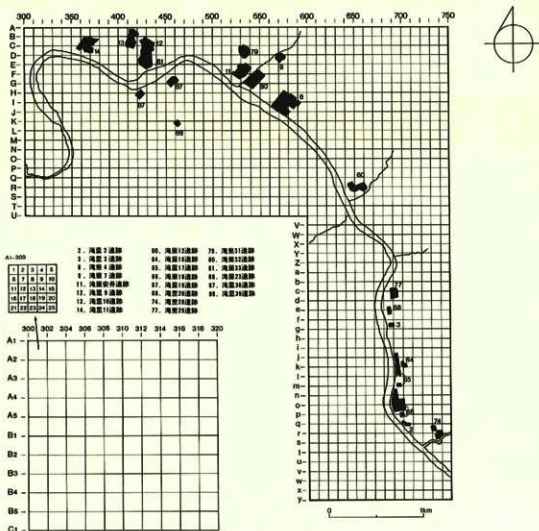
III 調査の方法

1 発掘区の設定

滝里ダムの建設にかかる埋蔵文化財の発掘調査に必要な遺跡は芦別市内で22か所あり、空知川とその支流域に分布する。最も上流にある遺跡は富良野市との境界から1.5kmほど手前、奈江川が空知川と合流する地点に位置する滝里26遺跡（登録番号E-04-74）である。下流側は旧市街地に架かっていた滝里橋から1.5kmほど芦別市より位置する滝里11遺跡（登録番号E-04-14）で、その間延長約7kmにおよんでいる。

発掘区の設定にあたっては上記遺跡群の範囲をカバーする平面直角座標第XⅡ系を使用した。その範囲は $X = -61000 \sim -66000$ 、 $Y = +3000 \sim 8000$ である。基線は東西軸を $X = -61000$ 、南北軸を $Y = +3000$ とした。

発掘区は大グリッド（20m×20m）と小グリッド（4m×4m）からなる。大グリッドは東西軸をアラビア数字（1～5）を付したアルファベット（A₁、a₁など）、南北軸は座標値の上3桁の数字で表示した（例えば、A₁-300など）。すなわち東西軸は基線（ $X = -61000$ ）をA₁とし、南へ向か



図Ⅲ-1 発掘区設定図

って20mごとにA₂、A₃……とした。アルファベットの太文字が一巡したX=63500からはアルファベットの小文字でa₁、a₂、a₃……とした。南北軸は基線(Y=+3000)を300として、東へ向かって20mごとに302、304、306とした。

大グリッドは25個の小グリッドに分け、北西隅の小グリッドから東へ順にアラビア数字で1～25の番号を付した。グリッドの呼称は北西の交点とした(A₁-300-7など)。(遠藤香澄)

2 発掘調査の方法

遺跡毎の具体的な調査方法についてはI章の調査の概要にやや詳しく述べたのでここでは共通する調査手順を記すこととする。発掘調査に先行し対象地区の柳などの雑木の伐倒を行いその後重機により水田の客土、畑の耕作土および攪乱層の除去作業を行った。今年度は旧国道の敷地が3か所あり、これらの遺跡については迂迴路を確保した後アスファルト・盛土を除去、旧地表面まで掘り下げた。遺物の拡がり、包含層の残存状態を確認するため南北、東西の大グリッドラインに沿ってトレンチを設定、また大グリッド(20m×20m)に4グリッドの割合で人力による調査あるいは面積の10%ほどの調査を行った遺跡もある。この結果をもとに遺物の稀薄な範囲と削平部分は重機を併用する遺構確認調査範囲、残り部分を人力による調査対象範囲とする方法で調査を進めた。各遺跡ともに包含層の残存状態が悪く重機併用の遺構確認調査範囲が人力による調査範囲よりも多くを占める結果となった。滝里12遺跡については調査対象であるV層を厚く覆っていた河川堆積層(砂利層)を重機により除去することから調査をはじめた。

I層(表土等)を除いた遺物包含層出土の遺物については必要に応じ、人力により位置と標高を計測して取り上げを行った。(遠藤香澄)

3 整理の方法

(1) 土器

現地では遺物取上げ後、水洗、大分類を行ない、遺物台帳、遺物カードを作成した。土器片は器面が磨減して胎土の砂粒が浮きでているもの、表面が剥離する状態のものが多く、そのため充分乾燥させた後バラロイドB72の50%水溶液を塗布し表面を養生した。その後台帳整理が終了したものから注記を行なった。現地での整理と並行して札幌の事務所では一部搬送した資料の接合、復元作業を行った。

札幌での二次整理では現場での大分類を見直し細分類を行い、I層を除いた包含層の資料を中心に接合作業を進めた。接合資料については報告書に掲載しない遺物も含め、グリッド毎に接合関係カード等作成した。接合作業の段階では同一個体の破片を把握することに努め、2、3の遺跡では口縁部の破片をもとに分類ごとの個体数を求めた。実測図では文様の復元可能なものについては細い線で表現した。断面は最も器形の特徴を表している部分を実測するために90度あるいは180度回転させた位置で実測したものもある。

整理作業が終わった資料の収納については報告書掲載資料とその他の資料に分けて行った。報告書掲載の資料は図版ごとに対応するように収納した。その他の資料は遺構別、小グリッド別に分け収納した。また包含層の土器については口縁部、底部、それ以外の部位に分け収納した。

(2) 石器等

石器は取上げと並行して現場で水洗と大分類を行い、遺物カード、遺物台帳を作成した。注記は黒曜石製を除く全点を対象としたが、礫、石製品、頁岩製の遺物の一部などには注記しなかった。滝里

11遺跡の遺物については、現場の段階で細分類まで行い報告書に掲載する石器を選びだし、実測を業者に委託した。札幌においても一部現場での整理と並行し実測等の作業を行った。遺構出土の石器については礫、剥片を除きできるだけ多くのものを掲載した。包含層出土の石器については完形品ないしそれに近いものから器種、形態等に偏りのないよう選びだして実測掲載している。また滝里安井遺跡の3か年の調査で得られ未報告であった台石、石皿について現場で実測、計測を行い各層位ごとに特徴のあるものについて実測図を掲載した。

琥珀製玉については取上げ後、水洗いを行い水浸の状態で一時的保存した。完形品については風化の著しいものを除き直径、厚さ、重量について計測を行った。風化の度合いをみながら自然乾燥させ、バラロイドB72の10%溶液に浸して保存処理を行った。

整理後の石器等の収納は報告書掲載のものとそれ以外のものに分けて行った。報告書掲載の資料は図版に対応するように、それ以外のものについては再分類した器種ごとに大グリッドおよび小グリッド別に分けて収納した。なお平成9年度調査した滝里12遺跡、滝里4遺跡、滝里安井遺跡出土の黒曜石製石器、剥片の原産地同定および水層による年代測定結果、滝里12遺跡の土壌から出土した蛇紋岩玉の産地同定の結果については第Ⅷ章に掲載してある。(遠藤香澄)

4 遺物の分類

(1) 土器

縄文時代の土器は、早期から晩期までをそれぞれⅠ群からⅤ群とし、続縄文時代の土器はⅥ群、擦文時代の土器はⅦ群とした。この各群にアルファベットの小文字を組み合わせ、前半(a類)、後半(b類)あるいは前葉(a類)、中葉(b類)、後葉(c類)に分類し、出土遺物数の集計を行った。また必要に応じて細分類(例 a-1類など)を行った。文様の摩滅した破片、大きさの1cm未満の小破片などが多く、細分に至らないものも多い。

Ⅰ群土器 縄文時代早期の土器群

a類：貝殻腹縁圧痕文、無文、条痕文、沈線文、貼付帯のある尖底、平底土器群。

a-1類：物見台式、晩式に相当もしくは併行すると考えられるもの

a-2類：住吉町式、東銅路Ⅰ式、ムシリⅠ式、沼尻式、アルトリ式に相当もしくは併行すると考えられるもの

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文等の施された土器群

b-1類：東銅路Ⅱ式、東銅路Ⅲ式に相当もしくは併行すると考えられるもの

b-2類：コックロ式に相当もしくは併行すると考えられるもの

b-3類：中茶路式に相当もしくは併行すると考えられるもの

b-4類：東銅路Ⅳ式に相当もしくは併行すると考えられるもの

Ⅱ群土器 縄文時代前期の土器群

a類：胎土に繊維を含み、厚手で縄文の施文された丸底、尖底を特徴とする土器群

a-1類：花積下層式、縄文式に相当もしくは併行すると考えられる土器群

a-2類：春日町式、静内中野式に相当もしくは併行すると考えられる土器群

b類：胎土に滑石が混入する、縄文の施文された土器、無文土器、刺突文の施された土器、押型文土器、押引文の施文された平底土器群で、円筒下層式、植苗式、大麻Ⅴ式に相当もしくは併行すると考えられる土器群

Ⅲ群土器 縄文時代中期の土器群

- a 類：円筒土器上層式、萩ケ岡 1・2 式に相当もしくは併行すると考えられる土器群、および円筒土器上層 a、b 式に併行すると考えられる押型文の施文された土器群
- b 類：萩ケ岡 3・4 式、天神山式、柏木川式、モコト式、北筒式（トコロ 6 類）に相当もしくは併行すると考えられる土器群
 - b-1 類：天神山式、萩ケ岡 3 式に相当もしくは併行すると考えられる土器群
 - b-2 類：柏木川式、萩ケ岡 4 式、モコト式に相当もしくは併行すると考えられる土器群
 - b-3 類：北筒式（トコロ 6 類）に相当もしくは併行すると考えられる土器群

Ⅳ群土器 縄文時代後期の土器群

- a 類：余市式、入江式、北筒（Ⅳ、Ⅴ）式、タブコブ式に相当もしくは併行すると考えられる土器群
- b 類：白坂 3 式、ウサクマイ C 式、船泊上層式、手稲式、鯉淵式、エリモ B 式に相当もしくは併行すると考えられる土器群
- c 類：堂林式、三ツ谷式、御殿山式、栗沢式に相当もしくは併行すると考えられる土器群

Ⅴ群土器 縄文時代晩期の土器群

- a 類：ママチ 1 類以前の土器群、大洞 B 式に相当もしくは併行すると考えられる土器群、上ノ国式に類似する爪形文の施文される土器群
- b 類：ママチ 1 類、2 類、大洞 C₁ 式、大洞 C₂ 式に相当もしくは併行すると考えられる土器群
- c 類：ママチ 3 類以降の土器、タンネトウ L 式、幣舞式、緑ヶ岡式、大洞 A 式、大洞 A' 式に相当もしくは併行すると考えられる土器群

Ⅵ群土器 統縄文時代の土器群

- a 類：フシココタン下層式、琴似式、メクマ式、興津式、大狩部式、鳥沼式、宇津内Ⅱ群 a 類、砂沢式、下田ノ沢Ⅰ式、東歌別式、恵山式の前半段階に相当もしくは併行すると考えられる土器群
 - a-1 類：フシココタン下層式、琴似式、メクマ式、興津式、大狩部式、鳥沼式、砂沢式に相当もしくは併行すると考えられる土器群
 - a-2 類：宇津内Ⅱ群 a 類、下田ノ沢Ⅰ式、東歌別式、恵山式の前半段階に相当もしくは併行すると考えられる土器群
- b 類：後北 A 式、後北 B 式、後北 C₁ 式、後北 C₂-D 式、宇津内Ⅱ群 b 類、下田ノ沢Ⅱ式、恵山式の後半段階、鈴谷式、北大Ⅰ式、北大Ⅱ式、オホーツク文化の前半の土器群に相当もしくは併行すると考えられる土器群
 - b-1 類：後北 A 式、後北 B 式、後北 C₁ 式、後北 C₂-D 式、宇津内Ⅱ群 b 類、下田ノ沢Ⅱ式、恵山式の後半段階、鈴谷式に相当もしくは併行すると考えられる土器群
 - b-2 類：北大Ⅰ式、北大Ⅱ式、オホーツク文化の前半の土器群に相当もしくは併行すると考えられる土器群

Ⅶ群土器 縄文時代後の土器群

- 北大Ⅲ式、十勝最寄式、オホーツク文化の後半の土器群以降に相当もしくは併行すると考えられる土器群

(佐藤 剛)

(2) 石器等

石器の分類は、基本的に従来からの滝里遺跡群の分類を踏襲した。定型的な石器をⅠ～Ⅷ群に、石核・剥片をⅨ群とし、加工痕のある剥片や礫をⅩ群としている。未成品や細分類のできない破損品等についてはすべて「破片など」のなかに分類している。昨年度までの分類に石錘（ⅦA）の打ち欠きが1か所のものと加工痕のある剥片（ⅩA）のなかに楔形石器として分類できる遺物が見られたので新たに分類を加えた。また、土製品や石製品については分類記号を用いなかった。

Ⅰ群 石鏃・石槍

A類：石鏃

1. 石刃鏃
2. 長身鏃
3. 薄身鏃 a：柳葉形 b：五角形
4. 三角鏃 a：平基 b：凹基
5. 有茎鏃 a：平基 b：凹基 c：凸基
6. 菱形鏃 a：正菱 b：偏菱
7. 木葉鏃 a：尖基 b：円基
8. 破片など

B類：石槍または両面加工のナイフ

1. 有茎
2. 菱形
3. 木葉形
8. 破片など

Ⅱ群 石錐

A類：石錐

1. 棒状のもの
2. 全体に二次加工の施されたもの
3. 剥片の一部に機能部を作出したもの
8. 破片など

Ⅲ群 ナイフ・スクレイパー類

A類：つまみ付きナイフ

1. 縦形で片面加工のもの
2. 縦形で両面加工のもの
3. 横形のもの
8. 破片など

B類：ナイフ類

1. ナイフ（柄部のあるもの）
2. ナイフ類（両面調整加工により刃部を作出し、柄部のないもの）
3. 破片など

C類：スクレイパー

1. 石ペラと称されるもの
2. 円形を呈し、周縁に刃部が設けられるもの

4 遺物の分類

3. 主に縦長で、下端部に刃部が設けられるもの
4. 剥片の一侧縁もしくは両側縁に刃部が設けられるもの
5. 下端に尖る部分のあるもの
6. えぐり込みのあるもの
7. 素材の形状を大きく変えないもの
8. 破片など

Ⅳ群 石斧

A類：磨製石斧

1. 撥形のもの
2. 短冊形のもの
3. 乳棒状のもの
8. 破片など

B類：石のみ

C類：石斧製作に関わるもの

1. 研磨石材
2. 石斧原材
3. 擦り切り残片
8. 剥片（蛇紋岩、片岩、泥岩など）

Ⅴ群 たたき石・台石

A類：たたき石

1. 棒状礫の一端、もしくは両端にたたき痕があるもの
2. 扁平礫の周縁にたたき痕があるもの
3. 扁平礫の腹・背面にたたき痕があるもの
4. 亜円礫を素材とするもの
5. 複数の分類要素があるもの
8. 破片など

B類：台石

1. 礫の平坦面に使用痕があるもの
8. 破片など

Ⅵ群 すり石・石皿

A類：すり石

1. 断面が隅丸三角形の礫の稜をすったもの
2. 扁平礫の側縁をすったもの
3. 扁平礫を半円状に粗く打ち欠き、弦をすったもの
4. 北海道式石冠と称されているもの
5. 亜円礫を素材とするもの
8. 破片など

B類：石皿

1. 使用面が明瞭に凹んでいるもの
2. 使用面が平坦なもの

8. 破片など

Ⅵ群 石鋸・砥石

A類：石鋸

1. 石鋸
8. 破片など

B類：砥石

1. 研磨面に溝のあるもの（矢柄研磨器など）
2. 板状のもの
3. 角柱状のもの
4. 今後分類を必要とするもの
8. 破片など

Ⅶ群 石錘

A類：石錘

1. 打ち欠きが2か所のもの
2. 打ち欠きが1か所のもの
8. 破片など

Ⅷ群 石核・剥片

A類：石核・原石

1. 石核
2. 石器原石と考えられるもの

B類：剥片・碎片

Ⅸ群 加工痕のある剥片や礫など

A類：加工痕のある剥片

1. Rフレイク
2. 楔形石器

B類：意図不明な加工痕のある礫

（酒井秀治）

IV 滝里2遺跡の調査

IV 滝里2遺跡の調査

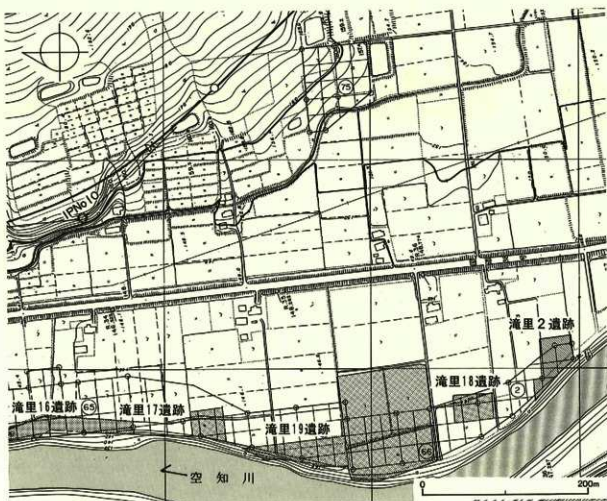
1 調査の概要

滝里2遺跡は空知川の右岸に形成された低位段丘上に立地し、標高は145～146mである。遺跡の南西側を空知川が南東から北西に向かって流れる。遺跡から北に20mほどの所に縄文時代晩期の滝里18遺跡（土壙2基・石囲い炉1カ所検出）があり、南東に旧国道38号線を挟んで400mほどには縄文時代晩期から続縄文時代の滝里26遺跡（土壙8基・焼土33カ所検出）がある。滝里遺跡群のうち空知川に面する遺跡ではもっとも上流部に位置する。滝里ダム建設工事以前は水田として利用されていた。

調査は重機併用による遺構確認を行った。発掘調査に先行して対象地区の雑木の伐開を行い、その後重機により水田の客土、攪乱層の除去作業を行った。遺跡は造田の際に削平されており、包含層は残存していなかった。南側には沢地形が見られる。調査面積は2,300㎡である。

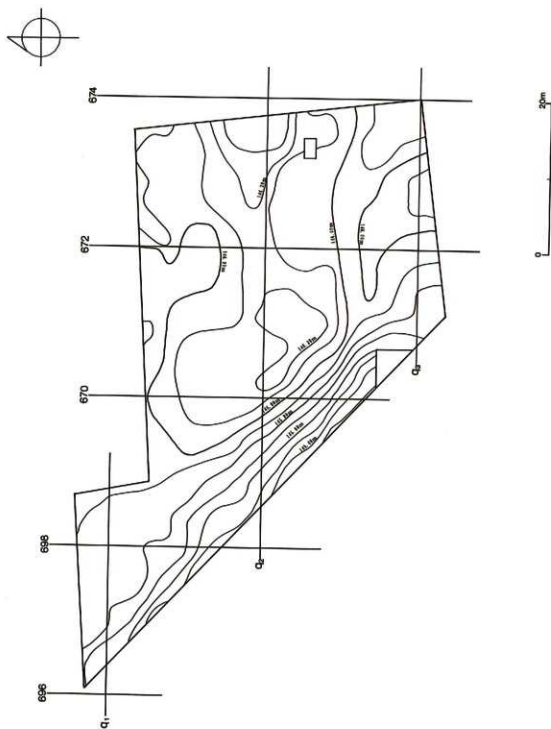
重機による除去作業の後、遺跡の全面精査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

（酒井秀治）



図IV-1 遺跡位置図

1 調査の概要



図Ⅳ-2 最終地形面

V 滝里3遺跡の調査

V 滝里3遺跡の調査

1 調査の概要

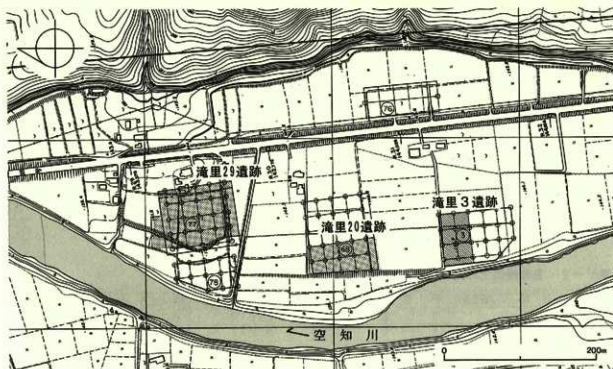
滝里3遺跡は空知川の右岸に位置し、標高143m付近の平坦な低位段丘上に立地している。滝里3遺跡から北に約100mほどで縄文時代晩期の滝里20遺跡（土壊1基・焼土5か所検出）、約200mほどで縄文時代前期末から中期初頭の滝里29遺跡（土壊2基・Tピット7基・焼土4か所検出）がある。滝里ダム建設工事以前は水田として利用されていた。

調査の方法は調査開始前に雑木の除去を行い、重機によって耕作土・攪乱など（I層）を除去した。一部黒褐色土の包含層（II層）が残存していたところでは人力による調査を行った。遺跡は水田の造成によってかなりの部分が削平を受けている。遺跡中央部が若干標高の低い沢状の地形となっており、そこに包含層が残存していた。調査は重機併用による遺構確認を行ったが遺構は検出されなかった。

2 出土遺物

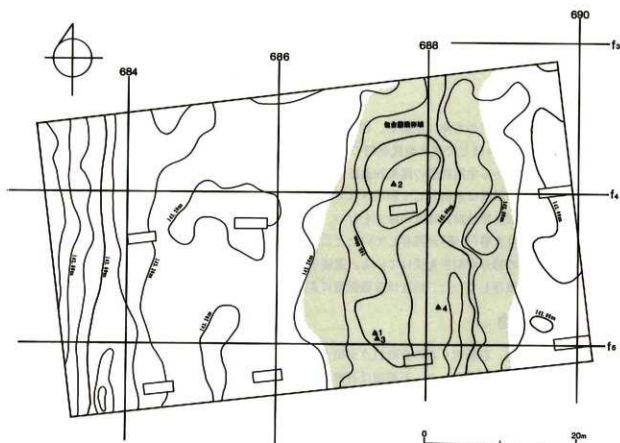
遺物は土器2点、石器類9点の合計11点が出土している。土器は磨滅が激しいため文様などは不明だが、胎土などからV群とした。石器類は石槍・ナイフ類・スクレイパー・Rフレイク・フレイクが出土している。石材はすべて黒曜石であった。

1は有茎の石槍（IB1）。かえし部分は左側にのみある。2は柄部のないナイフ（ⅢB2）。裏面には主剥離面が残る、両側縁の刃部のみを加工している。3は素材の形状を利用したスクレイパー（ⅢC7）。周縁のみを加工して刃部を作出している。左側上部は鉋向剥離を行って刃部を作出している。4はRフレイク（XA）。剥片の周縁に意図不明な加工が両面に施されている。形状から石槍の未製品である可能性がある。（酒井秀治）

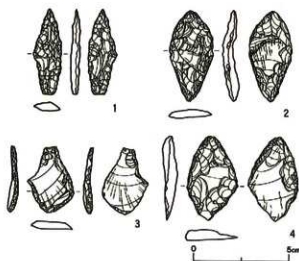


図V-1 遺跡位置図

2 出土遺物



図V-2 最終地形面と包含層残存域図



図V-3 包含層出土の遺物

表V-1 出土遺物一覧

名称	点数	名称	分類	点数
V群土器	2	石 槍	I B 1	1
		ナイフ類	Ⅲ B 2	1
		スクレイパー	Ⅲ C 7	1
		Rフレイク	X A	3
		フレイク	X B	3
合 計	2	合 計		9
総 計				11

表V-2 包含層出土の掲載石器一覧

採 取 番 号	発 掘 区	遺物番号	層 位	器 種 名	分類番号	長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図 版 番 号	備 考
V-3-1	f ₁ -686-23	1	Ⅱ	石 槍	I B 1	45×15×6	3.0	黒曜石	V-1-2	
-2	f ₃ -686-24	1	Ⅲ	ナイフ類	Ⅲ B 2	48×33×6	5.5	黒曜石	V-1-2	
-3	f ₁ -686-23	2	Ⅱ	スクレイパー	Ⅲ C 7	35×25×5	2.9	黒曜石	V-1-2	
-4	f ₁ -686-16	1	Ⅲ	Rフレイク	X A	44×27×6	6.6	黒曜石	V-1-2	

VI 滝里安井遺跡の調査

VI 滝里安井遺跡の調査

1 調査の概要

滝里安井遺跡は空知川の右岸、標高133～149mの低位段丘上に位置する。遺跡東側を流れるボンルベシュベ川により周囲の山から厚い土砂が押し出され、沖積錐が発達している。これにより遺跡北東側では3層の包含層がそれぞれ厚い砂礫層に挟まれて確認され(Ⅱ-1・Ⅱ-A・Ⅱ-B層)、遺跡南西側では1層に収束する(Ⅱ層)土層となる。調査前は水田、畑、宅地、国道敷地として利用されていた。

本遺跡は平成8年度から3か年にわたり調査した。調査の総面積は15,890㎡である。検出された遺構は土壌47基、石囲い炉7カ所、集石8カ所、焼土51カ所である。土壌と石囲い炉、集石2カ所、焼土36カ所については縄文時代晩期後半から続縄文時代初頭の時期のものと考えられる。以下土壌について簡単に述べる。

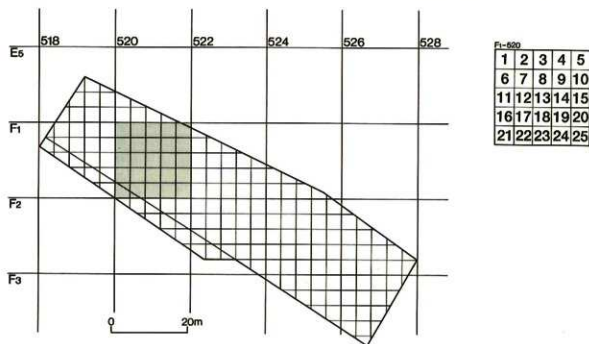
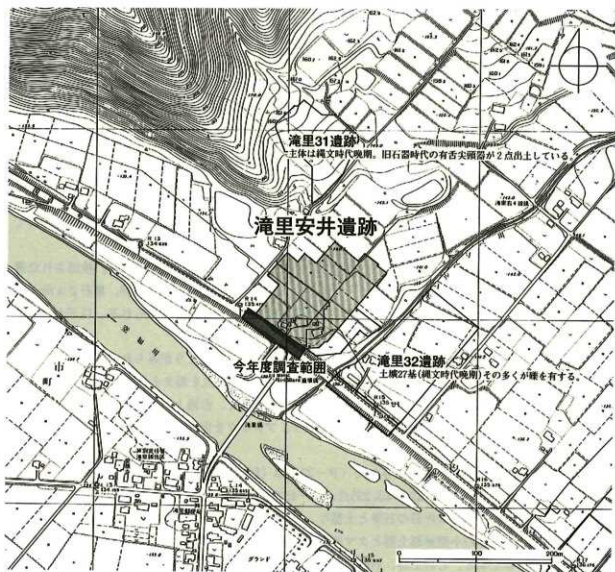
土壌は大きく旧河川縁辺と、遺跡南側の台地上およびその縁にまともがみられ、単独で検出されるものもある。旧河川縁辺では琥珀製平玉、カンラン岩製玉、150点を超える石鏃や、ナイフ、土器などの様々な遺物を伴った楕円形、小型円形の土壌が比較的多く、台地上には礫を伴う円形の土壌が多い傾向がある。単独で検出された土壌にはベンガラ、フレイクを伴うP-1、琥珀製平玉が多量に出土したP-22がある。

琥珀製平玉を伴う土壌は3基検出された(P-22・25(報告済)・P-45)。琥珀製平玉はP-25では完形27点と少ないが、P-22では3,235点、P-45では1,232点(いずれも完形のみ)と多量に出土する。そのほかP-22では片刃の石斧と土器片、P-25ではカンラン岩製玉、無茎の三角鏃、石皿など、P-45では完形の小型銚形土器とクマ形石製品、有茎の石鏃などが出土している。これら琥珀製平玉が出土する土壌と、Ⅵ群土器、石鏃、ナイフが出土したP-23の4基については続縄文時代初頭の土壌墓と考えている(図Ⅵ-2)。土壌形態はP-23・45が小型円形で断面がややフラスコ状になり、P-22・25が楕円形を呈する。

表Ⅵ-1 出土遺物一覧

名 称	点 数		名 称	点 数		名 称	点 数	
	遺 構	包含層		遺 構	包含層		遺 構	包含層
Ⅱ 群 土 器		5	石 鏃	2	114	石 皿	3	10
Ⅲ 群 土 器		367	石 槍		12	砥 石	1	10
Ⅳ 群 土 器		109	石 錐		5	石 核		30
V 群 土 器	18	5,047	つまみ付ナイフ		14	剥 片	30	2,618
Ⅵ 群 土 器	121	413	ナイフ・ナイフ類		42	R フレイク		18
不 明 土 器			スクレイパー	3	95	加工痕ある礫		9
			石斧・石斧関連	4	102	土・石製品	1	3
			た た き 石	1	29	こはく製平玉	1,232	(完形)
			台 石	1	21	原 石(棒状含む)		5
			す り 石		4	礫・礫片		354
合 計	139	5,941	合 計				1,950	3,141
		6,080						5,111

1 調査の概要



図Ⅴ-1 遺跡の位置とグリット設定図

3ヵ年での遺物総点数は190,809点。内訳は土器109,903点、石器等80,906点である。滝里遺跡群中最多の出土量である。縄文時代前期から統縄文時代前半までの各期の遺物がみられるが、縄文時代晩期後葉から統縄文初頭のものが多い。

今年度の調査では標高133～135mの低位段丘縁辺にあたる地区を調査した。調査区は旧国道38号線道路敷地のため、大部分が削平を受けていたが、遺跡南西側は急斜面となり、斜面部より南側には良好に黒色土層が残っていた。このため調査区南側を240m²拡張した。遺跡の東西2ヵ所には旧河道跡が確認された。

今年度発掘した遺構は、土壇10基(P-38～47)、集石2ヵ所(S-7・8)、焼土1ヵ所(F-51)である。土壇は前述したP-45のほか、P-42・44について石斧、土器などを伴うことから墓壇と考えられる。またP-42・44の底面には数ヵ所の杭跡がみられた。土壇と焼土についてはいずれも縄文時代晩期末から統縄文時代初頭の時期と考えている。

今年度の出土遺物総数は11,191点。内訳は土器6,080点、石器等5,111点である。V群土器が8割を越えるが、II～VI群土器も少量みられる。礫石器は過去2年の調査に比較して少ない。

なお調査区南東側より昭和初期に利用されたと思われる渡船場の跡が検出されている。

(愛場和人)

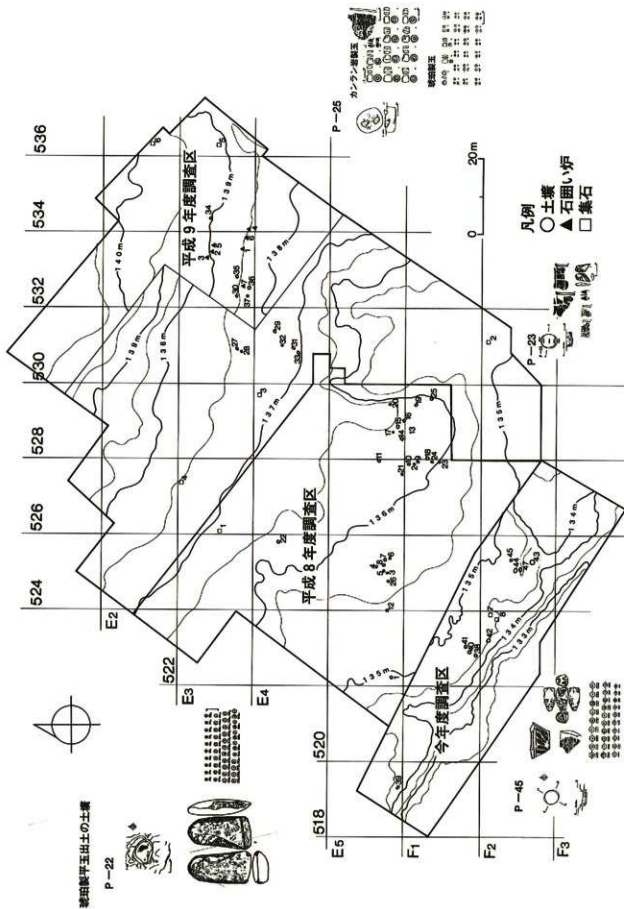
2 基本土層

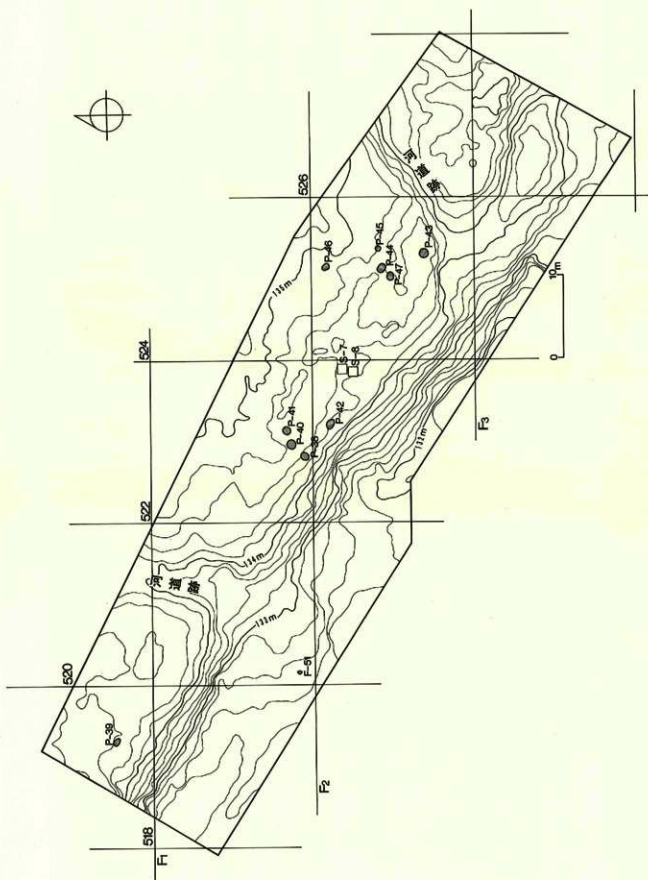
滝里安井遺跡の土層は北東部では厚く堆積した砂礫層に挟まれるように包含層が3層確認された。遺跡南側においては1層に収束する。主にII-1層は縄文時代晩期から統縄文時代、II-A層は縄文時代後期、II-B層は縄文時代前期から中期の包含層となる。

今年度は黒褐色土が1層に収束した部分にあたる。国道造成時に削平をうけていたが、包含層は斜面南側に良好に残っていた。斜面下の平坦面ではII層中に2cm程の黄褐色粘質土層がみられたが、部分的であったため分層はしていない。黄褐色粘質土層の上位の黒褐色土層から縄文時代晩期から統縄文時代の遺物がみられたが、下位の黒褐色土層からはほとんど遺物が出土しなかった。

旧河道跡はグライ化により青灰色の粘質土となり、自然木が残存していた。

(愛場和人)





図VI-3 最終面の地形と遺構位置図

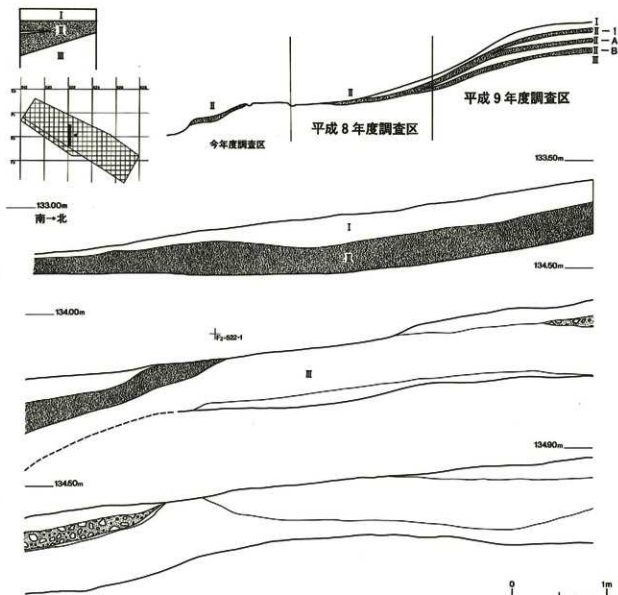
2 基本土層

基本土層は以下の通り。

I層：攪乱土、盛土など。

II層：黒褐色土、褐色土。やや粘質。きめ細かい。斜面部では比較的厚く堆積する。

III層：黄褐色粘質土と砂礫層の互層。II層との間に漸移層はみられない。



図VI-4 基本土層概念図と土層断面図

3 遺構と遺構出土の遺物

(1) 土壌

土壌は段丘縁辺にP-38・40~42は台地上、P-43~47は旧河道縁と大きく2カ所にまとまって検出された。P-38・40・41は直径1mを超える比較的大型の円形の土壌で、横断面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。等間隔で並ぶように検出されたため、同時期のものである可能性がある。P-38は石皿3点、砥石1点、台石片が土壌中央部からまとまって出土した。

P-42・44・45は土壌墓と考えられるもの。石斧(42・44)、石鏃(42・45)、土器(44・45)などがそれぞれ出土している。P-45は直径60cm程の小型の土壌で、琥珀製平玉とクマ形の石製品が出土した。

P-38 (図VI-5・6 図版VI-2)

位置: F₁-522-22・23 規模: 1.07×0.9/0.95×0.84/0.5m

平面形: 不整の円形 長軸方向: ———

出土遺物: 砥石1点、石皿3点、台石片1点、礫1点

調査区中央に位置する。I層調査中、トロニエム岩がまとまって検出された。周辺をⅢ層上面まで掘り下げたところ、円形の落ち込みを確認した。覆土は黒褐色土が堆積しているが、部分的に黄褐色土が混じる。横断面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。遺物は礫1点のほかはすべて礫石器で、土壌中央部にまとまって出土した。すべて被熱しているようである。

1は砂岩製。4面全面に擦り面がみられる。2~4はトロニエム岩製の石皿。3は敲打調整により擦り面が破損する。4は擦り面以外が熱をうけ赤色化している。よく擦られており、窪みが明瞭である。また深さ1cm程の溝状の亀裂が入っている部分に擦り面があることから意図的にこの亀裂を利用したものと思われる。時期および土壌の性格は不明である。

P-39 (図VI-5 図版VI-2)

位置: E₁-518-19 規模: 1.07×0.56/0.86×0.35/0.34m

平面形: 長楕円形 長軸方向: N-35°-W

出土遺物: 炭化物

調査区北西端から単独で検出された。Ⅲ層上面で確認した。覆土は上から黄褐色土、黒褐色土の順序で埋まっている。横底から8cm程上の覆土中で長さ1.2m、幅0.2m程の板状の炭化物が検出された。厚さは1cmに満たない。これ以外には遺物は出土していない。時期及び土壌の性格は不明である。

P-40 (図VI-5 図版VI-2)

位置: F₁-522-23 規模: 1.17×1.16/0.86×0.35/0.34m

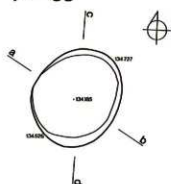
平面形: 円形 長軸方向: ———

出土遺物: なし

P-38検出後、周辺を精査したところ、Ⅲ層上面で黒色土の落ち込みが確認された。覆土は横底部壁際に暗黄褐色土が一部みられるほかは黒褐色土である。横底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。調査中、横底付近から水が滲みだし、常に底面に水がたまる状況であった。遺物は出土していない。時期及び土壌の性格は不明である。

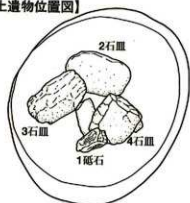
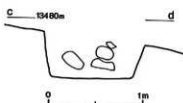
3 遺構と遺構出土の遺物

P-38



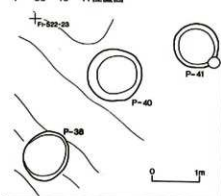
a 13470m b 【出土遺物位置図】

- 1 暗褐色土 黄褐色粒混じる
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗黄褐色土

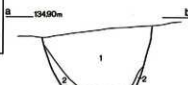
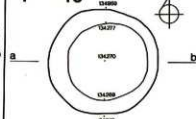


0 50cm

P-38・40・41位置図

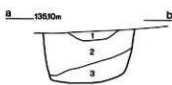


P-40



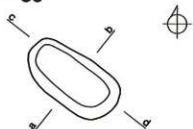
- 1 黒褐色土 やや粘質、小砂利混じる
- 2 暗黄褐色土

P-41



- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 黄褐色粒全体に混じる
- 3 暗褐色土

P-39

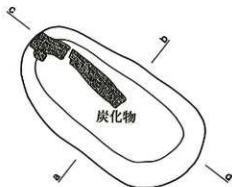


a 13470m b

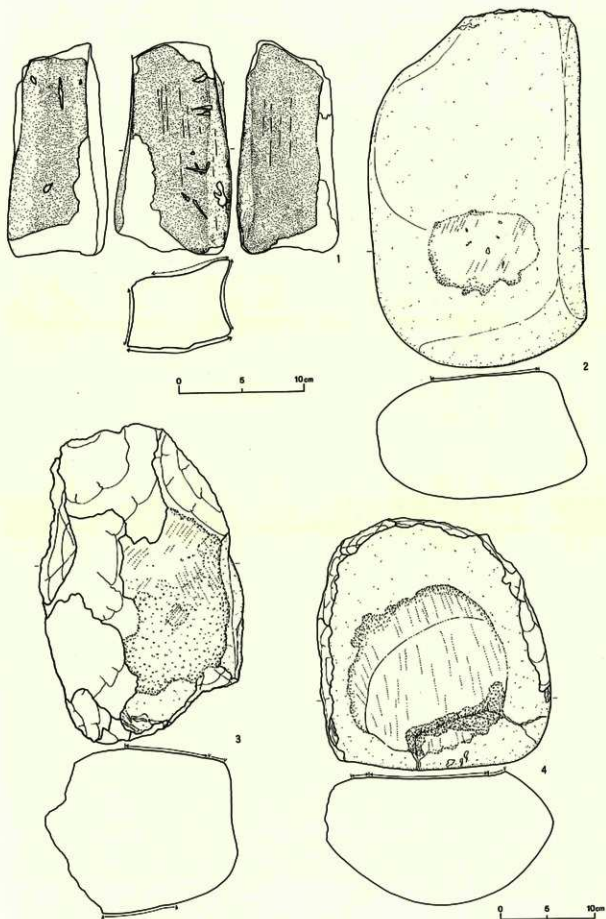
- 1 黄褐色土
- 2 黒褐色土 やや褐色土混じる
- 2' 黒褐色土



【出土遺物位置図】



図VI-5 P-38~41



図VI-6 P-38の出土遺物

P-41 (図VI-5 図版VI-2)

位置: F₁-522-23 規模: 0.98×0.94/0.79×0.75/0.56 m

平面形: 円形 長軸方向: ———

出土遺物: なし

P-38検出後、周辺を精査したところ、Ⅲ層上面で黒色土の落ち込みが確認された。坑底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。時期及び土壌の性格は不明である。

P-42 (図VI-7 図版VI-3)

位置: F₂-522-3・4 規模: 1.19×0.88/0.86×0.66/0.46 m

平面形: 楕円形 長軸方向: N-16°-W

出土遺物: V群c類土器片2点、石鏃1点、石斧1点

Ⅱ層調査後、黒褐色土の落ち込みがみられたため確認された土壌である。覆土は大きく黒褐色土と黄褐色土の互層となっている。坑底は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。坑底には杭跡が3ヵ所確認された。いずれも細く、先端が尖る。規則的な配列は確認できない。土壌東側壁付近では石斧が流れ込んだように斜めに検出された。また土壌西側の壁際からは有茎の石鏃が検出された。黒曜石製で、直径2 cmに満たない小型のものである。

1はカンラン岩製。全体に敲打痕がある。なお石鏃は遺構調査中に紛失した。

縄文時代晩期後葉の土壌墓の可能性が高い。

P-43 (図VI-7 図版VI-3)

位置: F₂-524-19 規模: 1.17×1.07/1.21×1.11/0.37 m

平面形: 不整円形 長軸方向: ———

出土遺物: V群c類土器片9点、石斧片1点、礫片1点

Ⅲ層上面に黒褐色土の落ち込みがみられたため確認された土壌である。平面形は不整の円形で、壁は垂直もしくはフラスコ状となる。覆土中からは土器片、石斧片が散在して出土した。

1・2はV群c類の浅鉢形土器。摩耗が激しい。1には内面に縄線文が1条施される。3は緑色泥岩製。

時期は縄文時代晩期後葉。土壌の性格は不明である。

P-44 (図VI-8・9 図版VI-4)

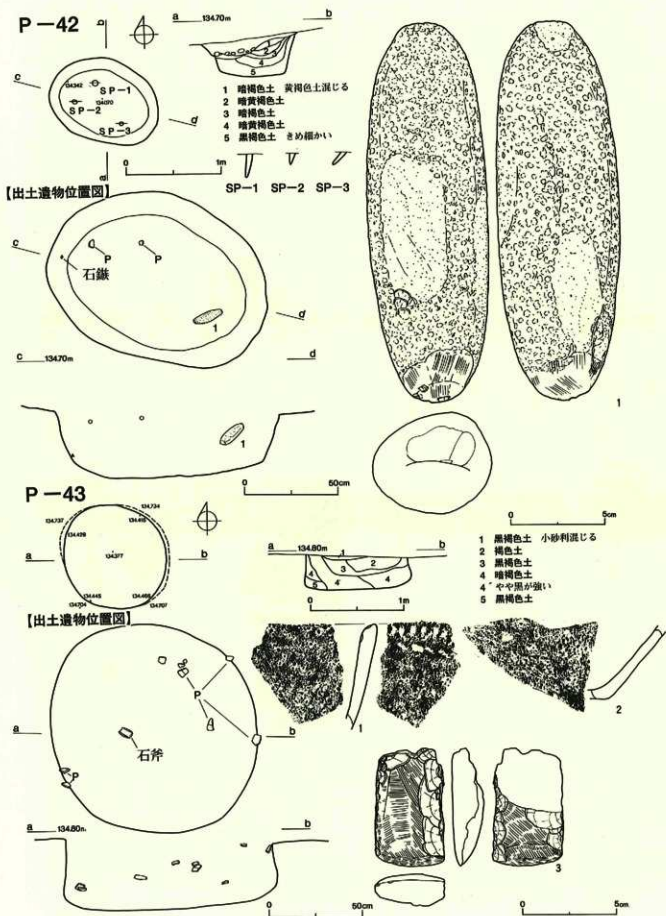
位置: F₂-524-13 規模: 1.18×0.85/0.98×0.73/0.39 m

平面形: 楕円形 長軸方向: N-29°-W

出土遺物: VI群?土器 スクレイパー2点、石斧2点、フレイク2点、礫片1点

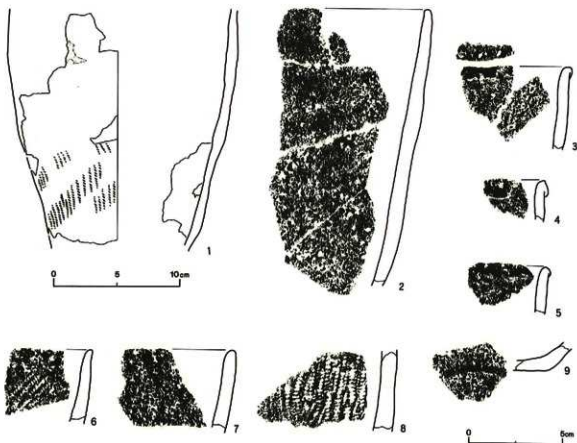
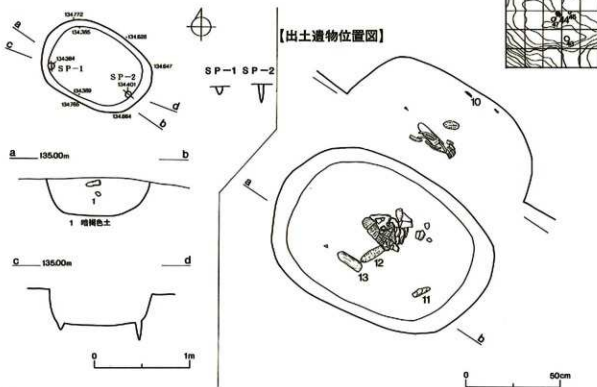
Ⅰ層調査中、Ⅲ層上面近くで土器が潰れたような状態で出土したことから確認した土壌である。2 m程北東にはP-45がある。覆土は基本的に黒褐色土の1層である。遺物は土器が土壌中央部上面、石斧がその下部から2点出土し、坑底近くでスクレイパーが1点出土している。坑底は皿状で、壁は斜めに立ち上がる。坑底では杭跡が2ヵ所検出された(SP-1・2)。長軸方向の壁の立ち上がり部分にそれぞれ設けられており、坑底からの深さはSP-1が8 cm、SP-2が20 cmである。細い素材の先端を尖らせて杭としているようである。

土器はほとんど文様が摩耗しているが、縄文のみが施文された土器と思われる。胎土には石英、長

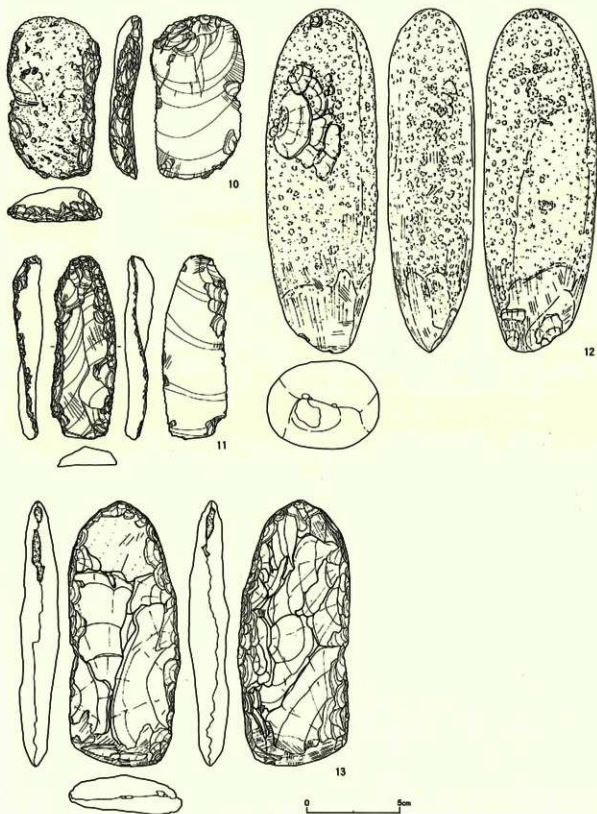


図VI-7 P-42・43と出土遺物

P-44



図Ⅷ-8 P-44と出土遺物(1)



図VI-9 P-44の出土遺物(2)

石が混じる。縄文が縦位に施されるためVI群a類土器と考えている。1は胴部のみを復元した。非常に摩耗が激しい。LR縄文が縦位に施される。口縁部、底部は意図的に打ち欠かれた可能性がある。輪積み痕を残し、内面は指頭による粗い調整がなされる。2は口縁部が平縁となり、やや内傾する。輪積み痕が残る。胎土には石英のほか、白い細粒が混じる。3・4・5は口縁部が折り返し状になるもの。同一個体である。3には口唇上に棒状工具の先端部で刻みがいれられる。6は口縁部は尖り気味となり、やや開く。胎土には石英のほか、白い細粒が混じる。7は口唇断面が丸みを帯びる。8は唯一胎土に石英、長石が含まれず、焼成がよい。内面には横位に調整がみられる。9は底部。1と同一個体の可能性がある。10・11は壙底直上出土のスクレイパー。11は剝離面に原石を残す。12・13は石斧。12はカンラン岩製。全面に敲打による調整がなされる。13は片岩製。側縁上部には敲打痕がみられる。

続縄文時代初期の土壌墓の可能性がある。

P-45 (図VI-10~12 図版VI-5・6)

位置: F₂-524-14 規模: 0.6×0.58/0.64×0.6/0.34m

平面形: 円形 長軸方向: ———

出土遺物: VI群完形土器1点、VI群土器片3点、石礫片1点、フレイク22点

琥珀製平玉1232点(完形)、ベンガラ粒、炭化物(14C年代測定)

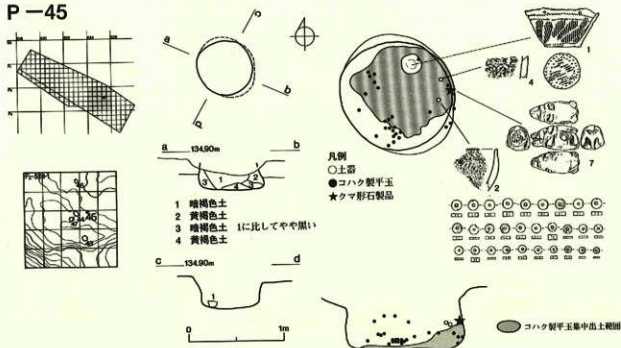
Ⅲ層上面の黒色土の落ち込みを調査中に土器片が出土した(3)ことから土壌の可能性を考え調査した。半截中に東側壁際に張り付くようにクマ形の石製品が出土し、さらに掘り下げた段階で琥珀製平玉が散発的に出土し始めたことから土壌墓と確認した。琥珀製平玉は覆土中位からみられ、壙底とその直上に集中する。壙底での分布は土壌全体に広がるが、やや北東側にまとまる傾向がみられる。壙底で一部連なって検出された以外は、バラバラの状態出土する。石製品が出土した北東から東側の壁では張り付いた状態で平玉が出土している(図版VI-5-5)。

土壌北側壙底部からはほぼ完形の鉢形土器が出土した。土器の中や土器の下位からも平玉が出土している。覆土中にはベンガラ粒が少量みられ、壙底からは2~3cm程の炭化物も出土した。

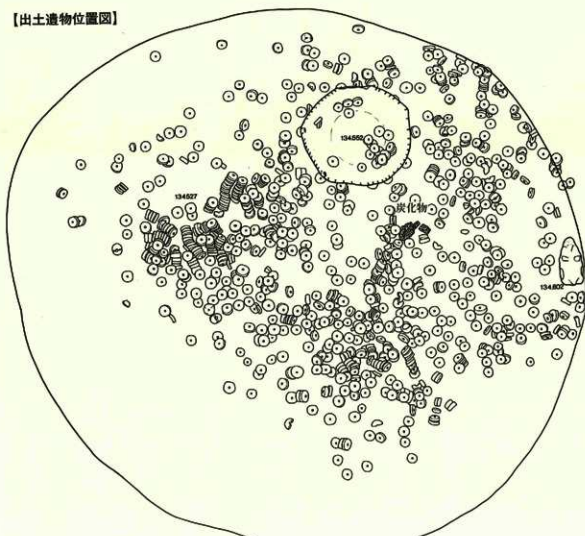
土壌の形状は円形。直径60cmと小型である。壙底面は平坦で、壁は垂直もしくはフラスコ状になる。覆土は埋め戻しによるもので、暗褐色土に黄褐色土が斑状に混じる。

土器はすべてVI群a類土器である。1は小型の鉢形土器。口径11.6cm、高さ6.3cmである。上面観は五角形となり、その角が波頂部となる緩やかな波状口縁となる。うち2ヵ所の頂点下には直径2mm程の孔が穿たれる。口唇断面形は丸形。口唇内面には縄による刻みがいれられる。口縁部は無文部に横位の縄線文が2条施される。地文はLR縄文が縦位に施される。底面と底部の側面には縄端による刺突文が施文される。底面は渦巻状の文様となる。胎土には石英、長石が多量に含まれる。2は小型の鉢形土器。口縁部には縄線が1条施される。3は浅鉢形土器の底部。4は縄線により円弧文状の文様が施文されているものである。5は黒曜石製の石礫。有茎とみられる。6は黒曜石のフレイク。7はクマ形石製品。熊の全身が表現される。大きさは直径5.1cm、高さ2.6cm、幅2.4cm、重さ134.5gである。耳部、四肢、尾が削り出され、胴部やや後肢側には両側から穿孔された貫通孔がある。孔には後肢側に紐擦れの痕が残る。擦痕は一部線刻状にみられるが、基本的にはよく磨かれ、擦痕を残さない。頭部は非常に写実的で、額の盛り上がり、下顎のくびれなど丁寧に磨きあげている。口は開いた状態を表現していると思われる。口を表現する刻線は意外に長く、頬にあたる部分まで伸びる。尾部の下、後肢の間から腹部にかけ膨らみがみられる。生殖器を表現したものであろうか。垂飾として

P-45

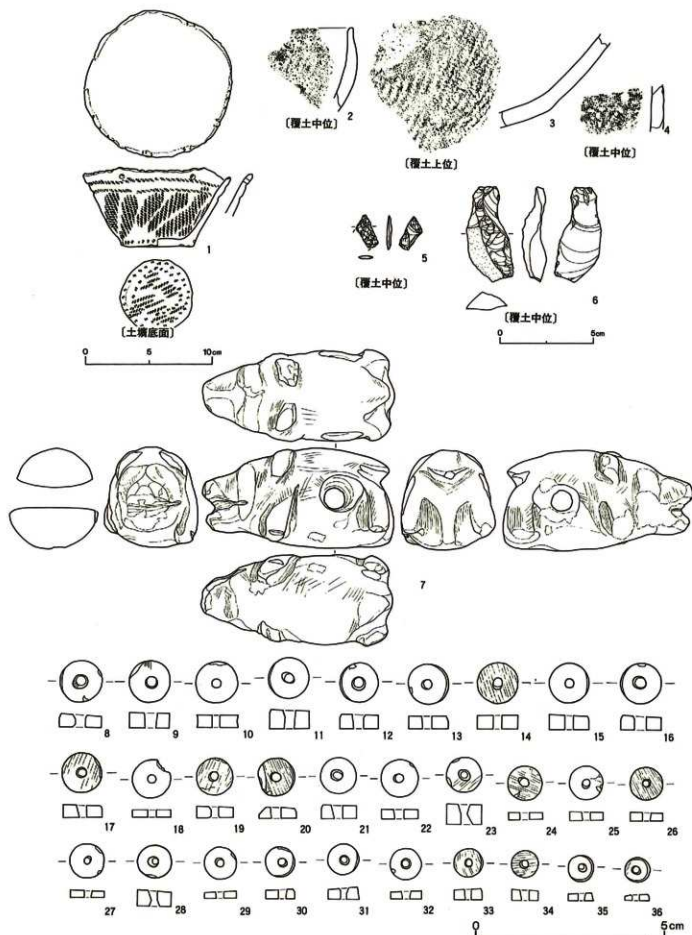


【出土遺物位置図】

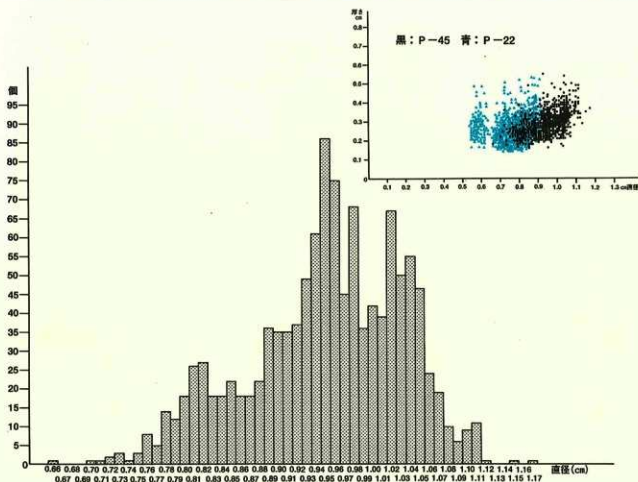


図Ⅵ-10 P-45と出土遺物(1)

3 遺構と遺構出土の遺物



図VI-11 P-45の出土遺物(2)



図VI-12 P-45とP-22（前年度報告済）の琥珀製平玉計測分布図

利用されたものと考えられる。石材は蛇紋岩である^(*)。

8～36は琥珀製平玉。琥珀製平玉は完形1,232点、孔の中間でわれているもの169点で小破片を除いて1,570点を越える。完形のうち計測可能なもの1,183点について計測したところ、平均の大きさは直径0.95cm、厚さ0.29cm、重さ0.22gであった。これまで滝里遺跡群で出土した琥珀製平玉に比べやや大振りである。（図VI-12）。

統縄文時代初頭の土壌墓と思われる。脂肪酸分析の結果、ヒトに類するものを埋めた可能性があるということであった（Ⅷ章－5）。また墳底から出土した炭化物の¹⁴C年代測定においては2350±40年という結果がでている。（Ⅷ章－6）

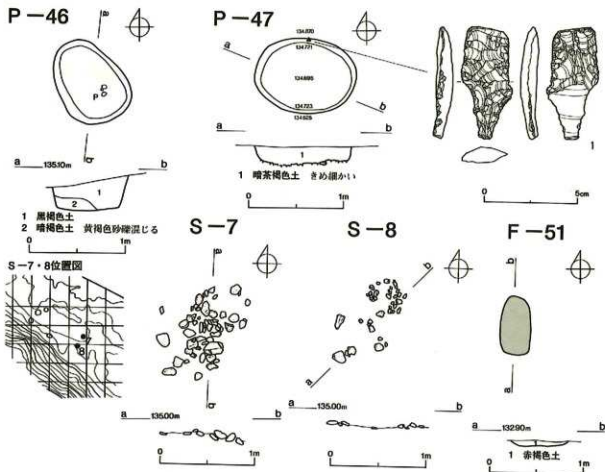
*東京芸術大学保存科学教室非常勤講師の建石徹氏に石材鑑定のため、X線回折法（非破壊法）による鉱物組成の測定、蛍光X線分析（非破壊法）による主成分化学組成の測定をしていただいた。「石製品の肉眼観察から、本資料の石材として蛇紋岩、軟玉（ネフライト）等の可能性を考えたが、X線回折法のピーク値、Mgに富む蛍光X線分析の結果は特に蛇紋岩の特徴と矛盾しない」ということであった。なお詳細なデータ等は平成11年度の年報で報告する予定である。

P-46（図VI-12 図版VI-7）

位置：F₂-524-3 規模：0.94×0.66/0.83×0.51/0.37m

平面形：不整楕円形 長軸方向：N-51°-W

出土遺物：V群c類土器片3点、フレイク3点



図Ⅵ-13 P-46・47と出土遺物、S-7・8、F-51

Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みがあり、検出された土壌である。平面形は不整の楕円形で、坑底は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。土壌の時期は縄文時代晩期後葉、性格は不明である。

P-47 (図Ⅵ-12 図版Ⅵ-7)

位置：F-524-13 規模：1.07×0.8/0.94×0.71/0.14m

平面形：楕円形 長軸方向：N-1°-W

出土遺物：ナイフ類1点

P-44から南西に1m程離れて存在する。Ⅲ層上面で褐色土の落ち込みがみられたことで確認された土壌である。砂礫層を掘り込んでいる。確認面からの深さは14cm、坑底は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。土城北側壁から両面調整のナイフ類が出土している。

1は両面調整のナイフ類。刃部は片面加工で、急角度の刃部となる。

周囲にP-44・45があり、同時期の土壌の可能性がある。性格は不明である。(愛場和人)

(2) 集石

集石は2ヵ所確認された。(S-7・8)大きく2つのまとまりをもつ土壌群の中間に位置する。

S-7・8は近接するため、大きく1つのまとまりとしてとらえられる可能性がある。周囲からはV

群c類土器が出土することからこの時期のものの可能性がある。

S-7 (図VI-12 図版VI-7)

位置: F₂-522-5 規模: 1.04×0.62m

出土遺物: たたき石1点、礫123

拳大の礫が集中する。礫は焼けて赤色化するものが多い。

S-8 (図VI-12 図版VI-7)

位置: F₂-522-10 規模: 1.25×0.70m

出土遺物: V群c類土器4点、フレイク3点、礫227点

拳大の礫が集中する。礫は焼けて赤色化するものが多い。

(愛場和人)

(3) 焼土

F-51 (図VI-12)

位置: F₁-520-21 規模: 0.63×0.34×0.06

出土遺物: なし

今年度の調査区からは1ヵ所のみ検出された。同層位の近接した位置からV群c類土器が集中して出土した。(図VI-18-25・26)。時期もこれに伴い縄文時代晩期後葉と思われる。

(愛場和人)

4 包含層出土の遺物

(1) 土器

Ⅱ群土器 (図Ⅵ-16-1)

Ⅱ群b類土器に属するものが5点出土している。1は口縁部に折り返し状の貼付帯をもつ。口唇上面には矢羽状の文様が短刻線で描かれる。口縁部と内面には先端の丸い工具でなされた押し引き風刺突文が巡る。胎土には石英、長石が含まれる。

Ⅲ群土器 (図Ⅵ-16-2~7・9・10・12・14・15)

Ⅲ群b類：モコト式、北筒式に相当するもの。367点出土している。調査区全域から出土している。

2・3は小突起をもつもの。2は二つの小突起頂部からV字状と、口縁部に沿って2条、それぞれ貼付けがなされる。V字状貼付け上には刺突文が施される。3は横位に連続刺突文と沈線文が交互に施され、その下に貼り付けがなされる。貼り付け上には縄文が施される。4~6は平縁のもの。4の口縁部はやや外反し、口唇断面は尖り気味となる。口縁部は肥厚し、口唇直下と肥厚帯の間に円形刺突文が施される。胎土には石英、2~3mm程の小砂利が含まれる。5の口唇断面は切り出し形で、口縁直下には押し引き文が施文される。補修孔が穿たれている。6は口唇断面が丸みを帯びた角形で、口唇上には棒状工具による刺突と刻みがみとれる。7は摩耗が激しく、文様はよくわからないが、細い粘土紐、刺突文が確認できる。板状に近いことから土製品の可能性がある。9は貼付帯上に逆「3」の字様の押し引きが施され、貼付け下端には不規則に下方から上方へ刺突がなされる。これから3cm程下に同様の刺突があることからもう一条平行に貼付けがあった可能性がある。地文の縄文も予想される貼付け位置を境に方向が変わっている。ベンガラが一部付着する。12・14・15は胎土からこの時期の底部と考えられる。

Ⅳ群土器 (図Ⅵ-16-8・11・13 図Ⅵ-17-16~19)

109点出土している。

Ⅳ群a類：(8、11、13) 余市式に相当するもの。

胴部などⅢ群b類土器との見分けは胎土の違いによった。Ⅲ群b類土器より石英、長石の含有量が多い傾向があるようである。

8・11・13は同一個体の可能性がある。胎土には石英、長石を多量に含む。いずれも摩耗が激しいが、貼付け上には縄文が施される。

Ⅳ群b類：(16、17・24) 手稲式に相当するもの。

16・17は同一個体。胎土には砂粒が含まれる。内面はへら状工具で磨かれる。

Ⅳ群c類：(18、19) 堂林式に相当するもの。

18・19は同一個体。胎土には砂粒が含まれる。

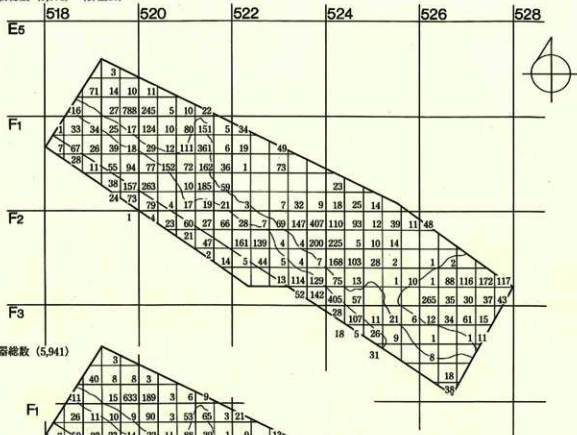
V群土器 (図Ⅵ-17-21 図Ⅵ-18-21)

5,047点出土している。V群c類が大部分を占める。

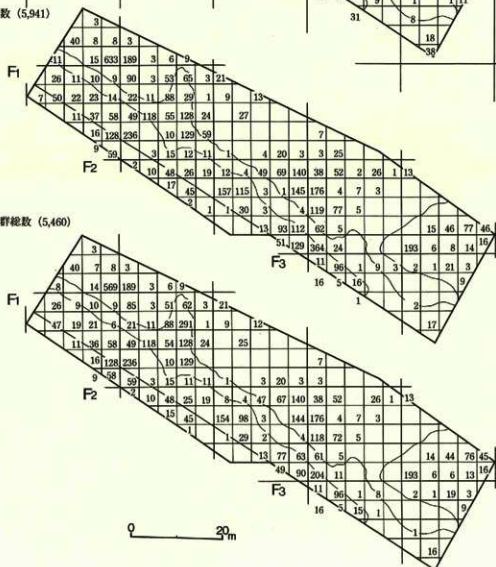
V群a類：(20~23) 爪形文もしくは、刺突文を主体とするもの。

薄手で、焼成がよいものが多く、胎土には石英、長石をほとんど含まない。20・23は爪形文が施されるもの。20は爪形文と刺突文が施される。21・22は下方からの刺突がみられる。

遺物総数 (9,071) (土器10)



土器総数 (5,941)

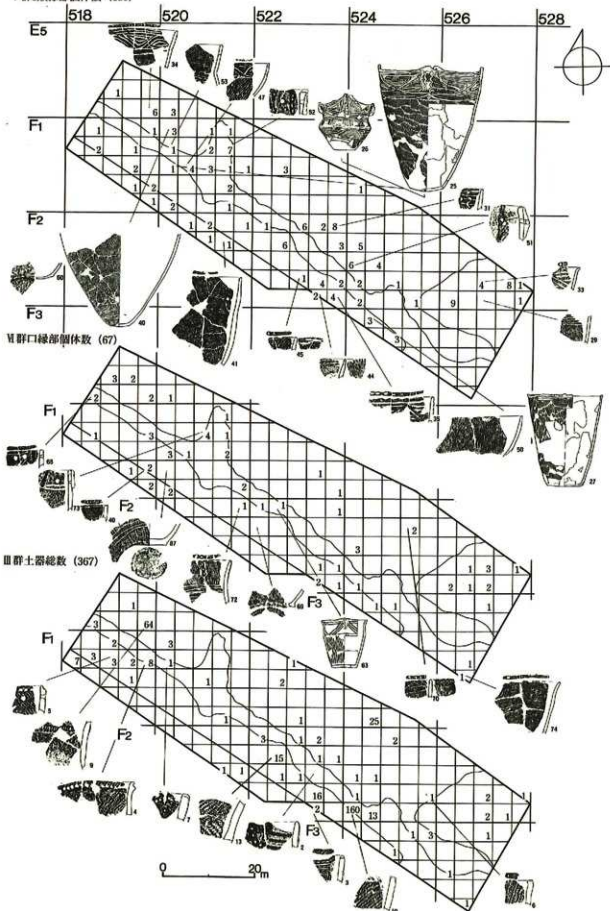


V・VI群総数 (5,460)

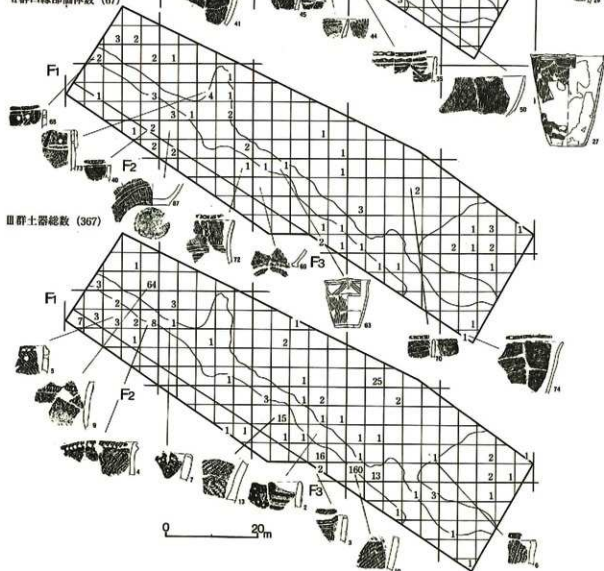
図VI-14 包含層出土の遺物総数と土器分布図(1)

4 包含層出土の遺物

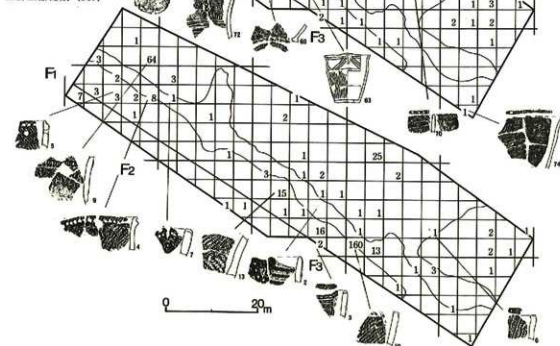
V群c類縁部個体数 (150)



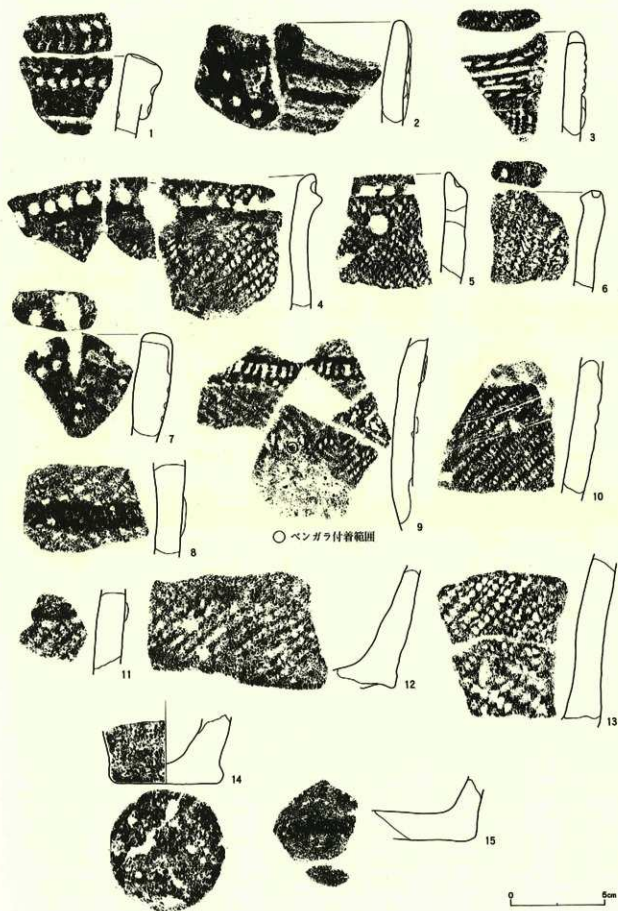
VI群口縁部個体数 (67)



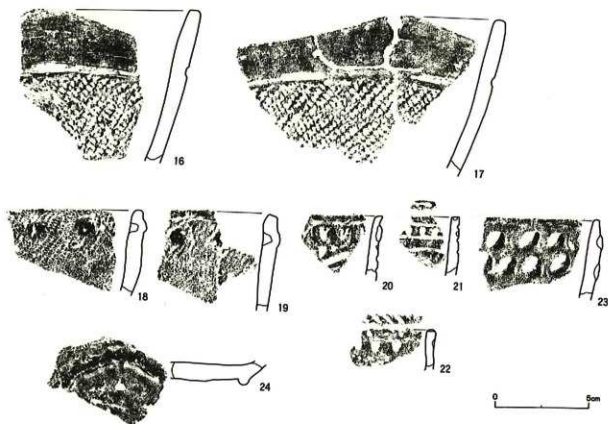
III群土器総数 (367)



図Ⅵ-15 包含層出土の土器分布図(2)



図VI-16 包含層出土のⅡ・Ⅲ・Ⅳ群土器(1)



図VI-17 包含層出土のN群(2)・V群土器(1)

V群c類：(25～62)

V群b類と思われるものもあるが、明確に分類できないためV群c類として扱った。また縄文のみの胴部破片についてはV・VI群の区別が困難であるため、便宜的にV群として集計した。V・VI群の分類は口縁部破片及び底部について行った。個体数の集計は口縁部破片によって行い、接合片と同一個体としたものは1点として数えた(図VI-15)。

調査区全域から出土する。胎土には石英、長石を含むものが多い。

復元土器(25～27)

25・26はⅡ層調査中2個体がまとめて出土した。同時期の土器と思われる。25は口径33cm、器高41cmの大型の深鉢形土器。段がある丸底部から直線的に斜めに立ち上がり、口縁部付近でやや直立気味となる。口縁には4つの突起があり、その頂部は指頭の押圧により凹んでいる。1カ所の突起の内面には竹管状工具による刺突がみられる。口縁部には横位、斜位の沈線文により、文様帯が構成される。比較的太い沈線で、菱形と三角形で構成された文様帯を施した後、菱形中央に横位に沈線が引かれる。その横位沈線両端には同じ施文工具での刺突がなされる。また突起下には蛇行沈線文がそれぞれ3条垂下する。蛇行沈線文下の文様帯下端には刺突が施されている。刺突を起点に円弧文、さらに横位の蛇行沈線文が刺突下に施文される。太い沈線で区画した三角の内部は細い横位の沈線文で充填される。口唇断面形は突起部以外は丸みを帯びた、やや切り出し気味の角形。口唇上と表側角にかけて縄による刻みが縦にはいる。地文はLR縄文である。

26はいわゆる舟形土器。大きさは長軸口径約21cm、短軸口径18cm、器高18cmである。口縁部は紡錘形となるがそれ以外胴部、底部はほぼ円形となる。口縁部には触先のように2つ大きな頂部があり、

そのそれぞれの中に副突起が2つ対になっての小突起がある。頂部と小突起下にはそれぞれ対になる貼り付けがあり、頂部の貼り付けは長く、その頂部は指頭の押圧により凹んでいる。貼り付け上には棒状工具による刻みと、中央部に表側から斜め上に貫通孔がある。また下部には貼り付けを横に貫通する孔が穿たれている。小突起下の貼り付けは半円形で、中央には横に貫通する孔が穿たれている。文様帯は広く、口縁から胴部下部まで沈線文が施される。大きく口縁部、張り出し上部、張り出し下部と3つの異なる文様帯で構成される。張り出し上部には5条1単位縦位の沈線文の上下を横位の短い沈線文でつなぐ文様となる。また口縁部と張り出し下部の文様帯は三角形を組み合わせた文様となる。口唇断面形は角形。底部は平らで、内面はやや盛り上がる。胎土は25と同様石英、小礫が含まれるが、量は少なく、焼成はよい。張り出し上部の沈線内に少量ではあるがベンガラが付着している。補修孔が触先部の1ヵ所にみられる。

27は深鉢形土器。口径約23cm、器高29cm。器形は底部から比較的まっすぐ立ち上り、口縁部は直立する。口縁部には4ヵ所に、縄による刺突、円形の縄線文が施された小突起がある。口唇断面形は丸みがある角形で、口唇部から表側、裏側に縄線が刻まれる。地文の縄文はL R原体による斜行縄文である。内面は丁寧に磨かれる。焼きはよい。底部は平底。縄文とともに細い竹管状工具で刺突が施される。磨滅して明瞭でないが刺突は底部中央にまとまるようである。

拓土土器 (図VI-19~21-28~62)

・深鉢形もしくは鉢形土器 (28~41)

28~32は平行の縄線文、沈線文を主体とするもの。29を除き胎土には石英、長石の他に白い粒が含まれている。28は口縁部が波状となるようである。29は胎土が白色で焼きがよい。細い沈線文が施文されるが、一周はしない。地文はL R縄文となる。30は刺突と平行沈線が施文される。31は平行沈線文施文後、縦位に2条の蛇行文を描く。33~36は平行、斜位、曲線の沈線文を組み合わせて文様が描かれるもの。33・34・36は口縁部がやや外反する。33は口唇内面に縄圧痕がみられる。37~39は刺突文が主体となるもの。40・41は地文の縄文のみのもの。41は胴部が膨らみ、口縁部が直立する器形となる。

・浅鉢形土器もしくは小型鉢形土器 (42~50)

42~44は縄線文が施されるもの。43は口唇内側から表側方向に竹管状工具で刺突される。45~47は内外面に沈線文が施されるもの。46は口唇内側に縄端圧痕が施される。47は口唇上に縄文が施される。48~50は縄文のみのもの。50は口唇断面が角形となる。土器内面、口唇上面ともよく磨かれている。

・舟形土器、張り出しをもつ鉢形土器 (51~54)

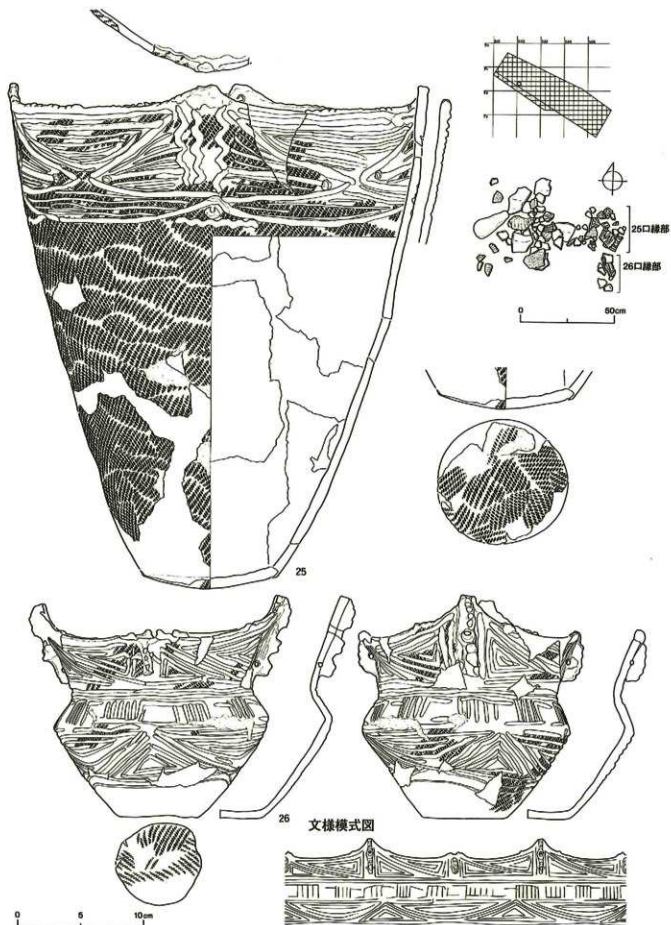
51は貼り付け中央部横から斜め上方に孔が穿たれる。53 a bは同一個体。いわゆる魚籠(びく)形を呈するものと推測される。口縁は波状で、口唇断面形は角形となる。文様は細い縄線文によって構成される。53 bでは2つの楕円形が表現される。54は口唇部に縄による刻みが施される。

・壺形土器 (55~57)

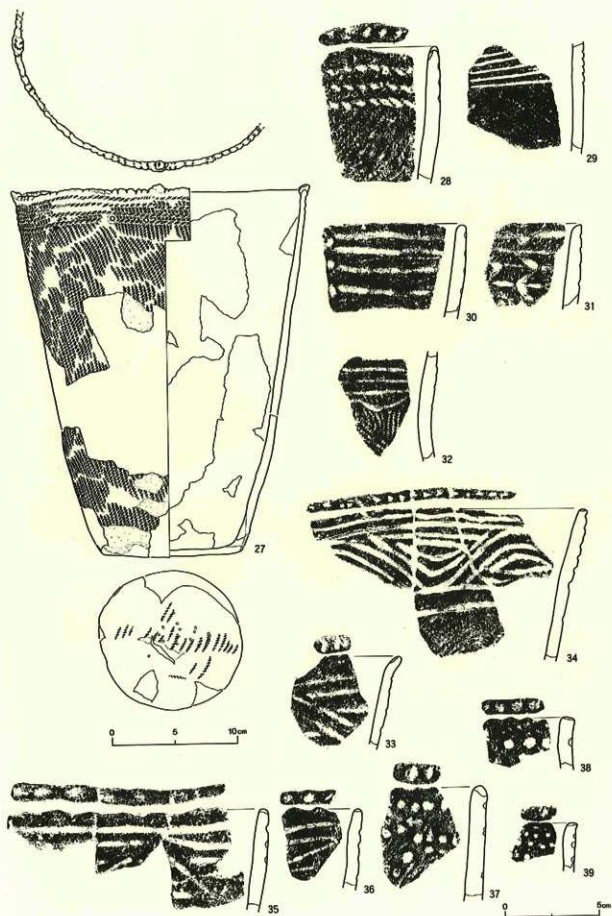
55は頸部。56は半截竹管状の工具による刺突文が施文される。焼きがよく、石英、長石を含まないことから、V群a類の可能性がある。57の内面は指頭による調整により、凹凸がある。

・底部 (58~62)

58~61は浅鉢形土器の底部。62は深鉢の底部。胎土中に直径4mm程の黒曜石の細片が観察できた。1片のみの為、偶然混入したものと思われる。

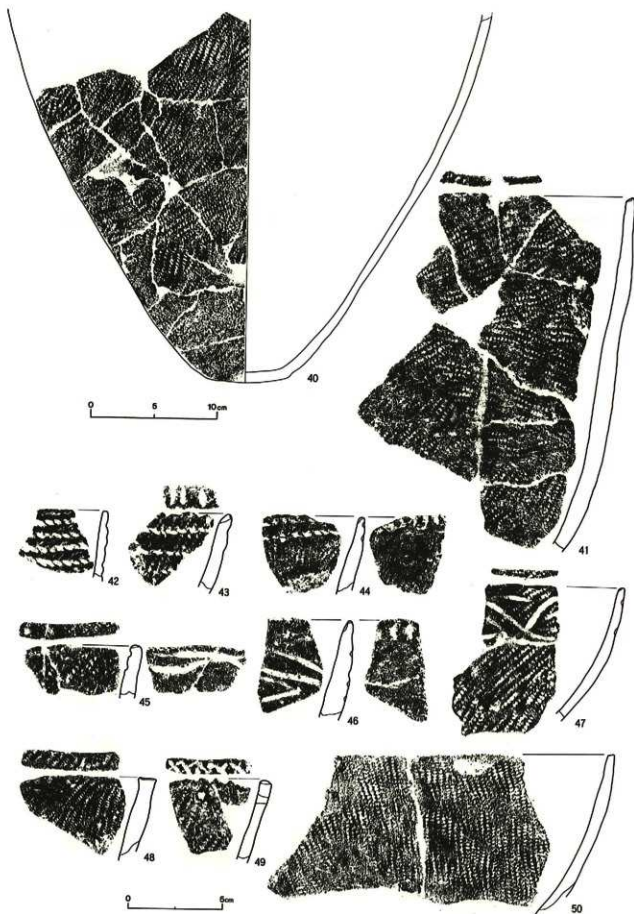


図Ⅵ-18 包含層出土のV群土器(2)

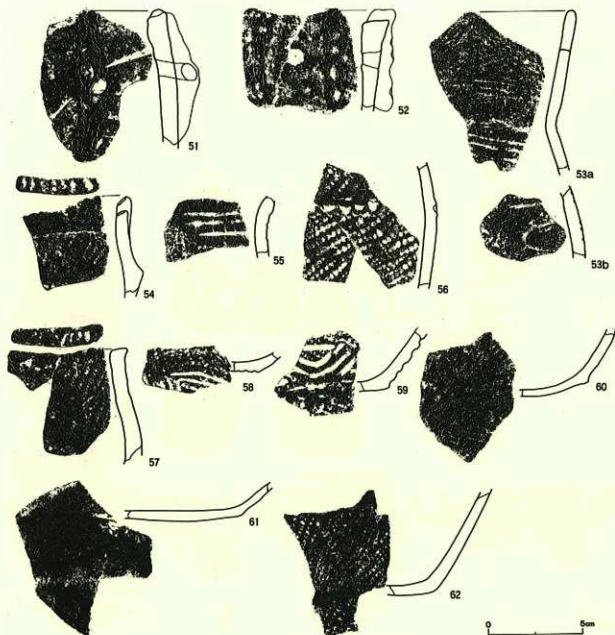


図VI-19 包含層出土のV群土器(3)

4 包含層出土の遺物



図VI-20 包含層出土のV群土器(4)



図VI-21 包含層出土のV群土器(5)

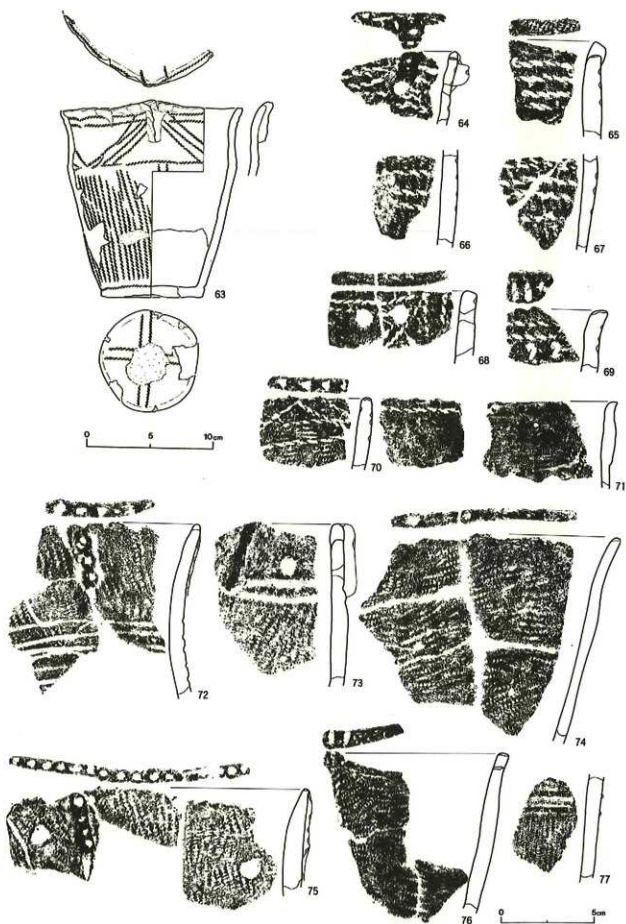
VI群土器 (図VI-22・23)

すべてVI群a類である。口縁部が開く、胴部が膨らむなど器形や胎土により分類した。V群c類土器に比し石英、長石が少なくなる。調査区全体に出土する。

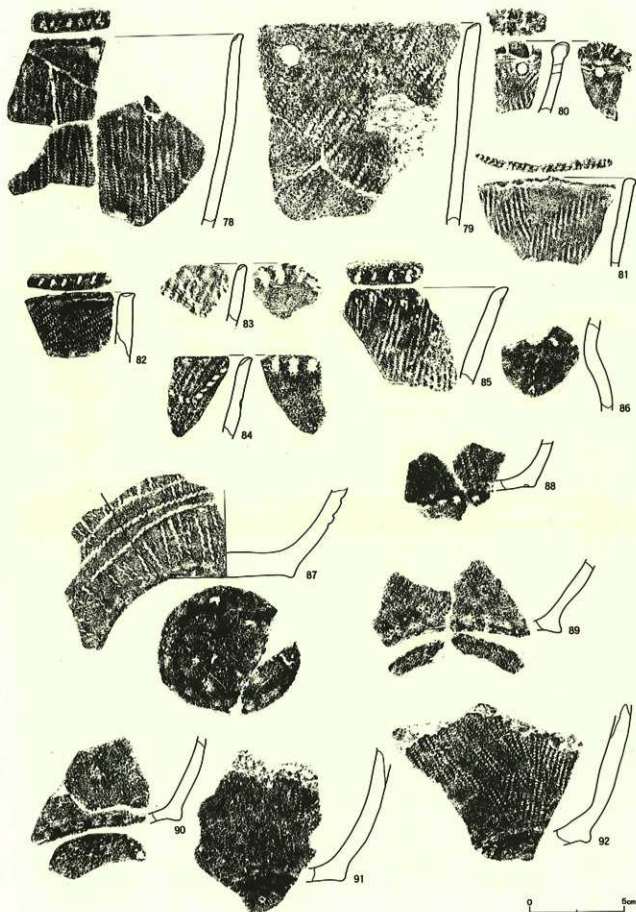
VI群a類：(63~92)

復元土器 (63)

63は推定口径15cm、器高約15.3cmの深鉢形土器。底部直径は8cmを超える。器形は底部から斜めに直線的に立ち上がり、胴部上半がやや張り出す。口縁部はくびれる。口縁には少なくとも1対の貼り付けが推定され、貼り付けを頂点としたゆるやかな波状となる。貼り付けは断面が三角形となる。文様はまず張り出し部に横位に縄線を1条施した後、斜位、口縁直下の2条の横位縄線文の順序で施文される。口唇上には縄線が巡り、貼り付けのある波頂部内面には縦に2条の縄線が施文される。LR



図VI-22 包含層出土のⅥ群土器(1)



図Ⅵ-23 包含層出土のⅥ群土器(2)

縄文が胴部に縦位に施される。底部側面と底部外面には縄線文が施文される。底部外面には2条1組の縄線が十字に施される。

拓本土器 (64~92)

・深鉢形土器 (64~77)

64~70は縄線文が施されるもの。64は緩やかな波状口縁となり、その波頂部から短い貼り付けが下る。貼り付け上には縄端による圧痕がみられる。口唇は縄によって刻みが入れた後、口唇中央を凹ませる様に沈線が一部引かれる。68は口唇断面形が丸みを帯びた角形となり、口唇上には縄文が施文される。69の胎土には石英、長石が含まれる。2条の縄線文の下に縄端圧痕文が施される。70は土器の内外面に縄線文が施文される。地文はLR縄文が横走る。口唇上には竹管状工具による刺突がなされ、口縁は小波状様となる。71は口唇直下3cm程の内外面に同じ胎土の粘土が化粧土様に貼り付けられる。外面は横位に磨かれ、内面は指頭による調整のみで、凹凸を残す。

72・73・75は沈線文が施されるもの。72は口縁部が開いて、胴部がふくらむ器形。口唇断面は尖り気味となり、小波状となる。薄い貼り付けが垂下し、貼り付け上には中空の工具(骨?)により刺突される。沈線文は5条の平行沈線文と一番上の平行沈線から上へ伸びる斜位のものが確認できる。73は胴がふくらむ器形が推測される。補修孔が穿たれている。75は小波状口縁。薄い貼り付けが垂下し、その上には中空の工具により刺突がなされる。貼り付け下部には上方へ押し上げるような刺突がみられる。2つの孔はいずれも補修孔である。72と近似しているが同一個体ではない。

76は縄文のみのもの。波頂部に小突起がみられ、突起には棒状工具で刻みが入れられる。口唇断面形は角形。口唇表側角にも浅く刻みが付けられる。

77には微隆起線文がみとめられる。

・鉢形土器 (78~85)

78~82は縄文が施されるもの。79は胎土に砂粒が含まれる。内外面には炭化物が付着する。80は口唇部を覆って粘土が貼り付けられ、縄線による刻みが入れられる。口縁部には貫通孔がみられる。82は胎土が黒色となる。口唇断面形は角形。口唇上面には縄による刻みが入れられる。

83・84は円弧状の縄線文が施されるもの。83は胎土に石英を含まず、焼きがよい。84は石英を多量に含む。

85は口縁部に1条縄端圧痕文が巡る。口唇断面形は切り出し形となり、同様の施文具による刻みが施される。胎土には白い顆粒状の小礫が混じる。

・異形の土器 (86)

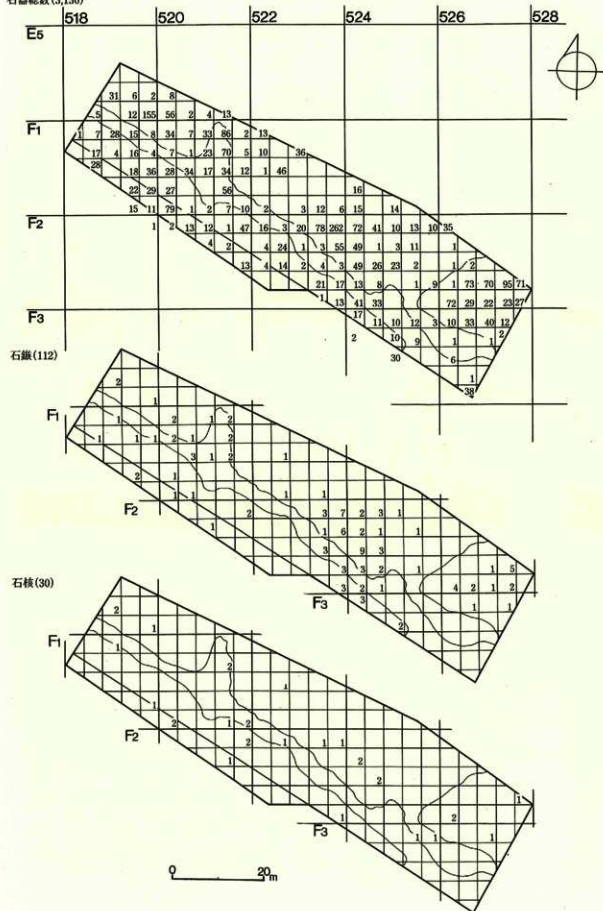
86は胴部が膨らむ器形となるようである。縄線で曲線を描く文様が描かれている。

・底部 (87~92)

87は深鉢形土器の底部。胎土には石英、小礫が含まれる。横位の縄線を施文した後、縦位に縄線を施している。89・90は胎土に小礫を含む。内面は磨かれている。91はRL縄文が縦位にまばらに施文される。92は内面に明瞭な段があり、よく磨かれる。胎土には石英が少量含まれる。

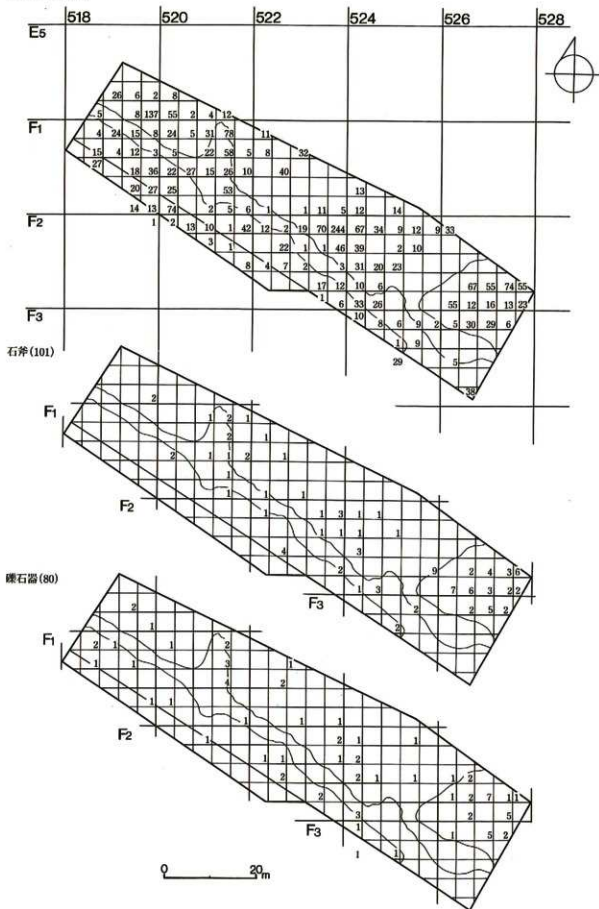
(愛場和人)

石器総数(3,130)



図VI-24 包含層出土の石器分布図(1)

フレイク(2,618)



図VI-25 包含層出土の石器分布図(2)

(2) 石器等 (図VI-26~30 図版VI-14~16)

包含層出土の石器は3,141点である。剥片石器は330点、礫石器は83点、フレイクは2,618点である。剥片石器では破片を含め石鏃が多く、ついでスクレイパー、ナイフ類となる。石器は調査区全域から偏りなく出土する。礫石器は過去2カ年の調査に比べ少ない。

石鏃 (1~20)

114点出土している。形のわかるもののうち、有茎のもの41点、無茎の三角鏃が41点、木葉形3点、菱形1点(20)となっている。無茎では基部が内湾するもの(1~9)と、基部が直線的になるものがある。基部が直線的のものはほとんどが破損している。14は頁岩製。それ以外は黒曜石製。

基部が内湾するものでは深く挟り込まれるもの(1~3)、ノッチ状に挟りが入られるもの(4)、緩やかに内湾するもの(5~9)がある。

有茎鏃は、尖頭部と茎部の境が明瞭にほどこされ、凸茎がほとんどである(10~19)。茎部を尖らせるものが多い。15は右側縁が鋸歯状に作り出されている。

石槍 (21~29)

12点出土している。いわゆる石銛(21・22・23・24)、木葉形のもの(25・28・29)、茎部と尖頭部の境が明瞭でないもの(26・27)などがある。29は裏面下端に主剥離面を残す。

石鏃 (30~34)

6点出土している。棒状のもの(30)、剥片の一部に機能部を作り出したもの(31・32)、他器種転用のもの(33・34)がある。30は全縁が摩耗する。31は機能部に原石面を残す。32・33は先端部が磨滅する。33は石鏃転用。34は石槍転用のもので、先端部が摩耗している。

ナイフ・ナイフ類 (35~39)

42点出土している。定型的な柄付きナイフ9点(35・36)と両面調整が施されたもの32点(37~39)がある。37は両端に打面を残す。39は頁岩製。

つまみ付きナイフ (40~45)

14点出土している。うち6点が黒曜石製で、他はすべて頁岩製である。黒曜石製のものは図示した44以外はすべて破損している。41は、使用痕はみられないが、石鏃に転用されている可能性がある。40・45は同素材と思われるメノウ質頁岩が使われている。44はつまみ部上端と、左側面に原石面を残す。

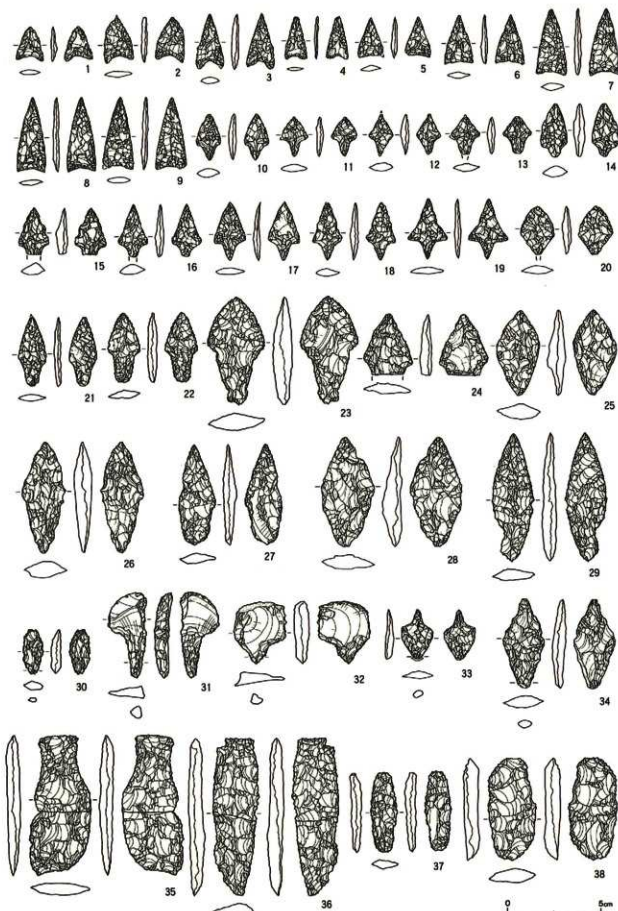
スクレイパー (46~60)

95点出土している。図示したほとんどに使用痕が確認できる。

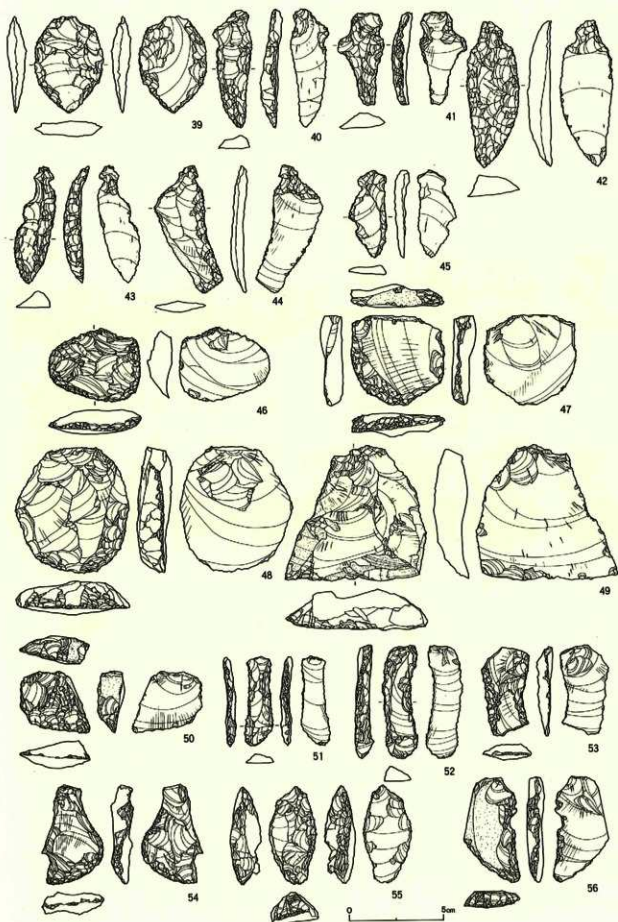
周縁の大部分に刃部をもつもの(46~48・54)、下端に尖る部分をもつもの(49・50・56・59)、縦長で側縁に刃部をもつもの(51・53・55・57・58)などがある。縦長素材の側縁もしくは両側縁に刃部をもつものは多くみられ、棒状原石を利用したものもある。

54は下端部に両面調整の弧状の刃部をもつ。57・58は玄武岩製。60は原石面を残す小型のもの。

4 包含層出土の遺物

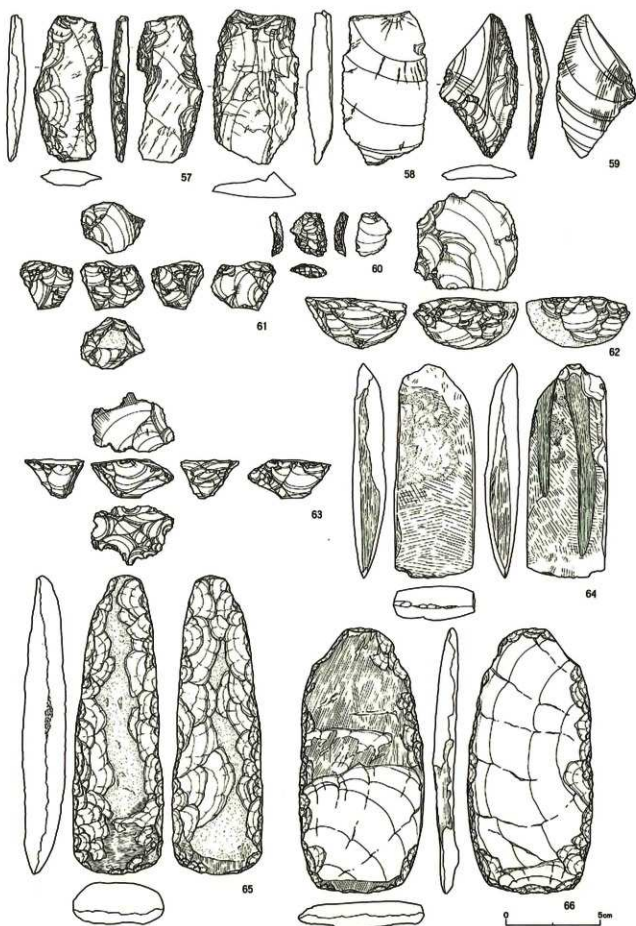


図VI-26 包含層出土の石器(1)

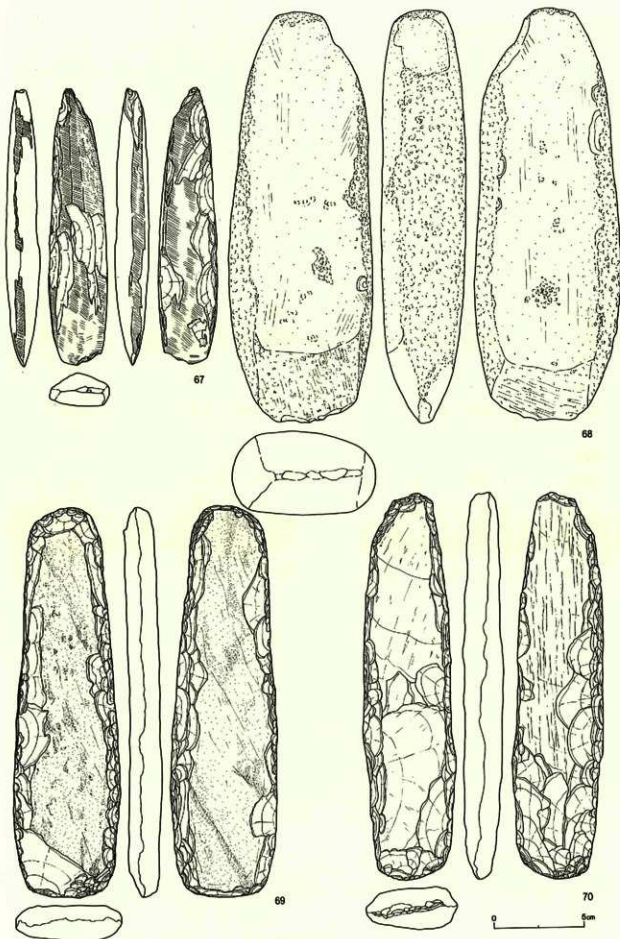


図VI-27 包含層出土の石器(2)

4 包含層出土の遺物



図VI-28 包含層出土の石器(3)



図VI-29 包含層出土の石器(4)

4 包含層出土の遺物

石核 (61～63)

30点出土している。61ほどの小型のものが多い。また原石面を残すものも多くみられた。62は転石を半割後、表皮を剥がす様に剥片を取っている。

石斧・石斧関連 (64～70)

破片を含め102点出土している。64は蛇紋岩製。両側縁には擦り切り痕がみられる。65・66・68～70は刃部に明瞭な擦り痕がみられない。

砥石 (71)

10点出土している。うち6点がスコリア製で、使用痕は明瞭ではない。71を含め、残り4点は砂岩製のもの。

たたき石 (72～75)

29点出土している。棒状礫の一端 (72)、偏平礫側縁 (73～75) に敲き痕をもつものが多い。

すり石

図示していないが4点出土している。北海道式石冠片、亜円礫を素材としたものがみられた。

土製品 (76)

精製された粘土を利用している。豆のさやのような形態で、中空となっている。

台石・石皿

台石21点、石皿10点が出土している。

3ヵ年の調査で出土した台石、石皿についてここで簡単にまとめる。

3ヵ年の調査で出土した台石は114点、石皿は63点である。基本的に、敲打痕がみられるものを台石、すり面がみられるものを石皿とした。敲打痕とすり面両方みられるものについては石皿と分類した。図示した台石、石皿は3枚の包含層が確認された平成9年度出土のものである。Ⅱ-B層は縄文時代前期から中期、Ⅱ-A層は縄文時代中期から後期末葉、Ⅱ-1層は縄文時代晩期から続縄文時代の包含層である。

以下各層で出土した台石、石皿の特徴、傾向を述べる。

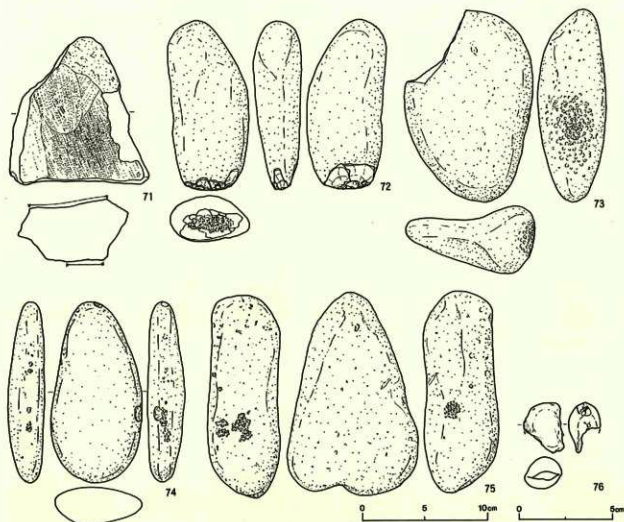
・Ⅱ-B層

台石、石皿とも大型の礫を割り、板状としたものを使用しているものが特徴的にみられる(1・2)。そのほか30～40cm程の比較的小型のトロニウム岩を利用したものがみられる。

・Ⅱ-A層

台石は1.平坦面に散発的に敲打跡があるもの(3) 2.浅い敲打がまとまってあるもの などがあ。礫の周縁部は敲打、もしくは打ち欠きによる調整が施される。中央に凹みを作出するものもある(4)。

石皿は1.すり面が平坦なもの 2.すり面が明瞭に凹むもの 3.すり面部に溝状の穴を有するもの



図VI-30 包含層出土の石器(5)

の(5・6)があり、それぞれ敲打痕がともにあるものがみられる。3については溝状の穴を作出した後、すられているものと考えられる。Ⅱ-A層ではほかの層より多く出土する傾向にある。

石材はトロニエム岩が7割と高い比率を占める。

・Ⅱ-1層

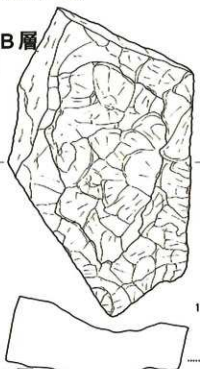
Ⅱ-1層出土の台石、石皿については、形態や石材などⅡ-A層のものと大きな違いはない。台石では平坦面に散発的に敲打痕がみられるものがやや多い。

石材は各層ともトロニエム岩が多く用いられている。これは周辺の河原などで比較的容易に入手でき、その石質が台石、石皿に適していたため縄文時代、続縄文時代を通じて利用され続けたものと思われる。他の石材では安山岩が多い。

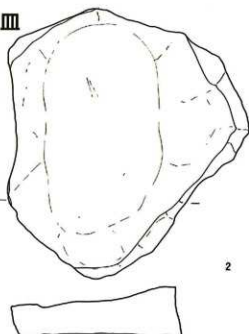
また台石、石皿とも被熱しているものが多い。

(愛場和人)

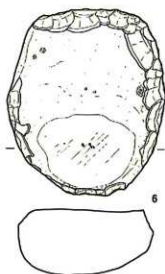
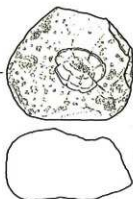
Ⅱ-B層
台石



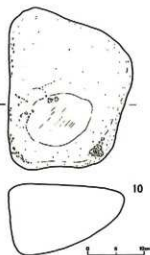
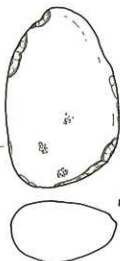
石皿



Ⅱ-A層



Ⅱ-1層



図Ⅵ-31 滝里安井遺跡の台石、石皿について

表VI-2 遺構規模一覧

遺構名	位 置	規模(開口部:長軸×短軸/壕底部:長軸×短軸/深さ) m	長軸方向	確認面の標高(m)
P-38	F ₁ -522-22・23	1.07×0.90/0.95×0.84/0.50	—	134.727
P-39	E ₃ -518-19	1.07×0.56/0.86×0.35/0.34	N-35°-W	134.57
P-40	F ₁ -522-23	1.17×1.16/0.86×0.80/0.66	—	134.969
P-41	F ₁ -522-23	0.98×0.94/0.79×0.75/0.56	—	135.025
P-42	F ₂ -522-3・4	1.19×0.88/0.86×0.66/0.46	N-16°-W	134.58
P-43	F ₂ -524-19	1.17×1.07/1.21×1.11/0.37	—	134.73
P-44	F ₂ -524-13	1.18×0.85/0.98×0.73/0.39	N-29°-W	134.77
P-45	F ₂ -524-14	0.60×0.58/0.64×0.60/0.34	—	134.79
P-46	F ₂ -524-3	0.94×0.66/0.83×0.51/0.37	N-51°-W	135.05
P-47	F ₂ -524-13	1.07×0.80/0.94×0.71/0.40	N-1°-W	134.87
遺構名	位 置	規模(長軸×短軸×深さ) m		確認面の標高(m)
S-7	F ₂ -522-5	1.04×0.62		134.85
S-8	F ₂ -522-10	1.25×0.70		134.85
F-51	F ₁ -520-21	0.63×0.34×0.06		133.80

表VI-3 遺構出土遺物一覧

遺 構	土器	石鏃	ナイフ	スクレイパー	石斧	たたき石	台石	すり石	石皿	砥石	石核	フレイク	フレイク	礫片	コハク玉	合 計
P-38							1		3	1				1		6
P-42	2	1			1											4
P-43	9				1									1		11
P-44	106			2	2								2	1		113
P-45	15	1											22	1	1232	1271
P-46	3												3		(完形)	6
P-47			1													1
S-7						1								123		124
S-8	4												3	227		234
合計	139	2	1	2	4	1	1		3	1			30	354		538

表VI-4 遺構出土掲載土器一覧

図 番 号	遺構番号	遺物番号	出土層位	分 類	図版番号	備 考
VI-7-1	P-43	5	覆土1	Vc	VI-3-6	
◆-7-2	◆	10	◆	◆	◆	
◆-8-1	P-44	—	確認面	VIa?	VI-4-7	
◆-8-2	◆	1	覆土1	◆	◆	
◆-8-3	◆	1	◆	◆	◆	
◆-8-4	◆	1	◆	◆	◆	
◆-8-5	◆	1	◆	◆	◆	
◆-8-6	◆	11	◆	◆	◆	
◆-8-7	◆	11	◆	◆	◆	
◆-8-8	◆	1	◆	◆	◆	
◆-8-9	◆	8	◆	◆	◆	
◆-11-1	P-45	—	城底	VIa	VI-6-1・2	
◆-11-2	◆	37	覆土3	◆	VI-6-3	
◆-11-3	◆	36	覆土1	◆	◆	
◆-11-4	◆	—	◆	◆	◆	

表VI-5 遺構出土掲載石器等一覧

採掘番号	遺構名	遺物番号	層位	器種名	分類番号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	石材	図版番号	備考
VI-6-1	P-38	5	覆1	砥石	ⅢB 3	168×93×94	1,520	砂岩	VI-2-3	被熱
◇-2	◇	1	◇	石皿	ⅢB 2	384×228×134	19,000	トロニエス	—	◇
◇-3	◇	4	◇	◇	◇	342×218×176	16,500	◇	—	◇
◇-4	◇	3	◇	◇	ⅢB 1	272×246×142	14,000	◇	—	◇
VI-7-1	P-42	3	◇	石斧	ⅣA 3	200×64×54	1,080	カンラン岩	VI-3-4	
VI-7-3	P-43	7	◇	◇	ⅣA 2	62×37×18	48.1	緑色泥岩	◇-6	
VI-8-10	P-44	7	◇	スクレイパー	ⅢC 4	86×50×18	73.8	obs	VI-4-6	
◇-11	◇	2	◇	◇	◇	98×34×10	41.4	◇	◇	
◇-12	◇	5	◇	石斧	ⅣA 3	182×59×48	750	カンラン岩	◇	
◇-13	◇	3	◇	◇	ⅣA 2	140×59×22	244.3	片岩	◇	
VI-11-5	P-45	38		石鏃	ⅠA 5 C	17.5×13.0	—	obs	VI-6-3	
◇-6	◇	35	覆1	フレイク	—	50×24×9	—	◇	◇	
◇-7	◇	—		クマ形石製品	—	51×24×26	134.5	蛇紋岩	VI-6-4~8	
◇-8	◇	14		コハク製平玉	—	1.11×0.36	0.35	コハク	VI-6-3	
◇-9	◇	29		◇		1.09×0.4	0.37	◇	◇	
◇-10	◇	15		◇		1.08×0.38	0.25	◇	◇	
◇-11	◇	23		◇		1.08×0.51	0.49	◇	◇	
◇-12	◇	25		◇		1.03×0.39	0.32	◇	◇	
◇-13	◇	24		◇		1.04×0.35	0.31	◇	◇	
◇-14	◇	6		◇		1.06×0.39	0.36	◇	◇	
◇-15	◇	12		◇		1.05×0.40	0.36	◇	◇	
◇-16	◇	27		◇		1.06×0.38	0.33	◇	◇	
◇-17	◇	3		◇		1.04×0.34	0.31	◇	◇	
◇-18	◇	4		◇		0.99×0.22	0.15	◇	◇	
◇-19	◇	8		◇		0.96×0.32	0.24	◇	◇	
◇-20	◇	26		◇		1.00×0.31	0.25	◇	◇	
◇-21	◇	2		◇		0.94×0.38	0.26	◇	◇	
◇-22	◇	20		◇		0.97×0.27	0.21	◇	◇	
◇-23	◇	7		◇		0.93×0.54	0.35	◇	◇	
◇-24	◇	16		◇		0.90×0.18	0.12	◇	◇	
◇-25	◇	5		◇		0.88×0.24	0.14	◇	◇	
◇-26	◇	18		◇		0.88×0.24	0.15	◇	◇	
◇-27	◇	22		◇		0.90×0.21	0.11	◇	◇	
◇-28	◇	11		◇		0.90×0.41	0.24	◇	◇	
◇-29	◇	19		◇		0.85×0.18	0.11	◇	◇	
◇-30	◇	21		◇		0.78×0.24	0.11	◇	◇	
VI-11-31	P-45	17		◇		0.8×0.32	0.15	◇	◇	
◇-32	◇	9		◇		0.82×0.23	0.12	◇	◇	
◇-33	◇	10		◇		0.75×0.70	0.12	◇	◇	
◇-34	◇	1		◇		0.71×0.28	0.10	◇	◇	
◇-35	◇	28		◇		0.70×0.22	0.08	◇	◇	
◇-36	◇	13		◇		0.62×0.18	0.05	◇	◇	
VI-13-1	P-47	1	壁	ナイフ	ⅢB 2	60×26×9	—	obs	VI-7-4	

表VI-6 包含層出土の掲載土器一覧

図 番 号	発 掘 区	遺 物 番 号	層 位	分 類	図版番号	備 考
VI-16-1	F ₂ -526-17	1	II	III	VI-8-1	
◇ -2	F ₂ -522-19	13	I	◇	◇ -2	
◇ -3	F ₂ -522-24	1	II	◇	◇ -3	
◇ -4	F ₁ -518-10	1	◇	◇	◇ -4	
◇ -5	F ₁ -518-8	1	◇	◇	◇ -5	
◇ -6	F ₂ -524-20	1	I	◇	◇ -6	
◇ -7	F ₁ -520-6	24	II	◇	◇ -7	
◇ -8	F ₂ -526-24	1	◇	IV	◇ -8	
◇ -9	E ₂ -518-25	35・41	◇	III	◇ -9	ベンガラ付着
◇ -10	F ₂ -524-21	1	◇	◇	◇ -10	
◇ -11	F ₂ -526-3	1	◇	◇	◇ -11	
◇ -12	F ₂ -524-21	25	◇	◇	◇ -12	
◇ -13	F ₂ -522-7	25	I	◇	◇ -13	
◇ -14	F ₂ -526-23	1	II	◇	◇ -14	
◇ -15	F ₂ -524-21	21	◇	◇	◇ -15	
VI-17-16	F ₂ -522-20	6	II	IV	◇ -16	
◇ -17	F ₂ -522-25	1	◇	◇	◇ -17	
◇ -18	F ₁ -520-4	24	◇	◇	◇ -18	
◇ -19	F ₁ -520-3	2	◇	V a	◇ -19	
◇ -20	F ₁ -520-12	5	◇	◇	◇ -20	
◇ -21	F ₁ -520-8	4	◇	◇	◇ -21	
◇ -22	E ₂ -518-25	46	I	◇	◇ -22	
◇ -23	F ₁ -520-12	23	II	◇	◇ -23	
◇ -24	F ₂ -526-18	17	I	IV	◇ -24	
VI-18-25	F ₁ -520-16	5・10	I	V c	VI-9-1・2	
	◇	1・9	II	◇		
◇ -26	F ₁ -520-16	1	II	◇	VI-9-3	ベンガラ付着
	◇	10	I	◇	5・6	
VI-19-27	F ₂ -524-2	1・5	II	◇	VI-10-1・2	
	F ₂ -524-6	1	◇	◇		
	F ₂ -524-7	1	◇	◇		
◇ -28	F ₁ -526-19	6	III	V c	VI-10-28	
◇ -29	F ₂ -526-23	4	II	V	◇ -29	
◇ -30	F ₂ -522-3	5	I	V c	◇ -30	
◇ -31	F ₂ -522-5	3	II	◇	◇ -31	
VI-19-32	E ₂ -518-18	14	I	VI	VI-10-32	
◇ -33	F ₂ -526-18	17	◇	V c	◇ -33	
◇ -34	E ₂ -518-25	56	◇	◇	◇ -34	
◇ -35	F ₂ -522-25	2	II	◇	◇ -35	
	F ₂ -524-21	2	◇	◇		
◇ -36	F ₁ -524-16	1	I	◇	◇ -36	
◇ -37	F ₂ -522-19	1	II	VI	◇ -37	
◇ -38	F ₂ -522-25	2	◇	◇	◇ -38	
◇ -39	F ₂ -524-6	10	◇	◇	◇ -39	
VI-20-40	F ₁ -520-1	1	◇	V c	◇ -3	
	F ₂ -522-6	10	◇	◇		
◇ -41	F ₂ -520-9	1・4	II	◇	◇ -41	
◇ -42	F ₂ -518-7	4	◇	V c	VI-11-42	
◇ -43	F ₂ -526-19	19	I	◇	◇ -43	
◇ -44	F ₂ -522-24	2	II	◇	◇ -44	

遺構一覧表・遺物一覧表

図 番 号	発 掘 区	遺 物 番 号	層 位	分 類	図版番号	備 考
VI-20-45	F ₂ -522-18	1	II	V c	VI-11-45	
◇ -46	F ₂ -526-21	1	I	◇	◇ -46	
◇ -47	F ₁ -520-12	23	II	◇	◇ -47	
◇ -48	F ₁ -518-14	8	I	◇	◇ -48	
◇ -49	F ₂ -520-3	12	◇	◇	◇ -49	
◇ -50	F ₂ -524-2	1・5	II	◇	◇ -50	
VI-21-51	F ₂ -524-11	23	II	V c	◇ -51	
◇ -52	F ₁ -520-9	1	◇	◇	◇ -52	
◇ -53a	F ₁ -520-6	2 B	◇	◇	◇ -53 a	
◇ -53b	◇	◇	◇	◇	◇ -53 a	
◇ -54	E ₃ -518-25	8	◇	◇	◇ -54	
◇ -55	F ₂ -526-19	19	I	VI	◇ -55	
◇ -56	E ₃ -518-25	18	II	V a	◇ -56	
◇ -57	F ₁ -518-20	5	I	V c	◇ -57	
◇ -58	F ₂ -520-3	12	I	◇	◇ -58	
◇ -59	F ₂ -522-20	10	◇	◇	◇ -59	
◇ -60	F ₁ -520-1	1	II	◇	◇ -60	
◇ -61	F ₁ -520-1	1	◇	◇	◇ -61	
◇ -62	F ₁ -520-23	1	◇	◇	◇ -62	
VI-22-63	F ₂ -522-6	9	◇	VI	VI-12-63	
	F ₂ -522-7	11	II	VI		
	F ₂ -522-12	1・2	◇	◇		
VI-22-64	F ₂ -526-21	1	I	V c	VI-12-64	
◇ -65	F ₁ -520-11	13	I	VI a	◇ -65	
◇ -66	F ₂ -524-21	2	II	◇	◇ -66	
◇ -67	F ₂ -524-21	2	◇	◇	◇ -67	
◇	◇	9	◇	◇		
◇ -68	E ₃ -518-22	3	トレンチ	◇	◇ -68	
◇	E ₃ -518-25	32	II	◇		
◇ -69	F ₁ -520-9	20	I	◇	◇ -69	
◇ -70	F ₂ -524-9	2	II	◇	◇ -70	
◇ -71	F ₂ -524-2	1	◇	◇	◇ -71	
◇ -72	F ₂ -520-5	11	◇	◇	◇ -72	
◇ -73	F ₁ -520-8	6	I	◇	◇ -73	
◇ -74	F ₂ -526-22	2	◇	◇	◇ -74	
◇ -75	F ₁ -520-25	1	II	◇	◇ -75	
◇ -76	F ₁ -518-20	6	I	◇	VI-12-76	
◇ -77	F ₂ -522-20	6	II	◇	◇ -77	
VI-23-78	F ₁ -520-8	6	I	◇	◇ -78	
◇ -79	F ₂ -522-19	1	II	◇	◇ -79	
◇ -80	F ₁ -520-21	4	I	VI a	◇ -80	
◇ -81	F ₁ -520-21	4	◇	◇	◇ -81	
◇ -82	F ₁ -518-20	6	I	◇	◇ -82	
◇ -83	F ₂ -522-24	9	I	V c	◇ -83	
◇ -84	F ₂ -524-11	1	II	VI a	◇ -84	
◇ -85	F ₂ -526-23	3	II	◇	◇ -85	
◇ -86	F ₂ -522-5	3	II	◇	◇ -86	
◇ -87	F ₁ -520-16	6	I	◇	◇ -87	
◇ -88	F ₁ -518-25	6	I	V c	◇ -88	
◇ -89	F ₂ -522-6	10	II	VI a	◇ -89	
◇ -90	F ₂ -522-6	10	II	◇	◇ -90	

図 番 号	発 掘 区	遺 物 番 号	層 位	分類	図版番号	備 考
VI-23-91	F ₂ -522-12	3	I	VI a	VI-12-91	
＊-92	E ₁ -520-12	6	II	＊	＊-92	

表VI-7 包含層出土の石器等一覧

器 種 名	分類記号	点数	器 種 名	分類記号	点数	器 種 名	分類記号	点数
石 鏃	IA 4 a	15	ナ イ フ	III B 8	1	砥 石	III B 1	1
	IA 4 b	26	スクレイパー	III C 2	3		III B 2	3
	IA 5 a	9		III C 3	11		III B 8	6
	IA 5 c	32		III C 4	56	石 核	IX A 1	30
	IA 6 a	1		III C 5	10	石 斧	IVA 1	10
	IA 7	3		III C 7	15		IVA 2	14
	IA 8	28	たたき石	VA 1	11		IVA 3	2
石 槍	IB 1	7		VA 2	3		IVA 8	52
	IB 2	4		VA 3	11		IV C 2	24
	IB 3	1		VA 4	1	加工痕ある礫	XB	9
石 錐	II A 1	1		VA 8	3	R フレイク	XA 1	18
	II A 3	2	台 石	VB 1	12	石 皿	WB 2	7
	II A 8	2		VB 8	9		WB 3	3
つまみ付ナイフ	III A 1	14	すり 石	VA 4	1	フレイク	KB	2,618
ナ イ フ	III B 1	9		VA 5	2			
	III B 2	32		VA 8	1	合 計		3,133

VI-8 包含層出土の縄紋石器一覧

採図番号	遺 構 名	動 詞	層 位	器 種 名	分類記号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	石材	図版番号	備考
VI-26-1	F ₂ -520-5	6	II	石 鏃	IA 4 b	17.9×14.0×2.4	0.3	obs	VI-14-1	
＊-2	F ₂ -526-19	9	III	＊	IA 4 b	23.5×15.8×3.2	1.1	＊	＊-2	
＊-3	F ₂ -522-20	12	I	＊	IA 4 b	28.8×14.4×3.6	1.2	＊	＊-3	
＊-4	F ₂ -524-24	3	II	＊	IA 4 b	22.3×11.1×1.8	0.4	＊	＊-4	
＊-5	F ₂ -522-24	2	II	＊	IA 4 b	20.6×13.0×3.2	0.6	＊	＊-5	
＊-6	F ₂ -526-21	2	I	＊	IA 4 b	25.4×15.0×3.3	0.9	＊	＊-6	
＊-7	F ₂ -522-19	9	II	＊	IA 4 b	35.1×15.9×3.6	1.7	＊	＊-7	
＊-8	F ₂ -520-1	2	II	＊	IA 4 b	39.6×14.9×2.8	1.5	＊	＊-8	花十勝
＊-9	F ₂ -522-20	7	II	＊	IA 4 b	38.5×15.7×2.6	1.7	＊	＊-9	
＊-10	F ₂ -520-21	2	II	＊	IA 5 a	24.5×12.6×4.3	1.0	＊	＊-10	
＊-11	F ₂ -522-4	18	I	＊	IA 5 c	21.8×13.7×4.6	0.6	＊	＊-11	
＊-12	F ₂ -526-18	10	I	＊	IA 5 c	21.1×12.3×4.5	0.7	＊	＊-12	
＊-13	F ₂ -522-10	12	I	＊	IA 5 c	19.6×14.9×4.3	0.7	＊	＊-13	
＊-14	F ₂ -518-19	5	I	＊	IA 5 c	28.5×14.0×6.0	1.4	頁岩	＊-14	
＊-15	F ₂ -520-9	10	II	＊	IA 5 c	24.9×15.4×6.1	1.5	obs	＊-15	
＊-16	F ₂ -520-9	27	II	＊	IA 5 c	27.6×15.5×5.2	1.1	＊	＊-16	
＊-17	F ₂ -524-11	11	II	＊	IA 5 c	30.4×15.2×3.8	1.1	＊	＊-17	
＊-18	F ₂ -520-14	11	II	＊	IA 5 c	30.8×16.2×3.4	1.1	＊	＊-18	
＊-19	F ₂ -520-6	8	I	＊	IA 5 c	32.1×20.8×3.2	1.0	＊	＊-19	
＊-20	F ₂ -526-21	3	I	＊	IA 6 a	25.6×17.8×4.4	1.5	＊	＊-20	
＊-21	F ₂ -518-3	6	II	石 槍	IB 1	36.8×14.6×3.7	1.5	＊	＊-21	
＊-22	F ₂ -526-4	2	II	＊	IB 1	36.7×16.7×4.4	2.5	＊	＊-22	
＊-23	F ₂ -526-20	15	II	＊	IB 1	56.8×29.7×9.2	12.1	＊	＊-23	
＊-24	F ₂ -520-5	13	II	＊	IB 1	32.5×25.2×5.7	4.2	＊	＊-24	
＊-25	F ₂ -520-1	19	I	＊	IB 2	44.9×22.9×8.2	6.0	＊	＊-25	

遺構一覧表・遺物一覧表

棟号番号	遺構名	時期	層位	器種名	分類番号	長さ(m)×幅(m)×高さ(m)	重量(g)	石材	図版番号	備考
VI-26-26	E ₃ -518-25	49	I	石 槍	IB 1	59.2×22.7×8.5	9.2	obs	W-14-26	
* -27	F ₂ -526-17	3	II	*	IB 1	53.6×19.5×5.2	5.2	*	* -27	
* -28	F ₂ -522-1	3	II	*	IB 2	57.8×27.3×7.5	10.7	*	* -28	
* -29	F ₂ -522-4	19	I	*	IB 3	67.9×22.2×6.1	8.7	*	* -29	
* -30	F ₂ -524-16	5	I	石 錐	IIA 1	23.2×10.7×4.4	1.3	*	* -30	花十勝
* -31	F ₂ -524-11	5	II	*	IIA 3	45.4×20.7×6.3	5.3	*	* -31	
* -32	F ₂ -522-1	8	II	*	IIA 3	32.9×27.5×7.1	6.0	*	* -32	
* -33	F ₂ -520-9	22	I	*	IIA 8	26.5×16.7×4.0	1.3	*	* -33	
* -34	F ₂ -520-3	6	II	*	IIA 8	47.3×21.6×6.1	5.7	*	* -34	
* -35	F ₂ -526-19	22	I	ナイフ	III B 1	74.0×32.5×6.4	16.0	*	* -35	
* -36	F ₂ -526-23	5	II	*	III B 1	82.7×24.6×7.8	16.2	*	* -36	
* -37	F ₂ -524-3	2	I	ナイフ	III B 2	41.9×14.0×7.7	3.3	obs	W-14-37	
* -38	E ₃ -520-24	2	II	*	III B 2	53.9×25.1×7.3	12.0	*	* -38	
VI-27-39	F ₂ -524-2	5	I	*	III B 2	51.1×35.8×8.1	15.7	頁岩	* -39	
* -40	F ₂ -526-1	2	II	ナギサ	III A 1	62.3×20.9×6.8	10.1	*	* -40	
* -41	F ₂ -522-12	6	I	*	III A 1	49.3×24.3×7.9	7.7	*	* -41	
* -42	F ₂ -526-19	15	III	*	III A 1	76.9×28.0×11.0	23.7	*	* -42	
* -43	F ₂ -524-14	2	II	*	III A 1	61.9×21.9×8.5	9.6	*	* -43	
* -44	F ₂ -522-05	15	II	*	III A 1	67.3×36.3×5.7	9.5	obs	* -44	
* -45	F ₂ -524-11	24	II	頁 岩	III A 1	46.2×19.8×4.5	4.9	頁岩	* -45	
* -46	F ₂ -520-2	3	II	スリノハ	III C 2	48.5×39.5×13.0	19.4	obs	* -46	
* -47	F ₂ -526-18	12	I	*	III C 2	48.0×49.5×13.0	27.8	*	* -47	花十勝
48	F ₂ -518-9	7	II	*	III C 2	66.5×60.0×18.0	74.4	*	* -48	
* -49	F ₂ -524-22	5	II	*	III C 3	71.5×75.0×22.0	84.5	*	* -49	
* -50	F ₂ -526-19	2	II	*	III C 3	33.0×47.0×14.5	14.1	*	* -50	
* -51	F ₂ -518-2	7	III	*	III C 4	47.0×15.5×4.8	3.6	*	* -51	
* -52	F ₂ -520-15	4	I	*	III C 4	59.3×19.1×7.6	8.3	*	* -52	
* -53	F ₂ -520-12	3	II	*	III C 4	46.7×25.6×8.1	7.4	*	* -53	
* -54	F ₂ -526-23	6	II	*	III C 3	52.1×31.7×11.8	15.1	*	* -54	
* -55	E ₃ -518-25	21	II	*	III C 4	50.9×25.2×15.9	18.2	*	* -55	
* -56	F ₂ -524-16	7	I	*	III C 4	54.8×29.1×8.2	15.4	*	* -56	
VI-28-57	F ₂ -520-12	8	II	*	III C 4	77.0×35.1×8.9	29.6	安山岩	W-15-57	
* -58	F ₂ -526-18	1	II	*	III C 4	81.9×44.3×13.1	44.9	安山岩	* -58	
* -59	F ₂ -524-6	14	II	*	III C 5	76.3×41.2×7.6	18.6	obs	* -59	花十勝
* -60	F ₂ -518-25	53	I	*	III C 7	23.5×19.5×6.5	2.4	*	* -60	
* -61	F ₂ -520-9	30	I	石 核	IXA 1	27.0×34.0×27.5	20.0	*	* -61	
* -62	F ₂ -526-21	14	I	*	*	27.0×55.5×53.0	81.2	*	* -62	
* -63	E ₃ -518-18	16	I	*	*	21.0×43.5×31.5	19.6	*	* -63	
* -64	F ₂ -524-22	12	I	石 斧	IVA 2	113.0×53.5×13.0	130.9	蛇紋岩	* -64	
* -65	F ₂ -526-22	11	II	*	IVA 1	157.5×58.5×22.0	244.3	片岩	* -65	
* -66	E ₃ -518-25	28	II	*	IVA 2	130.0×66.0×15.5	142.0	*	* -66	
VI-29-67	F ₂ -522-12	12	II	*	IVA 3	152.0×33.0×19.0	132.9	*	* -67	
* -68	F ₂ -522-22	9	II	*	IVA 3	227.0×80.0×46.5	1,560.0	ナツメ	* -68	
* -69	F ₂ -522-12	6	II	*	IVC 2	213.0×50.0×23.0	362.5	片岩	* -69	
* -70	F ₂ -522-12	7	II	*	IVC 2	216.0×59.0×19.5	397.0	*	* -70	
W-30-71	F ₂ -520-4	29	II	砥 石	VIB 2	116.4×111.2×49.2	690.6	砂岩	W-16-71	
* -72	F ₂ -526-17	13	II	たたき石	VA 1	133.6×64.9×37.3	483.0	*	* -72	
* -73	F ₂ -526-17	12	II	*	VA 2	105.7×100.0×53.0	802.6	不明	W-16-73	
* -74	E ₃ -518-19	6	II	*	VA 2	142.5×73.1×29.1	390.0	砂岩	* -74	
* -75	F ₂ -522-6	*	II	*	VA 2	160.4×103.7×73.9	1,500.0	カンラン	* -75	
* -76	F ₂ -526-22	3	II	土製品		26.0×22.0×17.0	1.1	*	* -76	

Ⅶ 滝里9遺跡の調査

Ⅶ 滝里9遺跡の調査

1 調査の概要

平成8年度に続き2年目の調査である。滝里9遺跡は空知川右岸の低位段丘上に位置する。遺跡東側には小河川があり、北側は山崖がせまる。遺跡南側で滝里33遺跡(平成4年度調査済)と連続する。滝里33遺跡では琥珀製平玉が出土した土壌墓が1基検出されている。

2カ年の調査で検出された遺構は土壌7基、Tピット1基、集石2カ所、フレイク集中1カ所、焼土2カ所である。土壌のうちナイフ(P-1・3・7)や大型のフレイク(P-6)、有茎の石鏃(P-3)、円刃の石斧(P-7)などが出土した4基について土壌墓の可能性が考えられる。時期はいずれも縄文時代晩期後葉と思われる。

2カ年の遺物総数は154,467点で、内訳は土器32,147点、石器等122,320点である。このうちフレイクが119,266点を占める。土器は縄文時代晩期後葉が主体であるが、縄文時代後期、前期のものも比較的まとまってみられる。

今年度は遺跡南側にあたる旧国道敷地部分について調査した。道路敷地部分の包含層は削平されていたが、急斜面となる調査区南側は包含層が残っていた。特に調査区南東側の旧河川縁辺のフレイク集中、焼土の周辺からは縄文時代晩期後葉の遺物が多量に出土した。調査区南西側にも旧河道跡が検出されたがこの周辺は遺物が希薄であり、斜面下は常に冠水する状況であった。このため道路敷地部分と調査区南西側は重機併用の調査を、調査区南東部は主に手掘りで調査を行った。

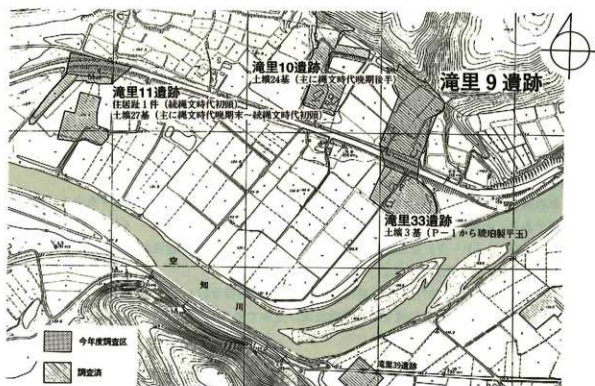
今年度発掘した遺構はTピット1基(TP-1)、集石1カ所(S-2)、焼土2カ所(F-1・2)、フレイク集中1カ所である。Tピットは小判型で、調査区北西部の段丘上から単独で検出された。集石は段丘斜面部にあり、広い範囲で礫や礫石器がみられる。周辺からはIV群b類の土器が出土することから同時期の遺構と考えられる。フレイク集中と焼土2カ所は前述の通り、旧河道縁辺にある。V群c類土器、石鏃、ナイフ形石器、スコリア製の砥石などが集中しており、石器製作の跡とも考えられる。周囲の風倒木痕から石鏃やナイフが多量に出土する例があった。

今年度出土の遺物は54,922点、うち土器3,682点、石器等51,240点である。土器は縄文時代晩期後

表Ⅶ-1 出土遺物一覧

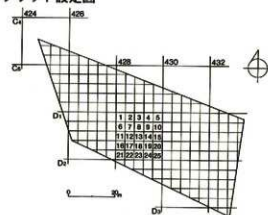
名 称	点 数		名 称	点 数		名 称	点 数	
	遺 構	包含層		遺 構	包含層		遺 構	包含層
Ⅱ 群 土 器		30	石 鏃		157	石 皿	1	2
Ⅲ 群 土 器		59	石 槍		6	砥 石	2	31
Ⅳ 群 土 器	54	205	石 鏃		4	石 核		23
V 群 土 器		3,302	つまみ付ナイフ		6	原 石		
Ⅵ 群 土 器		32	ナイフ・ナイフ類	1	93	剥 片	4	50,440
不 明 土 器			スクレイパー		146	R フレイク		50
			石斧、石斧関連	3	20	加工痕ある礫		10
			た た き 石	8	7	土・石製品		
			台 石	2	12	礫・礫片		207
			す り 石	1	4			
合 計	54	3,682	合 計				229	51,011
		3,682						51,240

1 調査の概要

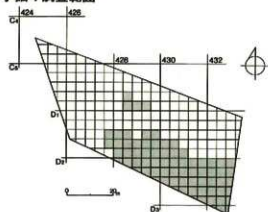


図Ⅶ-1 遺跡の位置図

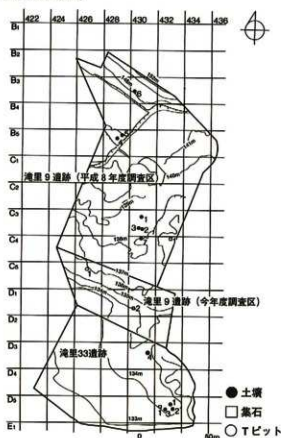
グリット設定図



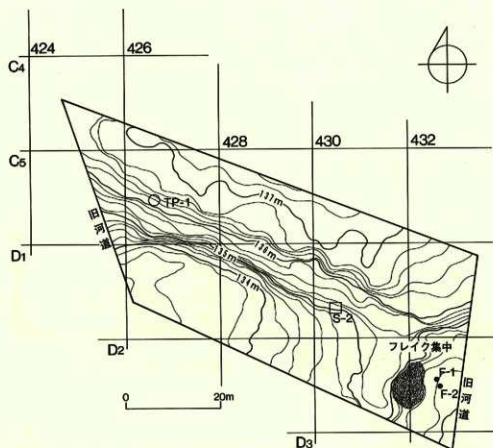
手掘り調査範囲



年度別調査範囲



図Ⅶ-2 グリット設定図・手掘り調査範囲・年度別調査範囲



図Ⅶ-3 最終面の地形と遺構位置図

葉が主体であるが、縄文時代後期中葉のものも次いで多い。剥片石器では石鏃、ナイフ形石器、スクレイパーが特徴的に出土する。石鏃は無茎の三角形のものが卓越する。(愛場和人)

2 基本土層

国道敷地より南側の斜面および平坦面に包含層が残っていた。図示したのは平坦面部分の土層である。

基本土層は以下の通り。

I層：攪乱土、盛土

II層：黒色土、黒褐色土層 遺物包含層。遺跡南西部では粘質土となる。斜面部は比較的厚く堆積する。

III層：黄褐色砂礫層

(愛場和人)

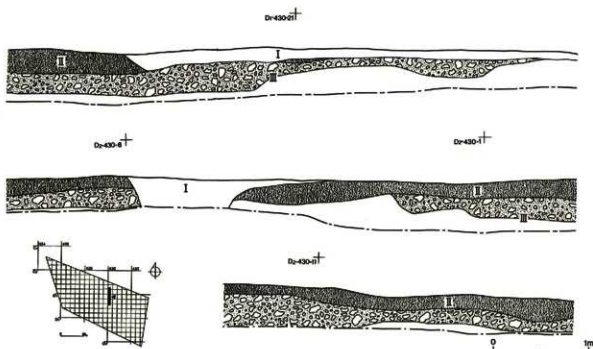


図 VII-4 土層断面図